「閑談　李郎子」

旅路はるかなり

吉岡暁蔵

一章　徳山の旅籠

弥生三月、花冷えのする日のことであった。周防徳山の城下はずれ富田村の木賃宿田中屋に、歳のころ五十を過ぎたであろう老女が宿を請うた。刻はすでに暮れ六つを過ぎ、

日暮れも間近かである。

老女はひどく咳き込んでいた。痩身な体で目鼻立ちは卑しくはないのであるが、長旅のせいなのだろう、やや黒く日焼けした顔に熱のもたらす赤味がさして、体中が疲れに縛られているようであった。

「いらっしゃいませ。今日は冷え込んでお疲れでしょう。さぁ、どうぞ」

宿の娘みつが上がり框に手を引いたとき、老女はばたりと倒れこんだ。

「お客さん、お客さん」

うろたえるみつに

「すみませんね」

と、老女は詫びるなり気を失ってしまった。

宿の主与兵衛と内儀のしげがみつの声に飛び出して来て、

「どうなさった」

老女とみつに心配げな目を走らせた。

「入ってくるなり、いきなりばったりと・・・・・」

「まぁ、とにかく部屋に入れてあげなさい」
足元の草鞋を見て
「今日はだいぶ無理をなさったようじゃの、早くすすぎを用意して」
田中屋という宿は常連客の多い商人宿で、飛び込みの客は珍しく、また飲み食い遊び客は取らず、忙しさとは無縁な田舎宿である。
与兵衛はすぐにみつを医者曾庵のもとに走らせた。ほんの近所である。
しげが手際よく布団に落ちつかせるのを待っていたかのように曾庵がかけつけた。
曾庵の見立てでは、長旅の疲れに風症が重なったものであろうということである。
「今年は春の温みが遅いからの・・・でどうじゃろう曾庵先生、病人ともなるとすぐにでもお役人に届け出たものかいの」
小心な与兵衛は、すでに別の心配に頭が走っているようである。
「明日の朝までには気もつくことじゃろうから、それからでもよかろう。そう長患いにもならんと思うがの」
「じゃそうするとして、食べごとはどうじゃろう」

与兵衛の心配は次から次である。
「粥でも用意しておいて、気がついて食べるというならそのときでよかろう。さほど心配することもないとおもうから、あまり気をもまんようにの」
曾庵は明朝早く来るからと、早々に引きあげて行った。
しげは心配のあまり、気がつくまではと老女のそばを離れず見守り続けた。
布団が温まったのだろう、五つ半前に正気を取り戻した老女は、すぐにはおのが身の事情が呑みこめないらしく、枕の上で八方に目を走らせた。
「やっと気がつきなさったかの。何も心配することはないからの」
しげは老女を落ちつかせるべく、微笑みかけながら布団の上に手を添えて話しかけた。
「今日は道に迷うて、やっとの思いでここまでたどり着いたのは覚えておりますが」
話しながらも咳き込みはおさまらない。
「心配ないて、いまお茶をお持ちしますが、粥でも口にしなさるかいの。お腹もすいてることじゃろう。早う元気になるためにもお腹がすいたままじゃ体に悪いからの・・・、

すぐ持ってくるからこのまま待ってなされ」
しげにもやっと安堵が見えた。
翌朝、霜を踏んで曾庵が顔を出したときは、まだ老女は目覚めていなかった。夜中の粥と、しげの心遣いが長く深い眠りを与えたようであった。
「あれからどうじゃった」
囲炉裏端に腰を下ろした曾庵が、土間で忙しそうに立ち働くしげに話しかけた。
「夜半近く粥を召し上がってすっかり落ち着かれたようで、こっちも安心いたしました」
手を休めることなく返答した。奥からは時折老女の咳き込みが聞こえ始めた。
「先生、朝早うからすみませんの。昨晩はええ按配に客がなかったので何かと良かったわ」
裏口から入って来た与兵衛が挨拶しながら囲炉裏の火を挟んで腰を下ろした。
「いやの、旅人と言うものは、どんな持病持ちか、何で具合が悪るうなったもんか分からんことが多いもんで困ったもんじゃ」
曾庵の正直なところだろう。

「そうですの。私らもどうしたもんやら見当がつかんで・・・みつ、ちょっとお客さんの様子を見て来い。今の咳具合じゃお目覚めかも知れん」
布団の中の老女を挟んで、曾庵と与兵衛が座ったのはそれからすぐだった。
曾庵が熱と脈と目を見ていった。
「あんた、随分無理をなさっているようじゃが、どこから来て、これからどこに行きなさる」
何から話そうかと思案していると見えて、老女はなかなか口を開かない。
与兵衛のほうが乗り出すように、
「ところで名は何と言いなさる。名を知らんも不便での」
老女は時折咳き込みながら、ひとまず口を開いた。
「申し遅れて申し訳ないことでございます。名は七重と申します。あと、何から申し上げたらよいものかと」
深く思案する様子を、曾庵がなだめた。
「何も取調べをしようと言うのではない。気を楽にして、思い悩みは体に毒じゃ。咳も

多少落ち着いたようじゃが、あと薬を作って進ぜよう。まず、朝餉を取りなされ、薬と思うての」

七重と名乗った老女は、朝餉に用意された粥も多くはとらなかった。与兵衛の、

「客人が病いで長逗留になるようじゃと、お役人に届け出ることになっておるでの、話にくいこともあるかも知れんが、一応のところ聞かせてもらおうかいの」

というところから、七重の身の上話が始まった。

「父は播州赤穂淺野藩家中、武林唯七と申します。そも武林家は豊公朝鮮出兵のみぎり、今の芸州淺野公の捕らわれ者として連れこられた、明国の武将であった武林降と申す者に始まっておるそうにございます。明国人でありながら叡智にすぐれ、武芸も人に勝る者であったことから家中の武士に取り立てられ、渡辺姓を名乗っておりました。我が父唯七はその孫に当たり、次男として生まれついたもので分家して、祖父の原名から武林姓を起こし、淺野公の分家赤穂藩に仕官いたしたそうでございます。お聞き及びのこととは存じますが、赤穂淺野家は吉良家の一件からお家断絶となり、父唯七は吉良家討ち

入りの一人となったばかりに科人として切腹して果てた次第でございます。その時私は三歳になったばかりで、母から聞いた話でございますが、そのあとすぐに江戸ところ払いとなり、赤穂にも戻れず、東海道筋を流れ歩くうち、私が十四の折、それまでの無理がたたったのでしょう母が先立ったのでございます。それからというもの、人様にお聞かせできるような暮らしではございません。地獄を這いずったのでございます。」

ここまで話した七重に積年の思いがこみ上げてきたのだろう嗚咽に思わず声を詰まらせ、大粒の涙が頬を止めどなく伝った。

聞き役の与兵衛たちにすればなかなか口が挟めない。一息入ったところで、

「悲しいことを思い出させてしもうたの。後の話はまたにしょう。今日はゆっくり休むがいい」

与兵衛の話を継ぎ足すように、曾庵も続けて、

「お役人に届け出ることになっておるが、もうちょっと様子を見てからということで、まず、養生しなされ」

与兵衛と曾庵は、話の成り行きの要領を得ないまま、いったん部屋を出た。

「与兵衛さんよ、しばらく心配じゃろうが、ゆっくり休むが一番じゃろう。お役人に届け出ることはわしが何とかうまくするから、心配せんでええ。それと、あとでおみっちゃんに咳の薬を取りにやっとくれ。そのうち落ち着くと思うから」

曾庵は、そう深く心配する様子もなく帰って行った。

七重の枕があがらぬまま三日が過ぎた。熱も咳具合も一進一退である。間がなすきがな顔を見せる曾庵も、思案の末のことであろう。

「与兵衛さんよ、七重という旅の女のことじゃが、やはりお役人に届け出た方がよかろうと思うがどうじゃろう。今のまま旅を続けさせると、次の宿ではもっと具合が悪うなるように見えるから、ここでしっかり養生させるほうがええように思えるがの。となると」

三月というにまだ囲炉裏に火が入っている。差し向かいの与兵衛もわかっていることである。

「もうちょっと詳しい話を聞いた上でないと、あまり迂遠な話で届けたのじゃ、かえっ

てお叱りを受けることになるのじゃなかろうの」

与兵衛は気が小さく、心配性である。

しげが横から口を入れる。

「長逗留はええけど、旅籠賃の方はええかいの」

「そんな心配はせんでええ。女の一人旅じゃし、法外なかかりがいることもあるまい。それより曾庵先生、あの女、どこから来てどこへ行くんじゃろう。まずこれを聞いた上でないとの」

二人とも、さして大きい問題が引き起こるなどということは思慮の外であった。

「それがの。明日徳山の方に出かける用事ができたもんじゃで、ついでに町奉行所に届けたらと思うての。もうちょっと話は聞いた上でのことじゃが、一応届けだけ済ませておけば、あとで悶着もあるまいからの」

ここで二人の相談はまとまった。旅人からの災難を被りたくない一心が強く働いていたのである。

日に日に暖かさは増していく。四、五日前の寒さが嘘のように、桜の花もちらほら目にするようになった。

曾庵の届け出で、町奉行所与力神田三郎助が突然訪ねてきたのは、中一日おいた穏やかな日であった。

三郎助の聞き取りは、微に入り細にわたった。三郎助にいささか茶の湯の心得があったことから、話が進むにつれやきものに思いの外、興味を示したからである。そも、七重が徳山に来たわけが、津和野のはずれ唐人屋で、やきものを焼いたと伝えられる明国人の陶工が、その昔、共に連れこられた一族の一人であり、今もその子孫が仕事を続けているようであれば、と言うことである。

七重の話も一部始終を長々と語り、三郎助の聞き取りは昼前から日暮れまで続いたのである。七重が話す。

「父唯七、淺野の殿、そのほか討ち入りを共にした浪士の方々の供養のため、いつか西国の有名寺社参詣の旅に出ることを宿願としておりましたが、老いの進まぬうちにと此度思い立ち旅に出たのでございます。途次、母から耳にたこ程聞かされておりました唐

人屋のことを思い出し、太宰府から馬関赤間宮に参拝したあと津和野に回ることを思い立ち、長門の須佐まで運良く船便に恵まれて津和野までたどり着いたのでございます。そこで昔のやきもの窯の様子を聞くに、唐人屋杉ヶ峠のことであろうといわれたものの、山中難所で女の一人旅は無理と聞かされ、山に詳しい達者な男を雇い入れ案内を請うて訪ねたのでございます。そこは地下の者でも棲み着くようなところではなく、今では人影とてなく、耳に聞こえるのは谷のせせらぎと猿の声のみで、墓らしきものもあるにはあったものの、土盛りにやきもののかけらがそれらしく積み上げられていたに過ぎませんでした。あまりといえばあまりの情景に涙が止まらず、とりあえずはあたりの草をむしり、谷水を汲み、そこに野花を添えて祀り事の真似事だけは済ませて参りました。遠い他国で一人で果てた李郎子という人の事を思うにつけ、涙の涸れることはございません」

三郎助は、最後に念押しするように聞いた。

「他国から渡りきた男のこと、知る限りのこと聞かせてくれ」

「来たときは李郎子と言ったそうでございますが、本名ではないようでございます。こ

ちらに来てからは又左衛門とか言ったそうですが、これもまた定かではございません。また、どのような仕事をしたものかについては全く存じておりません。これが李郎子の作ったものというものでもあれば、ぜひ見たいものでございます」

七重の話すたび流す涙は、老いの涙もろさだけではないようである。

三郎助にすれば、いわば他藩の話であり、そう詳しく聞くこともあるまいと思って取りかかったものの、話の発端が秀吉公の朝鮮出兵となれば、当時とすれば毛利藩内の出来事であろうと推測でき、一応のところ萩の本藩やきもの方まで知らせを入れる事が穏当であろうとして、七重には萩からの返答があるまで足止め逗留することを指示して、その日は帰って行った。

半月もするうち七重の風症は回復したものの、奉行所からは何の達しもなく、旅立つこともできない日々が続いていたのである。

そんなある日、一人の男を案内して訪ねてきた。津和野城下で紙問屋を営む金屋金右衛門という男である。曾庵とは、いつか旅の途中病んだおり世話になった縁による知り

合いだそうである。

七重はと言えば、すっかり床も上がり、手持ち無沙汰な毎日である。金右衛門は格好な話し相手となった。

金右衛門の話はこうである。

「紙問屋という商売のかたわら、津和野近くの福川村などから、広く楮、三つ叉など買い付けに歩くことが多く、かねがね唐人屋という呼び名に興味を持って、その由来など調べて見るも皆目要領を得ず、なんぞ知る手がかりなどないものかと日頃から気にかけていたところ、今日、奉行所に紙を納めに行ったところ、与力神田三郎助様より話のあらましを聞き、とるものもとりあえず訪ねきた次第で、帰り次第土地の謂われ書きに書き留め、ぜひ長く伝えたい」

ざっとこうである。話しながら筆立てを取り出し、書き留める準備に忙しい。

「連れこられた唐人の名は何という」

「李郎子という明国人でございます」

七重に対する尋問もどきの話が始まった。話はいつ果てるとも知れない。七重にはよ

ほどの思い入れがあるのだろう、誰と何度話そうと涙の涸れることはなく、嗚咽混じりに話し続けるのであった。

一方、本藩、萩の焼物方では、降って湧いた話に対応策の協議が続いていた。

焼き物方支配、藤屋刑部は苦慮していた。焼物処に限らず、藩中において、こと焼物に関しては、芸州時代と李勺光、石州時代の赤穴内蔵助すなわち李郎子に関しては、総て不明として押し通すこととする法度があったからである。今もし、横合いから当時の話を掘り起こされるような事態となれば、すでに百五十年を超す歳月が過ぎたとは言いながら、毛利藩の名誉にも関わりかねないのである。

藤屋刑部は藩重役に意見、対応策の検討を求めた。困惑を感じたのは皆同じであったが、「此度の一件は益田家老に一任する」ことに決着した。そもそも家老益田家は、この唐人屋李郎子にもっとも深く関わった家なのである。そうはいっても曾祖父元祥の時代のことであってみれば、微に入り細にわたる一部始終が語り継がれているわけではな

いものの、唐人屋が毛利の領内であった時から、坂崎家亀井家と領主が替わり、混乱した時代も、三十数年にわたり手放すことなく、記録に残らぬと言うより残してはならぬ仕事を続けた一切の差配を元祥がとっていたのである。

とりあえず、その七重という女が唐人屋の事情をどこまで知っているものか問いただしてみることとなり、刑部が徳山まで出向くこととなった。七重を萩まで呼び出すことも考えられたが、萩で噂話の広がることを警戒したのである。

徳山奉行所で行われた藤屋刑部と七重の面会には、旅籠田中屋まで駕籠が差し向けられ、丁重に礼を尽くして行われた。しかし、形こそ客人扱いではあるものの、延々と続くうちには、さながら取り調べの様相も時折見せたのである。

「李郎子が朝鮮から渡り来て、唐人屋でやきもの作りをしたことはよくわかった。ところで渡辺某という淺野家中の者は、李郎子には会わずじまいだったのだな」

刑部の聞きたい核心部分である。

「はい。毛利様、坂崎様、亀井様と再三再四、事情お知らせいただくよう願い書を差し

出したそうでございますが、家中混雑とか、支配の外のことであるとかで、生涯会うことは叶わなかったそうでございます。それが曽祖父が亡くなる直前のことだったそうでございますが、毛利様より他藩のことで詳しくはしないが、亀井の殿お許しをいただいたので、訪ね来るもよしと淺野家中の方に言伝があったそうでございます。その時はすでに隠居して、体も動かぬようになっていたそうでございます。それでも、這ってでも行くと周りを困らせたそうでございますが、叶わず終いだったそうでございます」

刑部は七重の話に念を押した。

「と言うことは、唐人屋の李郎子がどのような仕事ぶりであったかについては知らず終いと言うことじゃの」

「そうでございます。亡くなる寸前まで、李郎子に一目会いたい、それは悔やんでも悔やみきれない思いで事切れたそうでございます」

七重は我がことのように悔し涙を浮かべていた。

「そうか。それは残念なことであったの。遠い他国で、生まれついての一族が近くにいながら会えず終いに終わったと言うことは、心中察し申す」

とは言いながら、刑部にとっては胸をなで下ろす返答だったのである。

「ところで、津和野に入ったときのことであるが、唐人屋の此度の一件、亀井殿の町役人どもに詳しく話すことはなかったか。亀井家中にしても昔のことで詳しく知ることもあるまいとは思うが、どうじゃ」

刑部も気がかりなことは残さず聞き置きたい。

「お役人様の方にお話申し上げることはございませんでした。幸い宿の主人が唐人屋にやきものの窯があったことはご存じで、津和野中聞き回っても詳しく知る者はあるまいと言うことでした。私もせっかく遠路訪ねて参りましたこと故、その地を訪ねたいと懇願したところ、山に明るい案内人を世話してくださり、願いが叶うた次第でございます」

「そうか、そなたも苦労が続いたの。それでまた、どうして徳山に」

「それが始めての道でよく覚えていないところもございますが、津和野から案内してくださった方に福川三の瀬と言うところまで連れ立っていただいたのでございます。あと三田尻まで一本道のように聞いて、早のみこみで歩き始めたのが悪く、小峰峠とか言うあたりで右に折れるのを間違えて、あげく迷いに迷ってここに出てきたような次第でご

ざいます。三田尻に出れば上方に船便もあると聞いておりましたのに、惜しいことをいたしました」
七重は生まれついてなのでろう、よく喋った。
「それは難儀であったの。されどあの山越えを一人でするとは、その執念見上げたものじゃ」
刑部は慰めの言葉に感嘆を添えた。
「今こうやって旅が続けられるのも、渡辺家から始まって武林家まで四代にわたる願いに、ご先祖のご加護があったればこそと思うております」
「さもあろう。そなたのことについては殿もお心遣いでの、いずれ何らのよい沙汰があるはずじゃ。旅籠賃などに心することなく、ゆっくり逗留して待つがよい」
七重は思いもかけぬ話の具合に、
「もしもでございますが、毛利様もお手元に李郎子の作ったものでもあれば、萩まで足を運んででも見たいと思いますが、いかがなものでございましょうか」
刑部ははったと息をのんだ。意表をつかれた問いだった。

二章　蔚山から石蕗の里

慶長二年十二月二十二日、朝鮮慶尚道蔚山城に陣する淺野幸長、宍戸元続等日本遠征軍が、朝鮮、明国のその数五万とも十万とも言われる連合軍に包囲され歴史に残る苦戦の幕が切って落とされた。
蔚山城築城から日が浅く、万全の準備態勢が調う間隙を突かれたのである。直前、城内にあった加藤清正軍が一旦釜山の本陣に向かって引き上げたばかりであったが、敵軍来襲の急報で直ちに西生浦からとって返し城に入るには入ったものの、朝鮮、明国連合軍による攻撃は間断なく、大弓、火弓をまじえた弓矢による攻撃が七日八日とつづいたのである。
日本軍は鉄砲による反撃で応戦したのであるが、食糧備蓄が万全でなかったことが苦戦を強いられることとなった。かてて加えてこの年は希に見る寒さである。なんとか戦

局を動かそうとするも、連合軍は大軍であり容易に突破口は見つからない。たかだか十日に満たない日々だが、日本軍にすれば地獄の毎日である。とにかく食料がない。飛び道具による攻防は、体力の消耗だけは最低限に防げるものの、寒中の空腹だけは耐えられない。陽の落ちるのを待って城外に忍び出て斃れた敵兵の所持する食料を拾い集めて来たりするのであるが、これとて焼け石に水、取っても足りない。

後世、壁土や斃れた敵兵の人肉まで食べ、凍死したものも数知れないと語り伝えられたのがこの戦いなのである。

年が明けた一月二日、毛利秀元率いる一万の救援軍が、釜山の本陣から北上、川を背にする蔚山城の西方に上陸奇襲をかけた。これに呼応し淺野、宍戸、加藤軍等の籠城軍も撃って出た。

主力部隊を城の中と外から挟撃された朝鮮明国連合軍は、慌てふためき撤退を余儀なくされたのであるが、総指揮官である李雲龍、楊鎬は、さすが名をはせた武将であり、銀子目当ての素人集団の大部隊を多少の混乱はあったものの、慶州を目指し北上撤退さ

せたのである。

そんな中、どのような手違いによるものか、蔚山城西方に本隊と離れて布陣していた武林降が率いる最前線部隊数百人の部隊に、退却命令が届くことなく置き去りにされてしまったのである。上陸してきた毛利秀元軍と城を撃って出た淺野、宍戸、加藤軍に挟まれ孤立してしまった。

敵将武林降は、戦さに利なしとみるや不利な戦いを避けて早々に白旗を揚げ、淺野幸長の軍門に下ったのである。

この武林降という男、一軍の将だけあってなかなか出来た器で、とくに漢詩をよくしたと言われている人物で、この後、淺野幸長の捕虜として日本に連行されたのであるが、淺野家中の武士に取り立てられ渡辺唯右衛門となり、長く淺野家に仕え、孫は分家し原名武林を名乗り名を唯七と言い、赤穂浪士に一員として名を残すことになるのである。

さて、武林降の淺野幸長への降伏するについての毅然とした申し入れには、幸長も思わず心を動かされたのである。

「この我が部隊には、すでに抗戦する意思はない。我々は皆はるか明国から、金で雇われ戦さに加わっただけで、恨みを持ち、憎しみで戦ったものではない。私が罰を受けることは仕方ないとして、加わってきた兵たちに責任があるわけではない。情けを持って逃がしてほしい。兵たちには妻子家族があり故郷で待っているのである」

と、武林降の願い出は必死であった。

淺野幸長は文禄の役で有益な捕虜連行が出来ず切歯扼腕した思いを晴らさんものと、今度こそ捕虜の吟味に力を入れようとおもった矢先のことだっただけに、大いに迷った。

しかし、捕虜として後日国許で役立つ者でもいれば連れ帰りたい思いも強く、一応の吟味はしたのであるが、やはり銭で雇われた賤民集団であってみれば目に適う者とてなく、武林降に付き従い日本に行くと申し出た者数名だけにとどまった。

残った雑兵たちについては、毛利秀元ほか各武将の了解の許、北に向かった本隊を追うことなく、西の大邱に向けて追い立てるように解き放ったのである。

武林降と行を共にするといった者の中に、一人のやきもの職人が居た。名を李郎子と言い、まだ十七歳という若者であった。

この李郎子であるが、物心つくころからやきもの仕事に携わり、すでに一人前の腕を持ち、このたび朝鮮の援軍に加わったのも雇われの銀子目当てで、帰った暁には自分の窯を持つ夢を果たさんと、希望に満ちた出兵だったのである。

武林降は故郷に帰り窯を持つ夢を果たせと強く言い聞かせたのであるが、本隊と離れていつ帰れるかもわからないし、無事帰ったとしても銀子にありつけるかどうかわからないので、親とも慕う隊長武林降について日本に渡るとこれまた譲らなかったのである。

ここで残念なことであるが、淺野幸長の領地甲州にはやきものの足がかりがなかったことで、幸長自身やきもの職人に執着しなかったことから、同じ籠城軍の宍戸軍、吉見軍にして李郎子を横取りされることになり、李郎子もまた武林降を慕い続けながら生涯二度と会うことのない道を歩み始めることになったのである。

淺野軍による捕虜吟味を垣間見た吉見広長家中の武将斉藤市郎左衛門が、やきもの職人という李郎子に目をつけ、ぜひに譲り受けたい旨申し入れたが、すぐに色よい返事というわけにはいかなかった。李郎子が「うん」と言わず、吉見家中の者からと言うことが、やはり力関係からなのであろう、淺野に即答させなかった。

斉藤市郎左衛門は、やきものを愛でる才は持ち合わせてはいないのであるが、文禄の役のさい多くの大名たちがやきもの職人を連れ帰り、それなりに成功を見せていることを聞き、己が領地津和野近くの福川村杉ヶ峠に質の良い粘土が埋蔵されていることから、ぜひにもこの職人がほしいのである。

返事のもらえぬ市郎左衛門は、宍戸軍の武将であり戦友でもある赤名元寄に相談を持ちかけた。話はすぐに宍戸元続のもとに飛び、否応なくもらい受けは決まったのである。

がしかし、後々悶着の種になることとなったのが、誰の手にもらい受けたのか判然としないまま話が決着してしまったことによる。

宍戸元続、赤名元寄ともに自分たちの手中に収めたと思い込んでしまい、さっさと宍戸の陣営に連れ帰ってしまったのである。市郎左衛門にすれば横取りされた気分で腹の虫が納まらない。

「やきもの職人李郎子のことといかがなった」

市郎左衛門は元寄と顔を合わすたび、話の成り行きを問いただすのであるが、

「待て待て」

の一点張りで、確たる返事どころではない。

そればかりか、李郎子を連れ歩き、荒れ果てた窯場を見つけては轆轤を挽かせたり、窯仕事の思いついたことを聞く毎日である。そも元寄は宍戸五龍山城近くの安芸郡山で、文禄の役で連行されたやきもの職人李勺光の仕事を幾度か見たことがあり、轆轤仕事を見ただけでどの程度の職人か目安をつける自信があった。

李郎子の轆轤技は見事なものであった。年端はいかないものの、生まれ故郷の杭州で培った大人顔負けの年季仕事を見せたのである。

慶長三年も五月となって、朝鮮の戦さは日本軍の不利に推移する中、遠征軍の総帥毛利秀元が豊臣秀吉への戦況報告のため帰国することになった。秀吉は醍醐の花見以来体調が思わしくなく、気力の衰えも手伝ってか朝鮮の戦線も縮小策に転じ、各武将に順次帰国の命令を発するようになっていた。

秀元は宍戸軍は朝鮮に残したものの、赤名元寄と李郎子はさっさと連れ帰り、広島の元寄の屋敷に預け住まわせたのである。

斉藤市郎左衛門の激怒したことは言うまでもない。吉見広長までがなだめ役に回るほどであったが、最後には赤名元寄は殺しても飽き足りないと公言し、半狂人のように振る舞い続けたのである。

一方、毛利家中では李郎子を、先の文禄の役で連れ帰り安芸の山中で仕事を続けさせている李勺光と引きあわせ、すぐにでも仕事に取りかからせたい存念であったが、ただ一回の顔合わせではあったが李勺光とうまく折り合う気配が見えず、これを断念するしかなく、いずれか新しい土地で独自の窯を開く方向で検討が進み始めたところに、石見

銀山奉行である家老益田元祥が李郎子を預かると言い出したのである。

益田元祥は毛利家中きっての切れ者として知られ、先を読み、何かと目論見の立つ男である。

そんなある日、元祥は赤名元寄を呼び李郎子のことを尋ねた。

「その方が連れ帰ったという李郎子とか言う男、腕は確かであろうの」

「そのように見受けております。ただの一回ではございますが轆轤を挽かせた見て、この男は間違いないと思った次第でございます」

元寄もまさか元祥から直に聴聞があろうとは予期していなかった。宍戸家中では相応の家格があるとはいうものの、益田家老と差しの話では一歩も二歩も引かざるをえない。言葉つきまで気を遣う。

「その時、何を作った」

「丈が一尺五寸を越す壺を一気に挽き上げて見せました」

「ほぉ、そうか。茶碗を作ったのではなかったのか」

元寄は、やはり茶碗作りに期待があったのかと早合点をした。

「あれだけの腕があれば、茶碗などもそこそこ挽きこなすものと存じます」
元祥には何か思惑でもあるのか、元寄の話の一部始終に耳を貸すでもない。
「まぁ、茶碗の方はどうでもいいが・・・ところで、そちは宍戸殿の家中であったの」
話は一転した。
「はい、父の代より仕えさせていただいております」
「そうか。宍戸殿には話が詳しゅうなったらわしの方から話は通すが、実はやきもの仕事についてじゃがの、わしにちょっとばかり思うところがあっての、近いうち京に上ることになっておるが、戻るまでにはどうするかも目処が立つじゃろう。そう長居にもならんと思うが戻るまで李郎子とか言う職人をしっかり預かって、とにかく早う日本の言葉を教え込んでやれ。これから先話も思うように出来んようじゃ不便じゃからの」
元祥は腹を見せるでなく、肝心なところは曖昧な話に終始した。元寄は元祥の思いえがく計画案など、勿論想像さえ出来なかったのである。
元寄はすでに李郎子を引き取っていたが、早速家士の伝助に言葉の指南を命じた。伝

助という男、根からの陽気者で人怖じするでなく、結構根気もあるところから適役である。
李郎子はと言えば、捕虜の身であり、暮らしに関しては何のわがままが言えるでなく、ただ一人知り合いがいるでもなく、言葉も思うように通ぜずで落ち込むばかりの毎日が続いていたのであるが、伝助との言葉のやりとりは思うに任せぬことが多いのであったが、大きい救いともなっていたのである。
暑さの残る八月上旬、益田元祥の帰藩を境に李郎子を取り巻く状況が大きく動き出したのである。
元祥は上洛の折、藩主輝元、毛利秀元と協議の上、李郎子にまつわる仕事一切の権限を手にして戻ったのである。元祥がこの仕事に確信を読み取ったのは、大坂の両替商大塚屋孫兵衛との相談打ち合わせによるものであった。
大塚屋は大坂でも指折りの商人で、大坂北浜に大店を構え店の裏側は淀川に面し、蔵のそばにかなりの大船が横付けできるほどで、金銀銅など金物の商いが多く、石見銀山

奉行の元祥とはすでに長いつきあいで、肝胆相照らす間柄だったのである。

「此度、朝鮮から腕のいいやきもの職人を一人連れ帰ったのだが、なんぞいい仕事はないものかの。やきもの仕事は当たると大きいでの」

「そりゃ益田様、ございますとも。長く続くかどうか見通しのきかないところもございますが、まぁ間違いなく仕事になることが一つ」

「ほう。で何を作るのじゃ」

「この仕事をやるには、総てのことを極秘に進めなければなりませんが、果たして出来ますでしょうか。やきものを焼くところから始まって、闇から闇で誰に気取られることなく私の蔵に納めていただきさえすれば、あとは何の心配もなく」

「そのくらいのことは何とでも手を打つ。で、作るものは何なのじゃ」

「はい。茶壺でございます。お聞き及びとは存じますが、先年納屋助左衛門が呂宋から仕入れて大儲けをした、あの茶壺でございます」

「そうか、わしの思惑も一概にはずれてはいなかったか。しかし気がかりだったのは、

助左衛門の悪だくみが露見して今では人の口の端にも上らぬと聞くがの」

「益田様そこでございます。利休様も亡くなられ、太閤様のお具合も良からぬように聞く今ではございますが、醍醐のお花見をみましても、まだまだ茶の湯は捨てたものではございません。ここのところが大事なところでございます。助左衛門の茶壺は周りのやっかみから異国の安物と言いふらされて、値は下がる、助左衛門は日本を追い出される始末となりましたが、茶の湯の世界で要らなくなったわけではございません。今は幸い日本に持ち込んでくるものはおりません。しかし人間ないものを欲しがるのは人情、今でも裏に回れば呂宋壺を探し求める者は結構おりますし、本物となれば相当高値の商いになっております」

「そんなものかの。いやわしもの、やきもの仕事には何か大きい穴場仕事があるとは思うておったが。やはりの」

「ここが肝心なむつかしいところでございますが、本場物でなければなりません。だから日本で作っても本場物にしてしまう企みをしなければなりません」

「それは何とかなるじゃろう。そちにも手を貸してもらうことになろうがの」

「そりゃ出来ますことなら何なりと・・・」
おそらく、このような遣り取りで仕事の段取りは運び、話が出来上がったに違いないのである。

益田元祥は石見銀山から西の方で、自領に近く人目につかぬ場所を探したい。しかし、粘土があると言うことが絶対条件である。
益田元祥から赤名元寄に呼び出しがかかったのは、元祥が上方から帰ってすぐの九月差し入りであった。久しく石見の国許に帰っておらず自領のことも気がかりと言えば気がかりであったが、何は置いても李郎子の仕事を進めることが今は急務である。
「元寄、そちは今日から毛利家直参家中に加わることとなったので、さよう心得よ」
上洛前と違って、元祥の態度はやや高圧的になっていた。
「ありがたき幸せに存じますが、宍戸殿の方には」
元寄にすれば、思いもかけぬことに複雑な思いが走る。
「そのようなことは心配要らぬ。輝元公直々の達しじゃ。それよりこれからの役目じゃ

が、李郎子の仕事もっぱらでよい。指図については一切わしがする。手足となって励んでくれ」
元寄にすれば身震いするような話である。しかも元祥から「励んでくれ」と頼まれたのである。
「はい。そのようなことであれば、一命を賭して努めさせていただきます」
「ところで、岩見のわしの国許近くでじゃが、良い粘土が出るというような話を聞いたことはないかの」
元寄はすぐに、朝鮮で李郎子の話が始めて出たときの、斉藤市郎左衛門の話のかけらを思い出した。
「李郎子のことの始まりのときのことでございますが、吉見家中の斉藤市郎左衛門という福川三の瀬城を預かっておる者が、淺野公に李郎子を所望した折、福川の山奥杉ヶ峠によい粘土があるように申しておりました」
「そうか。福川村というと、吉見の領内じゃの。あそこは確か人里離れたところではなかったか」

元祥は、おぼろげな記憶しかないその土地の位置関連を、頭の中でめくってみた。
「さて、私も詳しくはいたしませんが、津和野と福川をつなぐ道沿いで、難所の峠近くのようでございます」
「よし。早速吉見から土地の図面を手に入れて調べてみるとして、すぐにその杉ヶ峠とやらに出かけて、李郎子に粘土やあたりの様子を見せることじゃ」
元祥の話は一つ一つが即決である。
「吉見は今朝鮮に出かけて留守の筈じゃの」
「はい、そうでございます」
「今なら人目にもつくまい。四五日うちにはわしも国許に帰るから、李郎子を連れて同道せい」
何とも急な話である。しかし、元寄は元祥がよほどの計画を心中に持っていることだけはわかってきた。

赤名元寄は今二十二歳の若さであるが、昨年父が五十を前に中風で倒れ、命は取り留

めたものの城勤めが適わぬこととなり、急ぎ元寄が家督を継ぎ父母は隠居の身となったのである。元寄はまだ独り身であり、十七になる妹久世との四人暮らしで、屋敷内の家士棟に女房子供と住まう家士の伝助と通いの女中二人が暮らし向きを手助けしていた。
元寄が李郎子と家士の伝助を連れて、戻り来る日もわからぬ慌ただしい旅立ちをしたのは元祥と話した四日後のことだった。勿論、二十人近い供を連れた元祥の一向に従ってのことである。
中国の山なみを西に向かって山中を横ばいするように歩き、途中二晩泊まりにはなったが、三日目の昼前には杉ヶ峠につくことが出来た。天候に恵まれたことが歩くに幸いしたのである。

李郎子が粘土を見つけるのに刻はいらなかった。旬日前、領内を広く襲った暴風雨が山肌を洗い流し、粘土の地肌をむき出しにしてくれていたのである。元祥は幸先よしと喜んだが、それ以上に、李郎子が粘土を気に入り「使える」とはっきり言ったことに、手を打ち、顔面をほころばせたのであった。

元祥一行と元寄等は、その日の遅く益田に戻り着いた。その夜こそ何の話のでるでなくゆっくりとしたのであるが、夜の明けるのを待つかのように、元寄は元祥に呼び出され、李郎子を中心とする秘密の大事業に縛り付けられることになったのである。

元寄に申しつけられた任務の概要はこうである。

「今後、杉ヶ峠界隈の山地を開発する表向きの名目は、大坂の大塚屋に貸し与え銅の精錬をすることにする。よって許しを得ないものは誰一人立ち入りを禁ずる。寒さが来るまでに寝泊まりするところ、仕事場のあらかたを急ぎ建てること。なに、仕事人夫は石見銀山から回し、要るだけの道具は総て用意するから、そちが心配することはない。ここは一つ肝心なところであるが、吉見家中、周りの里人に仕事を気取られることなく、来年の寒さが来るまでに窯に火を入れたいのじゃが、どうじゃ。出来そうか」

元祥はいつの間に計画を組み立てたものか、その他のことについても細部にわたり綿密に練られていた。と言われても、元寄には見当さえつかぬことであった。

戻り道一人となった元寄は、斉藤市郎左衛門のことが心配の種として頭をもたげてきた。この李郎子の事の起こりは市郎左衛門によって掘り起こされたと言ってもいいのである。いずれ近々帰国しこの里に戻ってくるだろう。今、手がけようとしているこの仕事は、以前市郎左衛門が言った、「李郎子に関わる一切の横取り」もいいところである。元寄にすれば、そうは言っても朝鮮で共に戦った仲なのである。若さから来る一本気が後ろめたさにもなって気が重くなってくるのである。もう考えまいと、思いを振り切ろうとしても頭を離れてはくれない。今更、元祥に相談をかけたとしても、穏やかな決着に向かうことはまずないだろう。己の非力をさらけ出すだけに思える。もう出た目が勝負で腹をくくるよりほかあるまいと、あきらめざるを得なかった。

益田元祥の取った行動は早かった。杉ヶ峠に入る総ての道は封鎖された。津和野から青野山の南側をまわる道は、津和野を三丁と出ないところに、福川村側は三の瀬城の目と鼻の先に高札が立てられた。勿論、毛利藩と大塚屋の連名である。併せて関所ほどではないものの厳重な封鎖柵も設けられた。この封鎖はその後、延々三十数年続き、数々

の悶着を生むことになるのである。
元寄と李郎子は杉ヶ峠にとって返すと、すぐに綿密な窯場の建設計画に入った。地形など李郎子の気に入り、すらすらと運んだのであるが、元寄の想像をはるかに超える大工事である。三四日の内には石見銀山から三十人の人夫が入ってくる。何はともあれそれだけの人数の入れる住居の建設が先決である。そうそう野宿を続けるわけにもいかない。戦場のような毎日はもう朝鮮で懲りごりである。雨にならぬことばかりを祈った。
元祥の指示は細部にわたって伝達されてきた。人夫等の行動は監視され、里人との箝口令も言い渡された。食料補給路は益田から高津川吉賀川をさかのぼって、水路陸路を舟、車力、馬とつないで運ぶのであるが、どの荷物にも大塚屋の旗印を上げさせた。これはその後数年続くことになったのである。

吉見軍の帰国は師走十二月目前であった。案の定、大きな波乱を呼ぶことになった。その火をつけたのは、やはり斉藤市郎左衛門であった。帰国後日を待たず、無事帰国を果たした将士たちの労をねぎらうべく、吉見広行が宴を催したのである。そこには毛利

家の名代として益田元祥、宍戸元続の名代家老の中村勘左衛門がそれぞれ十人近い供を連れて加わったのであるが、これが火に油を注ぐ結果になったのである。
斉藤市郎左衛門が話の口火を切ったのは、宴も進まぬ始まってすぐのことであった。
「益田殿にお尋ねしたい儀がござる。我が所領の山に何の断りもなく封鎖足止めをなされたこと、納得できかねることでござるが、いかなる存念によるものでござろうか」
今まで待ちに待った問いただしである。戦さ帰りの気の荒れたときである。言葉使いにも礼を欠く。
「あぁ、杉ヶ峠のことでござるか。あれは大坂の大塚屋が、銅の精錬に使うということじゃで、毛利が貸し与えたのじゃ」
「それはちと、筋の通らぬ話ではござるまいか。拙者も朝鮮に出ていたことはご存じのことと存ずるが、戻りが待てぬ話でもないと存ずるが、いかがでござる」
元祥もいささかムッとした表情を見せ、
「毛利の所領地のこと、そち如きが口を挟むことではない」
一喝したのである。

市郎左衛門の気は収まらない。
「しからば宍戸家中の中村殿にもお尋ねしたい。朝鮮で捕虜となし、淺野殿より拙者が譲り受けた李郎子なる男、その後いかがなっておりますものか」
「さぁ、知らぬの、聞いておらん。そちが貰い受けたものであれば、そちが番をしておればいいではないか」
何ともとぼけた話に、市郎左衛門はどんどん気持ちのやり場がなくなってくる。
「これは無体なことを、貴家の赤名元寄と連れだってこの四月末に一足早く帰ったと聞き及んでおりますが」
「そうであったかの。わしも忙しい体でそこまで聞いておらんわ。そうそう、赤名元寄じゃがの、今では毛利直参家中となって宍戸を離れたことじゃし、益田殿は何かお聞き及びでござろうか」
「さて、今は人の出入りも大人数のときじゃしの、誰のことか調べて見んことには、今すぐというてもの」
市郎左衛門では太刀打ちできたものではない。話がてんで咬み合わないのである。

「そのように申されるのであれば是非もない。これから拙者は拙者なりに気の済むように調べた上で、毛利の殿に上申書を差し出すまで。左様心得置かれたい」
満座の面前で市郎左衛門の言葉は、ちと口が過ぎた。元祥がすぐに口荒く押さえ込んだ。
「出城の城主か知らんが、吉見の殿を目の前にして無礼であろう。少しは身の程場所柄をわきまえい」
市郎左衛門もここで気後れできるものかと、いっそう頑なになって、
「戦さ帰りで気も口も荒んでいるのはご免被りたい。しかしここまで理不尽が続けば、拙者も出城とはいえ一城を預かる身、武士の面目が立たぬ」
宴の雰囲気は冷え切ってしまった。
「市郎左、今は左様な話の場ではない。これ以上の話は止めい」
吉見広行が、しびれを切らしたように市郎左衛門の口を封じて、
「さぁ皆の者、今日は無事の帰還を祝い、不幸、戻れなかった者どもの供養を兼ねての宴席じゃ。話に花を咲かせながら、久しぶりに里の味を食い、酒を飲め」

座に帰国の喜びを取り戻そうと気を配るものの、市郎左衛門の激しい遣り取りで沈み込んでしまった宴席に生気は戻らず、山城の広くもない桟敷に忍び込んでくる冷たい夜風も手伝って、その夜はさながら通夜のようなまま、いつお開きになったかもわからぬうちに、三々五々城の坂道を下っていったのである。

暗い夜道を篝火に足下を照らされながら高津川のほとりを、酔いを醒ましながら屋敷町に散っていく中に、中間一人を従えていく斉藤市郎左衛門の姿があった。すでにわめき立てる力を失なったのか、相手になる者がいないのか、酒のせいなのだろう時々横に足を取られながら弥栄神社の脇にさしかかったとき、宍戸家の中村家老を取り巻く家臣たちの一団が、面倒を避けるように市郎左衛門を追い越そうとした。

その時である。目ざとくこれを見つけた市郎左衛門が、

「これは宍戸殿の方々、今宵は失礼つかまつった。深くお詫びを申す。されどじゃ、それはそれ、これはこれ、李郎子のことは忘れはせぬ。後日、必ず詮議の上、拙者の手元に頂戴いたす。しかとお忘れなきよう」

ちょっと呂律もあやしい。相手にするも面倒と、黙って通り過ぎようとしたのであるが、市郎左衛門は一人の男を見つけ、

「ちょっと待たれい。そこの者中山梅之進ではござらぬか。よもや拙者をお忘れでもあるまい。赤名元寄と一緒に李郎子を譲り受けたとき」

梅之進は元寄と朝鮮出兵を共にした連れなのである。名指しは迷惑とばかり市郎左衛門の言葉を遮って、

「拙者、詳しくは知り申さぬ。そのような言いがかりの相手はご免被る」

この一言で、酔いも手伝い市郎左衛門の癇癪にまた火がついた。

「言いがかりと申されるか。李郎子なる男知らぬと申すか」

「知らぬとは言うておらぬ。その後のことは存ぜぬと言うのじゃ」

中山梅之進は宍戸家中で知られた剣の使い手である。それだけに刃傷沙汰は避けたいのである。

「これはまた異な事を。そちが知らぬで誰が知る。武士として卑怯でござろう」

「卑怯呼ばわりは迷惑千万、酒の上とは申せ、事と次第によっては許さぬぞ」

「あぁそうか。許さぬとならばどうなさる」
売り言葉に買い言葉、話が険悪になってきた。中村家老がそばを横目で見て通る者に声をかけた。
「そちは吉見家中の者であろう、(市郎左衛門を指して)この男何とかせい」
声をかけられた男、市郎左衛門の知り合いらしく、
「斉藤氏、拙者が送って進ぜよう。今日のところはここらで切り上げる方が良くはござらぬか」
そばに寄ろうとしたとき、
「貴様の出る幕ではないわ。こやつと今日ここで決着をつけてやる。下がっておれ」
市郎左衛門の酒癖の悪さと気性の荒さを知っているのだろう、口をつぐむと二三歩退いてしまった。
「中山梅之進」
声高に呼び捨てると、
「そちは見たものも見ぬ、知ってることも知らぬ存ぜぬと、それほど上役にへつらう腰

抜けか。ご家老殿もご覧の前じゃ、理は拙者にある。話の決着をつけようぞ」
始末がつかなくなってきた。
「中山、捨て置け捨て置け」
と、家中の連れが促したときである。
「卑怯者、逃げるか」
市郎左衛門は言うが早いか刀を抜いてしまった。梅之進が帰ろうと背を向けたところに振り下ろしたのである。少し間合いもあったが、そこは油断のない梅之進である。さっとかわすと峰打ちで市郎左衛門の肩口をしたたか打った。
衆目の前である。市郎左衛門はもう退けない。一旦刀を納めた梅之進に、
「おのれ、どこまで人を馬鹿にすれば気が済む。尋常に勝負をいたせ。さぁ抜け」
いきり立つ市郎左衛門にはもう手がつかない。中村家老が「取り押さえろ」と下知するものの、遮二無二刀を振り回して近づけない。もう酔いなどどこかに消えてしまっている。
相手にすまいと身をかわし続けていた梅之進の袴の裾が切り裂かれた。

「馬鹿者めっ」
梅之進の堪忍もそこまでで緒が切れた。一刀で市郎左衛門の脳天をたたき割った。
中村家老が叫んだ。
「皆の者、見たであろう。これは酒の上での喧嘩である。騒ぎ立てるでない」
この一言がその後の決着を早めたのであるが、毛利の力を再認識させることともなった。吉見広行も恐怖のなせることなのでろう、静養を口実に城を出て長門の萩に逃げ走ってしまったのである。

赤名元寄は津和野に出向くことなく、杉ヶ峠の整備にかかりっきりであった。それでも吉見軍の帰還のことは耳にしていた。早い日に市郎左衛門が尋常でなく李郎子の話を持ち出すであろうことも予期していたが、目と鼻の先で起った市郎左衛門の一件を聞くことになったのは数日の後、視察に立ち寄った益田元祥から簡単な説明があっただけだった。
元寄は自分でも驚くほど市郎左衛門の結末に感慨を持ち得なかった。市郎左衛門にす

れば目と鼻の津和野まで戻りながら、福川三の瀬城に入ることなく果てたのである。さぞ無念な思いもあったであろうと察する思いも働いたのであるが、それだけ杉ヶ峠の仕事が多忙に過ぎると言うことだったのかも知れない。
三十人からの人夫が入った大所帯で、すでに二ヶ月を越す。雨露をしのぐだけの住まいは建ち野宿の不便からは抜けられたものの、まだまだこれから来るであろう雪に対しては無防備に近い。人夫の半分は、さながら杣人となり板をわく毎日である。床屋根は出来ているものの周りの囲いに追われているのである。
元寄と李郎子には、春からの築窯に対する打ち合わせの毎日が続いている。元寄にすれば、李郎子が言う成すべきことの総てが理解の範疇にはない。だが、不思議と心をせき立てられ、気持ちの乱れる苛立ちはなかった。李郎子が、窯が出来、火が入ることだけに没頭し、異国に連行された苦衷を口にするでもなく、周辺を取り巻く毛利家の画策などには全く興味を示さないことが元寄の気持ちを楽にしてくれたのである。
また、李郎子と伝助が二人共に意外と筆達者で、春からの仕事手順の書き綴じが分厚さを増して、元寄の手元に積み重なっていく心強さは、何ものにも代え難い喜びであり

財産となっていたのである。

三章　激震　関ヶ原

奥深い杉ヶ峠の山々が萌え立ち始めた。見渡す限り人の手の入った形跡すらない風景は、松杉の大木から名も知れぬ雑木群で山を覆い尽くしている。

窯場の開設仕事は順調に推移している。赤穴元寄は雪に閉ざされている間に、李郎子の段取りよい指示で轆轤も出来上がり、仕事場もそれなり格好がついて、あとは窯築きを待つばかりである。李郎子には初めての雪らしく「寒い寒い」の声ばかりの冬であったが、望郷の思いを口にしたり他国の寂しさに沈み込む気配を見せなかったことは、元寄にとっても安堵であった。

雨の季節も間近と思わせる頃となって、益田元祥が姿を見せた。窯を築くトンバリ(煉

瓦)作りと山肌を削り窯の基礎工事に、今は十五人ばかりになっている人夫が大あらわとなっているときであった。

「どうであろう。仕事は順調に進んでおるか」

元寄に、まず仕事の進捗具合から尋ねた。

「李郎子は順調と申しております。年内には窯に火入れが出来るよう心がけている次第ではございますが、李郎子の申しますには、これからの天候と粘土の案配次第で間に合うかどうかといった辺りのようでございます」

人夫たちの立ち働く様子を見ながらの立ち話である。

「ところで元寄。そちにちと無理かも知れん頼み事が出来たのじゃ。大塚屋の方からの、一日も早く品物を作って送って欲しいというのじゃ」

まだはっきり先の見通せないところに、品物の催促である。

「それが、まだどのようなものを作るかも李郎子には話しておりません。私もいたらぬ身で、いかような壺がよいものか己に納得がいかぬような次第で、ただただ恥じ入るばかりでございます」

「そう心配するほどのことでもない。あとで寸法をつけた図面を書いておくから、仕事の合間にでも見せておいたらよかろう」

元祥の軽い口の利き方が、元寄には気持ちの負担を軽くしたのである。

その日、元祥は早めに切り上げ、益田への帰路についた。

元寄は早速その夜に、元祥からの話を李郎子に告げた。幸いなことであったが、李郎子が故郷の窯場で、そのような壺を作ったことがあるというのである。

李郎子は万事協力的である。元寄にすれば李郎子の心中が読み取れぬ不安がぬぐい去れないのであるが、元祥の計画を優先させざるを得ない立場であり、李郎子の心を推し量りながら仕事を進めることとしていたのである。

「これから先、この壺だけ作ればよいのでしょうか。今なら間に合うのでそのような窯を築くのがよいと思うのですが」

李郎子の申し出は、元寄にすれば願ってもない事である。

「そのようなことが出来るのか。しばらくは壺を焼くことばかりが仕事になると思うが

の」

李郎子の言葉はいたって恬淡としたものである。元寄は今まで職人の気難しさは聞いたこともあり、意外に思うことが重なっていたが、異国人の違いかも知れないと深くは考えないことにしていたのである。

今ひとつ元寄の興味はトンパリによる窯築きに対してであった。と言うのも宍戸家中の築城における石垣築きの技術は天下に知られ、元寄はその技術をしっかり身につけていたからである。朝鮮の蔚山城築城の折も大いに活躍したといわれており、後年毛利が大坂城の石垣改修のときも、元寄が陣頭指揮したことでもその知識は知れるのであるが、トンパリを組み上げて窯を築くということには、一脈通じるものが感じ取れていたのかも知れない。

暑い日盛りにも仕事は休むことなく夏を乗り切り、朝夕秋の気配を感じる頃となり、大変な労作であったが窯も築き上がった。李郎子の言うには頃合いを見計らって空焚きに入りたいというところまでこぎつけた。しかし総て順調には見えるものの、まだまだ

不如意ごともなくはないが、暮らし向きは伝作が一人で切り盛りし、元祥の差配によるものだろう米をはじめとして食べごとに不足を託つことはなかったのである。

焼物仕事に欠かせない材料の調達は、李郎子が一人で段取った。粘土作りと燃料となる松割木は人夫たちに指示していたのであるが、いつの間にか焚き火の灰は集められていたし、屋根葺きや縄をなうに使った稲藁も残ったものは黒く焼かれ叺に詰め込まれていた。

残暑の残る日のことである。李郎子が白い石がどうしても欲しいと言いだした。この前人夫から聞いた話であるが、と言って切りだした。

「益田の近くで赤石山とか言う山の北側に白い石が沢山あるそうで、是非見たいし手に入れたいのですが、どうにかならないものでしょうか。その石がないと焼物が出来ないのでございます」

と。急な話で元寄にすれば、話が理解の範疇にない。

「それはそちが手にとって見んことには使えるかどうかわからんのであろうの」

「そうでございます。白い石にもいろいろとございますので、出来るだけ早く行って見

とうございます」

これがないことには焼物にならないとなれば是非もない。良く聞けば掘り出してから使えるようになるまで、水車の臼で細かい粉にしなければならぬと言う。ぐずぐずしていたのでは年内に間に合いそうにもない。元寄はここに来て始めて苛立ちを覚えたのである。

そんな頃、益田元祥は大坂にいた。豊臣秀吉亡き後、朝鮮出兵の後始末など残った大老奉行たちには成すべき仕事が山積していたし、徳川家康の挙動の不可解さも頭痛の種となっていたのであるが、まだまだ表立っての騒動という気配にはなっていなかった。

仕事の合間を見て大塚屋を訪ねた元祥に、思いもかけぬ吉報が待っていた。茶壺を商う見通しが立ったというのである。

「京都の宇治の茶商に話をつないでみたところ、呂宋壺に新茶を収めた注文がかなりあるそうで、今では呂宋壺を手に入れることが出来ないもんで、裏に回って商いの道をつければ、濡れ手に粟とまでは言わないまでも苦労のしがいはありそうでございます」

大塚屋孫兵衛は確信に満ちた口振りである。
「それは結構な事じゃの、いつも言うように朝鮮騒ぎで金はいくらあっても足りんときじゃでの」
「ところで、正直なところいつ頃になりそうでございましょう。来年の新茶には間に合わせていただけるでしょうが、いくつか見せびらかせて高値での注文取りも始めたいと思っておりますので、わずかの見本でも結構でございます、出来ましたら早めにお願い申します」
元祥にしても、杉ヶ峠で作られる茶壺を目にしたいのは山々である。話がここまで進めば、もう後には退けない。
「年内には何とか間に合わせるよう急いてはいるが、まだまだこっちも仕事の様子がさっぱりわからんでの、すまんことじゃが今度出てくるまで待って下され」
元祥も多少の不安は持ち続けているのである。孫兵衛はあっさり話を切り替えた。
「益田様、要らぬ節介かも知れませんが、朝鮮から連れ帰った者をまた向こうに送り戻すという話を聞いたのでございますが、その辺りは大丈夫でございましょうか」

そう言えば、小西行長などが朝鮮との関係修復をはかって、捕虜送還を画策していることは耳にしている。
「そのような動きもあるようには聞くが、何とか手は打ってみようと思うておる。さほど心配することもあるまい」
元祥にすれば、今掌中の玉を手放すわけにはいかない。
「今からはしばらく、何が起こってもおかしくないときになりそうでございます。何事も用心するに越したことはございません」
「そうじゃのう」
元祥も浪速商人の目は見過ごせない。それからすぐの国入りには、打つ手を考えていたのである。

久方ぶりに元祥が杉ヶ峠に立ち寄ったときには、窯の火入れも間近に控えたときだった。李郎子の作った茶壺はまだ火に当たることなく、生の土肌であったが、姿形は元祥を安堵させるものであった。

元祥は茶壺や仕事の仔細は焼き上りがいつ頃になるかと問うたくらいで、元寄と李郎子に意外な話を持ち出した。一応相談らしき形はとっていたものの、嫌は言わせぬ高飛車なものだった。

「元寄。そちには妹御がおったの。今年いくつになった」

「はい。確か十八になったと思いますが、それがなにか」

元寄にすれば怪訝な話である。

「どうじゃ。李郎子と添わせてやらんか。今すぐこの山奥まで連れて来いとは言わんが、仕事の頃を見計らってそのように段取ってみてはの」

当然元寄には元祥の真意が見えない。話を李郎子に続けて、

「そちもここに来たからには、早う毛利家中の者になった方が落ち着いて仕事も出来るというものじゃないかと思うがどうじゃ」

李郎子にしても、あまりにも咄嗟な話で返答のしようがない。

「もう一つ大事なことじゃが、元寄も名前を変えて出世の道に入らんか。輝元公も御納得のことで、申し出次第、事は運ぶことになっておる」

どうも元祥は即答を求めているようである。元寄は今更、親御と相談とも切り出せない。

「いかようなことの次第によるものかよくわかりませぬが、殿のお申し付けとあれば、異を申し上げる存念はござりませぬ」

元寄はここで男を見せたい気持ちが後押しをしたのである。

「それは祝着。良きように取り計らうので任せておけ。名はいろいろ考えてみたのじゃが、中川与左衛門元任はどうじゃ。いずれ家督のことなど片付けるとして、赤穴姓は李郎子を入り婿として継がせればよい。そうじゃ李郎子もこれから赤穴内蔵助と名乗るがよい」

何とも急な話であったが、元祥は上機嫌で杉ヶ峠をあとにしたのである。

赤石山の北から掘り出した白い石も使えるようになり、初窯の火は、この年三月閏で日数に恵まれ師走前に入れることが出来た。

六寸勾配の窯は煙突のない吹き出し穴だけの作りであるが、下の焚き口に火を入れる

とすぐ、燃え盛ろうと音を立ててはじいた。
「ここで焦ってはなりません。小さい窯ですが、二晩ぐらいかけてゆっくりと焼いていけば必ずよい壺を焼き上げることが出来ます」
李郎子は何とも落ち着いた男である。焼物仕事も始めての仕上げであり、元祥から婿入りの話もいわば押しつけられているのであるが、心が動いている気配は微塵もない。元寄が見るにこの男、焼き物さえ作れれば暮らしのことなど眼中にないようである。

窯の火は二日二晩絶やすことなく焚き続けられた。李郎子は小用のほか窯のそばを片時も離れず、うとうとしているかに見えるも、火を燃え落とすことはなかった。元寄も元祥が帰ってからと言うもの、話したいことが絶えず喉まで出て、つっかかっているのであるが、窯口を離れぬ李郎子には話し出す隙がなかったのである。
三日目の朝方、窯焚きは順調に仕上がったといって、焚き口は勿論総ての穴を粘土で塗りつぶして手を置いた。窯を開けるのは三日の後という。その間二日二晩は窯場全体人も物も正体なく眠り続けたのである。

三日が経って、窯から出された壺など見事な出来映えであった。元寄も本物の呂宋壺はまだ目にしたことはないのであるが、李郎子の「はじめの窯にすれば上出来」の一言を頼りに、役目を果たすことが出来たと安堵の胸をなで下ろした。
その明くる日のことである。元寄に元祥から李郎子を伴って益田に来るよう文と一緒に馬が二頭差し回された。焼けた茶壺を馬の背に乗せてこいと言うことである。
壺の荷造りは李郎子が難なく仕上げた。菰巻きにした上から筵包みをするのである。元寄もあまりの手際よさに舌を巻くほどだった。
迎えの者の話から、中一日おいて朝の早立ちでその日に益田入りできるよう旅立った。二頭の馬にはそれぞれ茶壺を二個づつだけ乗せ、慣れぬことで足痛でも起こせば馬の背を借りるべく算段したのである。
夕刻 まだ初冬の早く落ちる陽が海の上に残るまでに着くことが出来た。益田家の居館は、辺りでは三宅御土居と呼ばれており、安芸広島城を中心とする城下を見慣れた元寄には奇異に映ったが、歴史を積み重ねた館であり高い城郭ではないものの重厚な威圧

感を備えていた。
二人はその夜、思いもかけぬ歓待に預かった。元祥は茶壺はすぐに取り上げたのであるが「楽にせよ」の言付けだけで姿は見せず、それなりの気遣いだろうと元寄はあらためて感謝の意を強くした。

「今日は何とも目出度い日になったの」
と、満面の笑みで、朝餉を済ませてすぐに呼び出され広間の片隅で待つ二人の前に元祥が姿を見せた。床の間の前にはすでに四個の茶壺が並べられていた。
「この茶壺上出来ではないか。見事なものじゃ。さて今日は何から話したものかの。」
思案顔を見せてはいるものの、作り顔にすぎない。
「この前話した名前替えじゃが、大殿輝元公もご機嫌麗しく乗り気での、ここに書き付けが届いた。公直々の判物じゃ、今日から元寄でなく中川与左衛門元任として杉ヶ峠の一切を取り仕切る力になってくれ。それと李郎子の婿入りと赤穴の家督のことじゃがの、親御様のこともあろうし、とりあえずは赤穴姓の別家を立てると言うことで承知してく

れ。これで杉ヶ峠の仕事も心置きなく進めることが出来るというもんじゃろう」
事の次第は元祥の思惑どうりに進められ、ここで毛利における杉ヶ峠の焼き物に関しての、陣容組織が一応の確立を見たのである。
「次に、これからの仕事の進め具合であるが、冬に向かって土仕事は難儀であろうが、今度の窯はいつ頃火が入ることになるのかいの」
肝心な李郎子が口を開かない。わからないなりに元寄が返答しなければならない。
「此度の窯は、とりあえず焼いてみると言うことで取りかかったもので、また一から始めることになりますので、早くとも春差し入りではないかと存じますが」
「であろうの。ところでこの度は何個ほど焼いたのじゃ」
元祥は一人、大塚屋との胸算用を考えている。
「一回の窯の中に壺は十五六個入るようでございますので、今も窯場には十個ほどは残ってございます」
「となると、年に四五回焚くとして、そうかそうか。まあ、およその見当はつくわな」
元祥は己の思惑ばかりに頭を走らせているようである。

「して、焼き上がった壺の持ち出しじゃが、あまり人目につかぬようどこぞ内海の港まで運び出すことになるが、やはり三田尻じゃろうの」
「身共もまだ一度しか通ったことはございませんが、少しばかり難所ではございますが仏垰を越して徳地に抜ければ、あとは筏という手もございますし、良かろうかと存じます」
「筏とはいい思いつきじゃが、割れる心配はないじゃろうの、頑丈な木箱か竹籠でも用意した方が安全ならそのようにいたせ」
「はい、ぬかりなく心いたして事に当たる所存でございます」
話は万事元祥の思い通りに進められ、元寄もこれという懸念を残すことなく杉ヶ峠に退き返すことが出来たのである。
今ひとつ、李郎子の新所帯用と元寄の住まいについて、屋敷と言うほどのものでもないが、毛利の方で用意をするため、春を待って広島から大工を回すので、用材を切り出しておくよう指示があった。

杉ヶ峠に帰った元寄と李郎子を、まだうっすらと雪化粧しただけの風景が待っていた。まだ二人の寝起きは掛小屋同然の荒ら屋で寒さばかりが身にしみる。
元寄は益田への旅をほとんど無口に過ごした李郎子のことが気がかりで、ぽつぽつ李郎子の真意も知っておきたいと思い続けていたのである。
「のう李郎子よ、これからは身共の弟となるが、そちはどうじゃ、この話気にいらんのではないか。正直なところを聞かせてはくれんかの。嫌なら嫌でまだ打つ手もあろうというもの、どうかの」
元祥は囲炉裏の焚き火を中に、薄い煙越しに顔色をうかがいながら尋ねた。
「滅相もございません。ありがたいこと思うております。まだ思うように話も出来ないので、つい無口になってしまいますが、これほどまでして私に仕事をさせていただけることはお礼の申し上げようもないと思うております」
「そうか。それを聞いて安堵いたした。益田の殿は何事も一人ざくまいでなさるお方での、しかしこれからも身共がそばにおるからあまり心配はしないようにの」
にわか仕立ての兄気分と、仕事の頭領として仕事に滞りのないよう願いも込めて穏や

かな口の利き方をした。
「それと、身共の妹と連れ添うことになって、名も赤穴となるが異存はないの」
「もちろんでございます。私が生まれてからの本当の名はヤン・キツ・ヨウといいました。字は難しいので朝鮮に行くとき李郎子にしました。今度また赤穴に替わってその度に新しい生き方に替わります。それもいいと思います」
李郎子が何をどう考えて今日という日に向かい合っているのか、まだ元寄には判断のつかないことばかりであった。
これからの二三ヶ月は雪の下での仕事になるだろう。先の見えないことばかりであるが、李郎子と手を取り合って必ずいい春を迎えなければならぬと元寄は心に願うのであった。

慶長五年を迎えた杉ヶ峠は、新茶に間に合わせる茶壺の催促で、三月四月と立て続けに窯の火を入れた。雪の中での轆轤仕事は李郎子改め赤穴内蔵助の不慣れもあって、一回だけ凍結させる失敗があったものの、大過なく焼き出すことが出来た。

大坂への出荷も二回その都度三田尻周りで船積みし、四十個を越す茶壺を無事送り出したのである。

仕事が一段落したところで、毛利家中も杉ヶ峠も大きい変動に見舞われることとなった。杉ヶ峠へは世情の喧噪が届いてくるのはしばらく後のことであったが、住まいの出来上がるのを待つように赤名元寄改め中川与左衛門元任の妹静江が輿入れしてきて妻女に収まり、伝作と手を携えて裏方を取り仕切り始めたのである。窯場も今では総勢で十五人であるが、女は静江ただ一人である。決して楽な毎日ではない。
静江が越してきた日、内蔵助に言ったことが痛快である。
「この度、縁あってあなた様の妻となりました。暮らし向きのことは何も出来ませんが伝作と懸命に勤めさせていただきます。あなた様も明国からこのような遠いところに参られまして何かと不自由なことがおありと存じます。私も思いがけずこのような山奥に越して参りました。考えてみれば似たようなもので、案外良い夫婦になれるかも知れないと存じます。不束者ではございますが末永くよろしくお願い申し上げます」

内蔵助の返答がまた静江を驚かす。
「私は焼き物を作ることだけしか知りません。焼き物が作れるのならほかに何も望むものはありません。食べるもの着るものあるものだけで良いのですから、気にすることはなにもありません。これから毎日、私の仕事を見ているだけで何もしなくていいのです。あなたが見ていればきっと良いものが出来そうです」
元任も、話を聞き「思いがけない良縁だったかも知れない」と安堵の胸をなで下ろしたのである。

五月に入って、杉ヶ峠の静寂をよそに、大坂では大きいうねりがまだ表立った高波にはならないが、動き始めたのである。その第一波は徳川家康が会津の上杉討伐に諸大名の出兵を指示したことである。家康は、いずれ石田三成と対決しなければならぬと予測して、その陽動作戦と言われるが、その後家康の指揮下に入るであろう諸大名を読み取ることは出来たのである。
その時毛利は苦慮の中にあった。家康がいかに五大老の一人とは言え、行動には釈然

としないものが残っている。会津への出兵となれば家康の指揮下に入る意思表示ととられても仕方がない。大坂城内には一粒種秀就がいる。
益田元祥が輝元に、耳寄りな話を持ち込んできたのはそんなときであった。大塚屋孫兵衛に茶壺を納めた折りに出た話である。
「益田様。茶壺の方は上々の首尾で、これからしばらくは私どもも利をいただくとして、天下の動きが穏やかならざるようでございますが、毛利様はいかが成されるのでございますか」
「そのことよ。徳川の狸爺のすること、どうせ天下を狙ってのことであろうが、これから諸侯がどう動くかまだはっきりとわからんところが多いからの」
元祥は正直に答えた。
「石田三成様の腹の中がもう一つはっきりしないことが皆様を動きにくくしているのでしょうが、そう遠くない日に大坂か徳川か旗色を決めなければならなくなるのでございましょう。案外、それまでに手を打っておくことが大事なのかも知れないと存じますがいかがでございましょうか」

孫兵衛はやはり商人である。時勢の読みは鋭い。
「そうよの。おそらく家康の先立っての狙いは三成であろうが、その後のことがの」
元祥にすれば、今どこまで話したものか軽々しい口はきけない。
「益田様。実は京都の茶商に茶壺を向けたときのことでございますが、徳川家中の本多正信様の子息正純様とご縁をいただきました。この正純様が若いに似ずなかなかの切れ者で、先々お役に立つ方とお見受けしております。よろしければ今後のご縁をおつなぎする労を取らせていただいてもよろしいかと存じますがいかがでございましょう。ご一考の値打ちはあると存じます」
元祥も徳川家中に置ける本多正信の存在は良く承知していたが、正純についてはまだ知らないし、況んや面識もあろう筈がない。
「で、その正純とやら歳はいくつぐらいになる」
「若いというても三十半ばで、今からが働き盛りになろうかと存じます」
「加賀の前田殿も芳春院様を江戸に送るとか送られたとか、毛利もよくよく考えねばなるまいの」

孫兵衛の見方では、まだ表立っての動きではないが、正純が西国大名との渉外にあたる役目を担っているようで、今後天下がどっちの転ぼうと、今近づいておいて損はないというのである。

輝元の内諾を得て元祥が正純と会ったのは京都南禅寺で六月に入ってからのことであった。孫兵衛の進言もあって分を越す灰吹き銀を手土産とした。家康と正純とにそれぞれ用意されたのは孫兵衛の抜からぬところである。
正純は手土産が効いたものか、話は思いがけぬところにまで及んだ。家康の目下の狙いはやはり石田三成であり、秀吉の言い残した五大老についてはすでに腹中にはないのである。
いずれ会津の上杉討伐に出兵することを家康の地歩かための下地として、泰平な天下を自らの手で作ると言うのである。今からは人質の奪い合いが激しくなってくると思われるが、毛利殿も慎重にお考えいただき悔いを残さぬよう手を打たれることが肝要であろうと、すでに天下は我が手のような話である。

元祥も輝元の了解はあるものの、まだ軽々しい口が利けるときでも立場でもない。五大老の中で前田利家は亡く利長はすで家康になびいたようであり、上杉は反家康の腹を固めている、残るは毛利と宇喜多であるがまだ旗色をはっきりとしていない。これも正純の話であるが宇喜多家中は二つに割れているそうである。

元祥は苦衷を深めるばかりの会談に終わった。元来、毛利には天下を取る気はないのである。しかし上杉討伐に手を貸す気もない。しかしながら後日のことであるが、しばらく時を稼ぐ意味合いもあって毛利一族であり三成憎しの思いが強い吉川広家の軍勢のみが家康に従って上杉討伐に加わるべく播磨辺りまで兵を進めたとき、三成の軍師役でもある安国寺恵瓊の毛利家引き入れの説得の話となったとき広家は強硬に反対するのであるが、行き違いが生じ、毛利は三成方の総大将となってしまうのであるが。

その後、輝元との話し合いでも、まだ本多正純の存在が徳川家中でいかほどのものかわからぬまでも、徳川と話し合う道筋が作れたことは大きい収穫であったと少しではあるが安堵を得たのである。

七月に入ると情勢は一気に動き始めた。家康が上杉に兵を動かしたのである。家康の老獪さがしたことであろうが、上杉を反豊臣とし、まずは豊臣恩顧の武将大名を引き入れ、石田三成が秀吉遺命の奉行たちと語らい家康出陣の留守に家康討伐の軍を起こした折には、三成の反乱として、三成憎しを正面にかざして徳川方の陣容を整えたのである。

毛利には時勢の読みと腹を固めるにいささかの躊躇手違いがあったのかも知れない。三成にその隙を突かれた格好で大坂方といわれる三成軍の総大将に祭り上げられてしまったのである。。

ここでの暗躍の中心はやはり安国寺恵瓊である。三成と組んで輝元担ぎ出しまでは成功に見えたのであるが、毛利一族の結束の堅さを最後まで崩すことは出来なかった。

家康方、三成方あわせて十数万の軍勢が関ヶ原で歴史に残る合戦を交えることになったのは慶長五年九月十五日雨のそぼ降る日であった。結果は家康方の勝利に帰したのであるが、毛利軍はと言えば、輝元は大坂城から一歩も動かず、関ヶ原に向かった秀元軍も矛を交えることはなかった。決戦場となった関ヶ原南東部に陣取った毛利一族軍の最

先端にあった吉川広家軍が、毛利軍の動きを封じ、陣を並べた安国寺恵瓊の軍勢まで動くことが出来なかったのである。戦況がやや膠着状態となった午後、小早川秀秋の寝返りが決定打となって三成方は総崩れとなり、家康方の大勝利で決着したのである。

家康の戦後処理は迅速であった。三成、安国寺恵瓊など首謀者と見なされた者は首を刎ねられ、三成方に加わった諸大名には、すでに天下人気取りで領地の配分が行われた。

手始めに行われたのが毛利への対応である。家康自身「毛利が軍を動かさぬ限り敵となった罪は問わない」という吉川広家との密約があり、かなり苦慮したようであるが、合戦における毛利軍の実際の動きや、石見銀山の献上、事前から工作にあたった本多正純の進言などあって、防長二州に移封と決した。毛利にとっては大いに不満の残るところであったが、世の大勢には逆らえないのが実情であった。

ここで杉ヶ峠界隈の成り行きを詳しくしなければならない。毛利の本拠地である広島には、万が一の騒動を懸念して、いざという場合まず五分に戦えると読んで福島正則を入れたのであるが、石見については銀山は直轄領として、その他の石見の配置について

は、本多正純が采配した。

正純の腹案としては、益田元祥を毛利家から離し、新しく大名に取り立て据える考えであったが、本人の固辞と家康の難色で実現にはこぎつけることが出来なかった。そこで、浜田二万石には、三成方に荷担して廃絶を決めている宇喜多秀家の従兄弟に当たる宇喜多詮家を、秀家に反旗をかざし家康方に加わった恩賞として新しく大名として一旦取り立てることにしたのであるが、正純と益田元祥の画策で最終的に津和野三万石を与えることに落着させたのである。

詮家には、正純と元祥がお互いの骨折りの結果による加増であることを気に触れ折に触れて吹き込むことで、恩を売り込んだのである。その裏には杉ヶ峠を囲い込む広い山林の利権を守り、詮家から利権を取り上げ治外法権とすることが画策されていたのである。大塚屋が一枚噛んでいたことは言うまでもない。

天下の激震をよそに、関ヶ原が決着するまでの杉ヶ峠は平静な毎日が続いていた。中川元任は関ヶ原に出陣参戦することはなく、杉ヶ峠に居続けていたのである。

「内蔵助よ。上方では随分と騒動らしいが、このような山奥まで騒ぎが伝わることもあるまいから、心配には及ばんと思うがの。早く落ち着いて欲しいものじゃの」
仕事を急かされることもなく、元祥もすでに半年近く姿を見せていない。元任にすれば仕事に張りがないのである。
「焼物は焦ってはいけないのです。気持ちを落ち着けて毎日その日に出来る仕事をやっていけばよいのです。そうしないといいものは出来ません」
相変わらずであるが、内蔵助は気持ちの動きを表に出すことなく、ただ飄々とした暮らしを続けるばかりである。
近頃目につくことであるが、茶壺作りに合間が出来ることもあってか、日頃使いにする碗、鉢、皿の類に手を染めることが多いようである。すでに日頃の暮らしには不足のないくらいは揃っているが、それでも新しい作りに取りかかると、静江の表情が決まって明るいのである。
元任も三度の食事こそ内蔵助たちと共にするのであるが、一応は別棟暮らしで、静江が来てすでに半年からになるものの二人の暮らしの機微については、まだ一人暮らしの

せいもあって隅々まで読み取ってはいないのである。
関ヶ原では合戦が始まったであろう頃、早めの夕食に伝助たちの労をねぎらうことを口実に、元任は一献つけさせて、代わりばえのしない毎日に弾みがつけばと、ちょっとばかりの気遣いをしたのである。人夫たちにも「今日は思い立って窯の秋祭りにするから、急なことで腹一杯もないがやってくれ」とすぐに落ちるであろう秋の陽の残る頃合いを見計らって、窯前の広場に筵を広げさせた。
「静江。ここに来て半年になるが、これから先もここで暮らしていけそうか。今度、益田の殿様にお会いしたら女子衆の二人くらい入れてもらおうとは思うておるがの」
「さほど気遣いいただかなくても、まだしばらくはこのままでやっていけそうなので心配ございません」
元任もどこまで本気の心配かわからぬが、静江も今のところ不足や寂しさにふさぎ込む様子は見せない。
「兄上様、焼き物を作る仕事は、賑やかなところが近くてはいけません。このようなと

ころが一番良いのです。私はあまり酒が飲めませんのでそう思うのかも知れませんが、私にとっては今の暮らしは殿様になったような気でおります」

「そうか、そんなものかの。それでもそちには一生をかけてでも作りたいという何かがあるじゃろう」

元任の狙いは、本当の性根を見せないように思えてならない内蔵助の腹の中が見たいのである。

「まだ若いので、今のところありません。まだしなければいけないことが山ほどあります。修行を積むうちにそのような仕事が見つかると思います。まだ先のことでございます」

伝作が一人、人夫衆と台所をせわしなく行き来している。内蔵助との話が思うようの進まぬ元任は、

「伝作、今日はここに来て呑め。日頃からおまえ一人に苦労をかけてすまんの」

「何をおっしゃいます。滅相もない。良い人たちばかりでございます、極楽で仕事をさせていただいている気分でございます。これ以上良くしていただいては罰が当たります」

「そう言わずにここに上がって呑め。そう言えばおまえもわしの親父が元気な折は苦労したものじゃの。ちゃんと見ておったぞ。わしが罪滅ぼしをしてやる」

元任には、思ったより早く酒が回ったようであった。

杉ヶ峠に元祥から急使が飛び込んできたのは十月に替わった三日の日であった。「急ぎ明日益田まで来い」と言うのである。使いの者の話ではただならぬことらしい。元任の乗る馬を一頭引いてきたことを見てもただ事でないと察しられる。

しかし騒動は山場を超え、すでに後始末に入っていることを、中川元任始め杉ヶ峠一党は知るよしもないことだったのである。

四章　内蔵助、萩へ

関ヶ原に勝利した徳川家康は、豊臣の息の根を止めるまでには行かなかったものの、天下の実権を手中にした。合戦後の処理は厳しく、多くの名門大名が領地没収絶家させられた中、毛利は防長二州に封じ込められたものの廃絶は免れることが出来たのである。その理由についてはとかく多くが語られているが、石見銀山の献上と益田元祥の工作が大きく働いたことは否めないことであろう。

杉ヶ峠には何の余波も及ぶことなく、天下の多忙がむしろ幸いした形で、何ら変わらぬ仕事が続けられたのであった。唯一人益田元祥だけは、大塚屋と絡み合う本多正純と石見銀山奉行となった大久保長安との駆け引きに心を砕かなければならなかった。この二人は名にし負う犬猿の仲であり、私欲の固まりと噂される二人だったからである。しかし二人共に家康の側近であることを考えれば対応に疎漏は許されない。石見の国の大

名取り立てを固辞して毛利の家臣として残った元祥には、安芸に入った福島正則に絡む財政問題の解決など、多くの重責も山積していたのであるが、元祥の優れた智略によって解決が図られていったのである。

元祥の画策から杉ヶ峠一帯を引き続き大塚屋が借り受けることは坂崎家と円満に話が決着し、内蔵助は世間の喧噪を気にすることなく壺を作り続けたのであるが、掛かりっきりと言うほどの忙しさでもなく、息を抜く間も結構多くあったのである。そんなあいた手間を窯に積み込む壺の隙間に入れる食器など作ることに、いつしか楽しみを覚えるようになっていた。その発端は来る日も来る日も手持ち無沙汰に日を過ごす静江を見て思いついたのである。

「静江殿、少し土いじりでもしてみる気はないか」

土もみをする内蔵助を、そばで見つめている静江に何気なく話しかけたのである。

「もう静江殿はおやめください。静江でよいのです」

静江にすれば何度繰り返した言葉か知れない。

「いや、ついつい・・・。そちがやってみるなら、作り方も教えるし,道具も作ってみようと思うがどうじゃ。やってみればそれなり面白いと思うがの」
内蔵助自身仕事に穴のあくことが多い日々である。
「静江の作った器で料理を食べれば、また格別の味がするかも知れんの」
横合いから元任が皮肉ともつかぬ言葉を差し込む。
「楽しいかもしれませんが、折角皆さんが苦労して作った土が勿体のうございます」
静江は思わぬ気遣いを口にした。
「なに、失敗しても捨てるわけではないから、土はまた練り変えて使えばすむこと、心配することはない」
内蔵助は全く気にかけてはいない。
「やってみるが良かろう。楽しみが増えて結構なことじゃと思うがの」
元任にすれば、どうも子宝に恵まれる気配のない静江の、それでなくとも山奥暮らしの寂しい気持ちの逃げ場には、案外役立つかも知れないと言ういたわりの思いも働いたのである。

それから内蔵助の手で、いくつもの打ち込み型が作られ、静江だけでなく元任から伝作まで、暇さえあればせっせと細工に精を出し、仕事場はいつも鉢皿などであふれるほどに出来ていったのであるが、内蔵助の手でほとんどが打ち壊され、窯の中に入れるものはわずかな数に過ぎなかった。
津和野に入った宇喜多詮家であるが、家康の意向から姓名を坂崎出羽守直盛に代えて、まずは領内の調査と施策方針の決定に伴う家中武士の配置に心を砕いたのである。しかし総てが順調とは行かない。出羽守にすれば、初めて領地を治めなければならないのである。かって宇喜多秀家家中にあって領内の一部を治めることとはわけが違う。家老として取り立てた浮田織部は宇喜多本家で行政の経験があるとは言うものの、自らの手で取り仕切っていたわけではなく、ここでも益田元祥が大きい力となった。もともと領内事情に詳しく、大塚屋とのからみもあり好意的な助言は坂崎家中にとって千金に値する味方を得たと言っても過言ではなかったのである。

一方、萩城下における焼物はと言えば、広島から越してきた李勺光一党がようやく城下外れの松本に窯を開くことが決まり、藩の直轄として大きく動き出していたのである。しかし、計画こそ出来上がっているものの、総てにわたって準備が調ったと言うには、まだまだといった段階であった。

元祥には内蔵助をこの先どのように持って行くかと言うことが絶えず脳裏から消えることなく、萩城下の動向とにらみ合わせ処理しなければなるまいと考えていた。しかし、まだ大塚屋相手の上方に向けた商いが急なかげりを見せるでもなく、相変わらず利も大きいのである。目が離せないと思いつつも、藩の政事の多忙もあり、元任まかせでついぞ杉ヶ峠に姿を見せることはなかったのである。

慶長八年秋、杉ヶ峠にちょっとした問題が持ち上がった。津和野坂崎藩にもようやく落ち着きが見え始めたころのことである。坂崎藩郡奉行三輪弥左衛門が、藩と大塚屋で取り交わした杉ヶ峠への米納入について、藩の手で杉ヶ峠まで持ち込むというのである。弥左衛門には杉ヶ峠における仕事が、名目、銅山開発というのであるが不信のぬぐえな

いところがある。三の瀬の代官所まで飯米の受け取りに杉ヶ峠から出向いてくるのが習わしとなっているのであるが、何としても一度自分の目で実情を確かめたいとの思いを強めていたのである。

大塚屋の手代吉蔵が、その年の借地料を納めるべく津和野に出向いた折、弥左衛門と顔を合わせたときのことである。

「大塚屋殿、かねがね思うておった事じゃがの、杉ヶ峠の飯米を三の瀬までたびたび取りに出てくることも面倒であろう。こっちの手で届けて進ぜようと思うがどうじゃろうの」

吉蔵にすれば裁量外のことである。言葉に詰まる。

「それはありがたいお申し入れではございますが、今すぐ私の一存でご返答申し上げることもできないことでございますので、帰りましたら早速主人とも相談の上早くに、ご返事をお届けさせていただきたく存じます」

吉蔵は律儀な手代である。無難に切り抜けた。

「それはそうであろうの。それはそれでよしとしてちょっと尋ねるが、杉ヶ峠に毛利家

中の中川元任という者が出入りしているように聞くが、拙者も役目柄領内のことについては何かと知っても置きたいと思うておる。どうであろう一度会いたいと思うのじゃが仲立ちの労を取ってはくれんか」

思いがけぬ言葉に

「私も親しく知り合っているわけではございませんが、中川様とお会いすることがあったときでもよろしゅうございますか、それとも今すぐにでもと言うことでございましょうか」

吉蔵の言葉にはいちいち念が入る。

「早いに越したことはないが、気にかけておいてくれ」

吉蔵は弥左衛門の表情言葉から、奥歯に物の挟まった感じが残ったのである。

この三輪弥左衛門であるが、祖父源左衛門の時代、縁あって宇喜多本家に仕官することとなったのである。もともと奈良三輪山近辺に住まっており、土地の豪族であったとも三輪明神社の神官であったとも言われているが、今は定かではない。祖父源左衛門が

三輪明神社の勧進で諸国行脚の旅に出たときのことであるが、備前宇喜多藩内で領民とちょっとしたいざこざに巻き込まれたときのこと、その決着をつけた手際の良さが領主の耳に入ったことから、懇望され家臣に加わることとなったようである。

弥左衛門は一見硬骨漢に見えるが高潔で思慮深く、表には出さぬが深い情の持ち主である。本家にいる頃は表だった役職にもなかったのであるが、慶長五年、宇喜多のお家騒動で秀家と甥の詮家が反目したとき秀家の乱脈ぶりに愛想を尽かせ、詮家側の人となったのである。津和野に入るとすぐ郡奉行の要職に就き、領内の把握と改善開発に取り組んだのであるが、どうも杉ヶ峠界隈の気がかりが頭を離れない。まず詳しい現状を知りたい思いがつのり続けていたのである。

さほどの時を待つでなく、元任が弥左衛門を訪ねてきた。元任はすでに元祥の指示を仰ぎ、すぐに真相の開示まで話を運ぶことなく、坂崎家中と当人である三輪弥左衛門の真意を探り出すことに的を絞ったこともあり、会談は藩邸を避けて弥左衛門の私邸で行われた。

「遠路のご足労痛み入ります。早速でござるが、かねて毛利殿の頃より続く大塚屋との杉ヶ峠界隈の約束事、今すぐ取り消そうなどと言う魂胆は毛頭ござらんが、曲がりなりにも我が領内のこと、何一つ知らぬでは拙者も役目柄済まぬ事と思い、決して他意あっての事ではござらぬゆえ、大塚屋の仕事など粗方でよいがお聞かせ願えればと存ずる次第でござる」

弥左衛門の誠実な問いかけに、元任は出足から困惑の度を深めた。

「いや、貴殿の申されることといちいちご尤もなことで、事の一部始終お話申し上げるべき事とは思うものの、大塚屋の真意につきましては今もって毛利にも理解の及ばぬところがあって、今ここで確たるご返答ができぬこと甚だお恥ずかしい限りと申さねばなりませぬ」

弥左衛門は穏やかな面持ちを変えることなく、

「いやいや、お恥ずかしいのはこちらのこと、領内隅々まで手が行き届かず、領民安堵までには今しばらく時を費やさねばなるまいとの存念で心を砕いており申すが、拙者の力量不足から思うに任せぬと言うのが正直なところでござる」

元任には苦笑しながらの弥左衛門であるが、その実直さが手に取るように伝わってきたのである。

「ご苦労の程お察し申します。されど、杉ヶ峠の件につきましては今しばらく様子を見るにとどめていただき、大塚屋に詳しいことも聞きただした上で、早い機会をもちましてご説明させていただくことでご理解を賜りたく存じます」

「毛利殿がそのようなご意向であれば、取り立てて我が意を押し通そうというわけではござらぬ故、お互い今のまましばらく様子を見ることにいたしておこう」

このあとも雑談がつきることなく続いたのであるが、弥左衛門の話の姿勢は変わるでなく、元任には堅い信頼感が生まれると同時に、絶ちがたい深い因縁さえ感じたのである。

益田元祥が上方からの戻り、人目を忍んで杉ヶ峠に姿を見せたのは慶長も九年となった春と言うには早い季節であった。

「内蔵助よ。この山奥では冬の間難儀であろう。何とかしてやりたいものじゃが、もう

少し辛抱せい。いずれ考えるからの」
元任は考える前に気が回ったのだろう、
「殿、上方でなんぞ」
「心配するような事は何もない。今年は雪が多かったそうじゃで、その方が気になったまでじゃ」
元祥も窯場周りを見れば、仕事の察しがつくらしく、仕事については一言も口にしなかった。
「元任、先の文にあった三輪弥左衛門とか言う男、その後どうなった」
「あれからまだ会うてはおりません。その後もいろいろと調べたのでございますが、坂崎家中で杉ヶ峠の本当のことを明かして、今後ともことを運ぶに何かと不都合をなくすには、信頼の置ける男ではないかと存じます」
元祥はかねがね坂崎家中の要職にある者で、杉ヶ峠の実情を打ち明けるにふさわしい人物が欲しいと考えていたのである。
「いずれにしても坂崎家中に気脈を通ずる者の一人は欲しいからの」

「そのように常々心懸けてはおりますが、今のところ坂崎家中の誰一人とも気安く往来することは厳に差し控えております故、思いに任せぬままとなっております次第で、まことに申し訳ございません」
杉ヶ峠の仕事は、密に進める事に変わりはない。困難が伴うのは仕方ないことでもある。
「その三輪弥左衛門とやら、そちの目に適うのであれば、いずれ一度会うてみたいものじゃの」
毛利も萩転封から四年目となるが、落ち着くまでにはまだまだ時を要する。領内問題には多くの手をかけることが出来るものの、隣藩や幕を開けたばかりの幕府との折衝には、適材適所の人材を配するに忙殺されているのが実情である。元祥にとって杉ヶ峠は銭のなる木であるが、秘密裏の仕事であり慎重の上にも慎重を期さなければならず、今は元任一人に荷を背負わせざるを得なかったのである。
この慶長九年という年は、元祥に限らず毛利藩内全体が多忙に追いまくられた年だっ

た。この秋、萩城の落成を祝う催しがあった。まだ完成というにはほど遠いのであるが、祝いに良い年回りということで、四年後となる完成を繰り上げたのである。そのことが重役たちの屋敷整備、広島在藩時の寺の移転などを促すこととなった。

元祥自身例外ではない。元祥は旧領益田に近い須佐界隈一万二千石を領地として賜わったのであるが、須佐に落ち着くどころではなく、まだ萩城下にも自分の居宅はないような状況だった。

そんな折、石州から銀山との関わりから元祥とは古い付き合いである石州湯津の海蔵寺住職大佐和尚が萩を訪ねてきた。同年配であることもあって親しさは人一倍である。一夜の時を取り、元祥は萩城内から川島に移転建立中の善福寺を宿に用意し旧交を温めたのであるが、

「待てどもお声が掛からないので、海蔵寺をぜひとも萩に持ってきたい事お願いに参上した次第でございます」

というのである。元祥も石州在住時の檀家寺であれば、否というわけにも行かず、

「いずれ早い機会に、城下のいずこかに建立を段取ってみるつもりじゃがの」

「そこでお願い事になるのでございますが、建立より一足先に萩に腰を落ち着けたいと思うておりますがいかがでございましょうか」

大佐和尚はすでに石見に引き返す気持ちはないようである。あまりな急な話に元祥もいささか当惑気な面持ちが隠せないが、

「心当たりがないでもないので、心配せずにゆっくりするがえぇ」

工事半ばの寺をいいことに、酒肴を取り寄せ昔話に花を咲かせたのである。

後から後から仕事に追われる元祥の打つ手は早かった。とりあえず城下はずれ松本村に今は無住となっている薬師堂に手を入れ差し当たっての住まいとし、早いおりに城下のいずこかに建立の手筈を取ることとしたまでは良かったのであるが、そも、この薬師堂周辺は元祥のえらく気に入ったところで、かねてより自分の仮住まいをかねて一寺の建立を目論んでいたのである。しかしこう早く話が現実味を帯びてくると矢も楯もたまらない。あっという間に話を進め、早々に広厳寺と名付け普請を始めたのである。

さぁ、こうなれば一日も早く海蔵寺を建立し、広厳寺を自分の居宅として使いたい。しかし海蔵寺が今まで石見銀山での犠牲者の供養寺であったことが他の重役たちの論議

を呼び、すぐさま萩にと言うには異論もあったが、銀山に関わることは一切石見に残し、新しく海潮寺と名を変え、差し当たっては益田家の菩提寺ということで建立にこぎつけたのであるが、それでも開山までには三年の歳月を要したのである。

中川元任と三輪弥左衛門が二度目に会ったのは福川三の瀬代官所においてであった。津和野からこの福川三の瀬に来るには青野山を南に回って杉ヶ峠を通れば近いのであるが、大塚屋との杉ヶ峠一帯の賃貸の約束が引き繋がっており、北を回る不便を託っていたのである。弥左衛門にすればここは少し気に入らないところである。

その日、元任は弥左衛門と打ち合わせの上、飯米の受け取りに同道し訪ね来たのである。山深い奥にも夏の日照りは容赦ない。受け取りに出向いた人夫たちに、戻り道は少し陽のかげりを待ったがよいとも思ったのであるが、ここのところ夕立が日課のごとく襲ってくる事を考えて、暑さの中、一足先に帰らせた。

弥左衛門は厳めしい表情の中に心を開いている穏やかさをのぞかせて元任を迎えた。

「暑い中をご苦労でござった。その後如何でござるか」

弥左衛門から早速探りが入る。

「もともと大塚屋の仕事で、身共も毛利の者として、どこまで関わっていいものか、こうやって小間使いのようなお恥ずかしい仕事に明け暮れる次第、何とも申し上げようがございませぬ」

今日は話次第で、真相の一端を打ち明け、弥左衛門の出方を見て帰ることが、元祥からの命である。

「今のところ、銅の精錬が仕事の狙いと聞いておるが、川の濁りなどで百姓共が難儀を見ることがないのは結構なことじゃと安堵いたしておる」

ずばり、核心に入る。

「そのことには気をつけた上にも気をつけて、迷惑もめ事の種にならぬよう、手抜かりなくやっております」

元任は真相をどう切り出すか、糸口が作りたい。

「大塚屋といえば大坂の大問屋、毛利殿とは石見銀山からの古いつながりなのでござろう」

「そうでございます。古ければ古いで我が儘勝手を言われることも多く、これがまた辛いところでございます」
元任はここで思い切った。
「三輪殿、これはどこまでも二人だけの内々話ということにしていただきたいのでございますが・・・」
言いよどんだのを、弥左衛門は待っていたかのように、
「何ぞ心配事でもござるのか。拙者のことなら気遣い無用、何なりと申されるがよい」
膝を乗り出さんばかりに次の言葉を待った。
「貴殿にだけ打ち明けることでございますが、仕事というのは銅の精錬をやっておるのではございませぬ」
「それはまた意外なことを、で、何をなさっておる」
元任は、元祥との打ち合わせを、一瞬頭の中で咀嚼した。
「焼物を焼いているのでございます」
弥左衛門には意表をつかれた話だったのである。

「大塚屋が、この度お国替えとなった、さるお大名家に納めるらしく、あれこれとご注文のあったものを、作らせているようでございます」
弥左衛門の問いは鋭い。
「そうでござったか。そんなことであれば、取り立てて隠し事とすることでもござるまい」
元任は、返事に隙を作るまいと苦しい。
「そうではございますが、大塚屋にすれば、どこで作ったかわからぬようにして、珍奇なものとして高く値売りをしているようでございます」
「そうか、さすが大坂商人じゃの。でまた、どうして毛利殿が関わり合っておられるのかの」
話が正念場に来た。
「そこでございますが、今やっております焼物細工人は、先の朝鮮出兵の折毛利が連れ帰った者で、ひと当たり仕事が終わるまで貸し与えているような次第で、目が離せないのでございます」

「そうでござったか。そういう事情ならば、話が広がれば毛利殿にも迷惑が降りかかるかも知れんということになるの」
元任は、この辺りで納得願いたい。
「承知いたした。焼物のこと、拙者は存ぜぬ事として、仕事の終わるのを待つことにいたそう。しかし、よくぞ打ち明けてくださった。拙者の口から秘密が漏れる心配はござらん、安心召されよ」
元任は、今日の安堵だけは得た。これから先のことは弥左衛門という人間に対する賭であるが、心配要らぬ事を幾度も自分に納得確信させたのである。

内蔵助たちの暮らしは長く変わらない。子に恵まれない静江は、内蔵助の心配りと、伝作の献身的な働きや、窯場ではたらく人夫たちの明るさで、寂しさなど感じる暇もないほどであった。
これは慶長も年を重ね二けたともなった頃、元任が元祥に漏らしたことであるが、日本に渡り来てすでに十年に近くなっている内蔵助の心中が、いまだに推し量りかねてい

るというのである。望郷の念を口にするでなく、何に付けても愚痴がない、不足を聞かない、窯場の誰とも争うでなく折り合いの良いことこの上ない、それでいて卑屈なところは微塵もない。元任には異人というものの違いとしか考えられないというのである。確かに内蔵助は喜怒哀楽を顔に出すことがない、かといって腹の中に思い悩みをため込んでいる様子もないのである。しかし元祥は見方が違っていた。
「内蔵助という男、あれは徒者ではないぞ。ついぞ歯の立つ男でないことは、お前も心しておいた方がよいぞ」
その時元任は、まだ半信半疑で、その言葉に納得は出来なかった。

杉ヶ峠が十年一日にごとく風波のない日々を重ねた慶長十五年、坂崎藩でも津和野入り十年目を迎え、領内に大きい不満の声を聞くこともなく出羽守の評判も上々であった。そこを節目と見たのか重臣にも入れ替えが行われ、弥左衛門は郡奉行を退き年寄役となり、後任に高畠七兵衛が就いたのであるが、杉ヶ峠の件については一切申し送りはしなかった。

三の瀬代官には弥左衛門の子、弥右衛門が着任し、杉ヶ峠との窓口を引き継いだのであるが、弥左衛門はこの息子にさえ杉ヶ峠の真相は知らせていなかったのである。

一方、萩では城も完成し、活気に満ちた町々がそこここに整って来て賑わいを見せていた。何にもまして目につくのは、寺の数の多いことである。芸州、石州から毛利を慕い、家臣を頼って次々と移ってきたのである。

大佐和尚は海潮寺の落成と同時に住職として移り住み、広厳寺は益田元祥の萩での住まいとなっていた。本堂は外観こそ目立つほどのものではないが、堂内は元祥が藩内重臣や外客との応対するに恥ずかしくない普請造作がなされていた。また本堂を取り巻くように家臣共の仮宿などとして十軒を超す家が建ち並んでいたが、そこにはいずれ杉ヶ峠から内蔵助を呼び入れるようになるであろうという目算もすでにあったのである。

慶長十五年という年は、毛利藩にとって忘れることのできない出来事がある。かねてより幕府に届け出る領内の検石が行われていたのであるが、五十四万石近くになったの

である。この石高というのは、この先、幕府が各藩に軍役を下す際の基準とされるのである。ここで益田元祥と本多正純の付き合いが大きく役立ったことは言うまでもない。今では幕臣中で絶対的とも言える権力を手中にしている正純は、幕府への届け出石高を三十六万九千余石に削ったのである。この石高は徳川治世の二百七十年近く続いた事を考えると、毛利藩にとっては幸事と言っていいだろう。

徳川幕府が着々と安定の度合いを増していく反面、家康の心中では豊臣の存在が目障りになって仕方がない。それがいつか豊臣抹殺まで脹らんでしまったのである。各大名たちに、家康の思いが伝わらぬわけがない。関ヶ原以来の戦さに向かっていつしか動き始めたのである。

坂崎出羽守の気持ちの高ぶりは早くから人一倍であった。彼の律儀さがそうさせたのであろうが、大名に取り立ててもらった恩は一日たりとも忘れたことはない。家康のためならばの一念が、やがて取り返しのつかない裏目になって出ようとはとはその時はまだ、知るよしもなかったのである。

益田元祥が赤穴内蔵助を萩に落ち着かせることに心を決めたのは、取り立ててのきっかけがあったわけではない。茶壺を作り始めてすでに十五年になるが、そういつまでも際限なく続くとは思えないし、朝鮮から来た李勺光一党の焼物作りが順調で、かねてより、これから先も毛利藩にとって大きい役割を果たすことになるであろうと元祥は読んでいたのである。再び世情が揺れそうな今、他藩の領内での仕事には、逃げを打つということでなく、内蔵助の技倆を生かすためにも、萩に棲みつかせることが良策であろうと考えたのである。萩での焼物は今のところ李勺光一党の一本柱であるが、内蔵助の腕をしてもう一本の柱とすれば、焼物仕事は盤石になる。

慶長十八年秋、内蔵助は静江と共に、かねてより広厳寺脇に用意されていた二人の住まいに落ち着き、始めて萩城下に足を踏み入れた。前の年、杉ヶ峠は大雪に見舞われ窯場の者たちの難儀は、窯場始まって以来のことだった事もあり、元祥の計らいでひと冬だけ萩で過ごすことになったのである。

誰よりも大きい喜びを得たのは静江であった。杉ヶ峠では兄元任と共にあった日が多く、父母のことなど会うことはないまでも、身近に感じながらであったが、元任の家に健在な父母を訪ねたときは、十五年ぶりに老いの来た父母の姿を目にして、言葉もなく体中の涙を流し尽くしたのである。

そばに座った内蔵助が、挨拶のあと黙り込んでしまい、大粒の涙を落とし続けた。それは元任にも静江にも始めて見せた涙であった。

元任は思った。これは静江のもらい泣きではない。日本に渡り来て、ここで始めて国の親を思ったのであろう。内蔵助の積年の思いが今始めて実感として心を波立たせたに違いない。静江の父が

「内蔵助殿、かねがね静江を大事にしてくださっておること元任より聞いており申す。ただただ感謝の一念でござる」

と、深く頭を下げたときも、何の反応をみせるでなかったことは、内蔵助の心が今どこにあるか元任に確信させたのである。

その後、帰ってからのこと静江に、

「家族とはよいものじゃの。今日、久しぶりに私も人の子であったことを知らされたようで、嬉しかった」
と、漏らしたと伝え聞いたときは、喜びと異国に連れ来た罪深さなど、複雑な思いに駆られたのである。

広厳寺から李勺光一党の窯を見ることは出来ないのであるが、谷間から山肌を這い上がる煙は墨絵の山霧のようにたなびき、風の具合では煙のにおいを運んでくることもあった。
「元任殿、向こうの谷間に焼物窯があるのでしょうか、三日ばかり前に煙が出ており、明け方には煙のにおいがしておりました」
広厳寺を訪ねてきた元任に、内蔵助は新しい発見でもしたように聞いた。
「朝鮮から来た李勺光とかいう男が弟と一緒に焼いているそうじゃ。益田の殿も一度みんなで一緒に訪ねてみようと申されていた。いずれ近いうちに行くようになるじゃろう」
内蔵助も興味を持っているようで、

「それは楽しみでございます。この冬は、ここ萩で過ごすことになるそうでございますので、出入りが許されれば毎日でも通ってみたいと存じます」
やはり日本に来てまだ自分の窯以外、見たことすらないことが興味を引き立てるのだろう。

その日は意外と早くやってきた。朝夕山間では肌寒さを感じるようになってきたが、晴れ間さえあれば昼間は心地よい季節である。李勺光の窯出しが一段落して、一息入れているところを狙ったように、元祥の家臣三人と元任に内蔵助が連れ立って訪ねたのである。
すでに窯場には知らせが届けてあったが、思いの外閑散としていた。元祥たちも広厳寺から歩いて登ってきたので、駕籠と違って大袈裟ではなかった。
李勺光と窯を取り仕切る佐々木源十郎が、丁重に出迎えた。元任は聞いていなかったが、元祥は今までに何度か足を運んでいるようであった。
「今日は赤穴内蔵助を連れてきた。石見の方で仕事をしていたが、これから先、萩でも

始めることになる。よしなにの」
佐々木源十郎はえらく恐縮の態である。元任は源十郎とどこかで以前会ったことがあるように思ったが急には思い出せず、その時は口にも出さなかった。
「窯を出したそうじゃの。どうであった」
源十郎は満足な窯であったと告げ、
「来年秋に、京都の本阿弥家に茶碗を納めることになっており、春の窯入れで焼き出さなければならぬ大役を控えておりまして、此度の窯もその試し焼きでございました」
元祥は初耳らしく、
「ほう、そういうことがあるのか。萩の焼物も広く知られるようになったものじゃの。上々ではないか」
満足に感じたのだろう、上機嫌な顔を見せた。
「勺光よ。内蔵助に窯など見せてやってくれ、これから先も往来を重ねることになり、腕を競うことにもなろうが、そこは毛利のためにの」
「心得ております。どうぞご心配なく今後ともよろしくお力添えの程、お願い申し上げ

ます」
勺光は丁重な言葉で元祥に対していたが、その日内蔵助には無口であった。藩内での内蔵助の位置取りが気に掛かるのかも知れないように思えたが、勺光一党の頭数を考えれば、勺光なりの責任感があったのかも知れない。
一行六人が、人気のない下り坂を、すでに暑さを失っている西日を正面から受けながら、広厳寺に向かって戻っていく。元祥には久方ぶりの野歩きと言った趣で、上機嫌で饒舌であった。
「元任、そちは佐々木源十郎と知り合いであったのか。そうであればもう少し話をしてみれば良かったの」
元祥は二人の素振りに気がついていたようである。
「佐々木殿も、もとは宍戸殿の家中で、確か勘定方におられた時お見受けしたように思いますが、まだ私も前髪を落としたすぐ頃のことで、佐々木様に覚えはないと思います。二度目の朝鮮渡海のおりも同じ船だったように思いますが、その後、お会いしてお話し

するような機会もないままとなっておりました」
「そうか、あれも宍戸の出であったか」
元祥は軽くうなずくだけであった。
「ところで内蔵助、窯から出たものを見てどうじゃ」
元祥の気になるところである。内蔵助も言葉を慎重に選びながら、
「土も違いますし、釉も窯も違うので、まだはっきり申すことは出来ませんが、曲がないと思います」
「そうか、曲がないと申すか、なかなか手厳しいの」
ちょっと意表をつかれた元祥である。次の言葉には間を取った。
「内蔵助はまだ茶碗を作ったことはなかったの」
「はい。茶碗のことは存じません」
「茶碗はの、曲のないところに良さがあると思うておる。それだけに難しいものかも知れんがの」
道すがら語ることでもあるまいと元祥は話を切り替えた。

「勺光の窯で、一番違うと思うたのはどこじゃ」
内蔵助は、切り出す話の順番を考えながら、
「まずは窯の作りが違います。土が違うのは当たり前ですが、その土の作り方も違うと思います」
「ほう。土にも作り方があると申すか」
元祥は怪訝な面持ちである。
「作るものによって、いろんな土や砂の混ぜ方が違って参ります」
内蔵助は、大事なことを忘れていたように、
「釉に稲藁を使うていないことは、不思議に思います。藁を使うことで作ったものにいろいろな変化を出すことが出来ます」
「つまり、そこに曲が出るということか」
元祥も詳しいことはわからぬながらも納得顔で、寺への上り坂をゆっくりと戻っていったのである。

慶長十八、十九年と二度にわたる家康率いる幕府軍の大坂城攻めで、さしも栄華を誇った豊臣氏もついに滅亡に至るのであるが、毛利も坂崎も徳川幕府軍として参戦し、とくに坂崎出羽守は家康直下に参陣してめざましい奮闘をしたのである。

この大坂落城を境に、天下は大きく動き始めるのである。この度ばかりは杉ヶ峠も外の風というわけには行かなかった。

内蔵助は杉ヶ峠と萩での暮らしを往来しながらであったが、元祥の指示で城下外れの小畑小丸山に新しく窯を築くことになり、気ぜわしい落ち着かない日々を余儀なくされていたのである。

五章　荒れ狂う「元和」

徳川方の大坂城攻めで、豊臣家が断絶することになったのは慶長二十年五月のことであるが、この時家康の気がかりに豊臣秀頼の正室となって大坂城内に残る孫娘千姫の救出があった。後年多くが語られるが、坂崎出羽守が中心となって救出作戦が行われ、救い出すことに成功したことは間違いのないところのようである。しかしその過程となると諸説あるものの、出羽守が大坂方にいた、もと宇喜多家の家臣であった堀内某と内通し、落城寸前に出羽守の手に引き渡されたのが真相らしい。

一説には家康が千姫を救出したものを婿にすると言ったといわれるが、救出した本人出羽守の動きにそのような痕跡は認められない。事実、出羽守はその後千姫の婿捜しに奔走しているのである。

出羽守にとって、やはり一番の不運は、家康と千姫の父であり将軍職にある秀忠の確執に巻き込まれたと言うことであろう。出羽守は家康からとも秀忠からとも言われているが千姫の婿捜しを依頼され、京都の公家と渡りを付け双方の内諾を得たと言われている。しかし秀忠とすれば千姫の意向もあって、これを無視して本多忠刻に嫁がせる事になるのである。

秀忠は本来出羽守が好きではない、以心伝心出羽守も秀忠に好意は薄い。そこにもって出羽守の決定的不運は家康の死である。大坂落城から一年と経たない翌元和二年四月のことである。出羽守に絶望的心情が働き、死を賭してでも武家の面目を立てたいと思ったとしても不思議はない。

追いかけるように千姫の輿入れがその年九月に決まった。出羽守はその輿を奪うという暴挙を画策、江戸屋敷に家臣と改易によって町にあふれる浪人を集めた二百人を手勢として立て籠るのである。

その行動はすぐに幕府の知るところとなり、時の大目付柳生但馬守宗矩の指揮下、坂崎江戸屋敷は包囲されてしまう。本多正純は武力を持って鎮圧することを建言するので

あるが、柳生宗矩の進める出羽守の乱心による切腹によって江戸市中での騒動を起こすことなく落着させることに一決する。

正純とすれば出羽守に、武士の花道を用意してやりたい思いがあったようであるが、家康亡きあと、正純自体が幕閣内での存在感を失いつつあった時期だけに、これまた出羽守にとっては不運の重なりとなったと言えるだろう。

出羽守の切腹には、坂崎家存続の確約がつけられていたのであるが、幕府の後始末は一転、津和野藩坂崎家断絶に向かって動くのである。いつしか出羽守を首謀とする藩全体の反逆と見なされ、主だった家臣は切腹、従わぬものについては討ち果たしもあり得るという事になってしまうのである。。

元和三年七月になり津和野に亀井政矩が入り、坂崎騒動の収拾に当たることになるのであるが、隣藩毛利藩内にまで柳生宗矩の手のものが入り込み、見張り番をするという用心深さであった。

城代家老浮田織部を始めほとんどの重臣は幕府の出方に納得のいかないまま、出羽守

への忠節から追い腹を切って果てたのである。三輪弥左衛門もその外ではなかった。
福川三の瀬代官となっていた三輪弥右衛門も、父弥左衛門と共に腹を切る覚悟を固めていたのであるが、亀井が入ってくる一月前のことである。
「弥右衛門、そちが腹を切ることは相成らぬ。武士の面目は父が立てることでもう終わりじゃ。折角、由里との嫁取りも決まった矢先、なにも死に急ぐことはない」
弥左衛門には幕府の理不尽が腹立たしいのである。しかし揃って腹を切る程の義理立てには気持ちが向かないのである。
「お言葉ではございますが、今では若年ながら三輪家の当主でございます。嫁取りに関わって生きのびるなど女々しいことはなりませぬ」
弥右衛門も父に似て一徹である。
「考えても見よ。殿がなぜ腹を召されたか。それに引き替え幕府の仕打ちは何じゃ。しかし、若君が蟄居とは申せ命が助かった今、またの機会に恵まれたとき誰が力となる。その日のためにも辛くとも命を長らえておけ」
弥左衛門の言い分にも一理ある。

「そのような日が来るとお考えですか。私には考えられませぬ」
「もし来なければ、それはその時のこと、それなりの生き方を考えればよい」
弥左衛門も人の親、不憫が先に立つのである。
「とりあえずは、杉ヶ峠に毛利家中の中川元任という男がおる。頼って身を置くがよい。話は通してあるし、由里の親御殿もすでに承知の上の事じゃ。それにこれからの母のことも頼みたいのじゃ」
弥右衛門にはついぞ承服しがたいようであるが、母を持ち出されては一概に意地も張れないのである。
「今日のところは考えさせていただきます」
弥右衛門は不承々々引き下がったのであるが、やがて弥左衛門の言ったとおり事は運んでいくのである。
津和野に新しく入った亀井政矩は出来た人物で、将軍秀忠の信任も厚く、西国の拠点と言われる姫路城に入るのではないかと噂されるほどであった。正室は徳川家の縁続き

であり因幡国鹿野藩藩主としての立場は小藩ながらなかなか強いものであった。毛利とは隣藩として親しさを深めていくのであるが、生来の病弱がもとで、津和野に入って三年後には京都において客死してしまう。跡継ぎである茲政はまだ三歳であり、家督の相続は認められないところであったが、そこは徳川との縁に繋がることから、政矩の従兄弟であり敏腕で知られる家老多胡主水が後見となり、改易を免れたのである。

毛利であるが、まだ杉ヶ峠を手放すことは出来ない。すでに窯を開いて二十年近くになるが、上方に向けた商いも下火にはなったとはいうもののまだ捨てがたいのである。と言うことは、杉ヶ峠の利権を大塚屋と継続させなければならない。毛利は大塚屋と談合の上、今度は山の材木を買い取る名目で利権をつなぎ止めたのである。

坂崎藩の重臣のほとんどが、殿の殉死として切腹して果てた。三輪弥左衛門も菩提寺において見事な最期を遂げたのである。それを見届けるとすぐ、杉ヶ峠に傷心の三輪弥右衛門が人目を忍んで妻と母を伴って入って来た。毛利家でも坂崎の要人とまでも行か

ないまでも、一応代官まで務めた人物を引き受けるには異論もあったが、元任の懇望で窯場に預かる事となったのである。

弥右衛門が窯場に姿を見せたとき、二十歳過ぎの若さであったものの、茫然自失の態でおよそ武士からぬ有様だったのである。元任にはその姿は痛々しく映った。

「弥右衛門殿、ここに来たからには、もう何も心配することはござらぬ。ゆっくりなさることじゃ。と言うても父上のことと言い、貴殿の暮らしの変わりようと言い、尋常ならざぬ出来事が続いたこと、すぐに忘れることも適うまいが、と言うて、余り尾を引くことも考えもんじゃ。体を動かすことで少しづつ癒やしていくことが一番じゃ」

「忝なく思うております。いつまでご厄介をかけることになるかわかりませぬが、父が死に際に申しておりましたように、差し当たっては武士を捨て、仕事の手伝いをさせていただく所存でございます」

元任には、弥右衛門から固い決意のような覇気は感じられなかった。

「この焼物仕事は気の長い仕事での、今日があれば明日もある。そう思うてのんびり構える事じゃ」

今、弥右衛門は元任の言葉を素直に聞き入れる余裕などなかった。
「そうじゃ、内蔵助を引き合わせよう。明国人というても今じゃ日本人と変わらぬ」
元任は呼びに立った。弥右衛門は由里と黙ったまま辺りの目をやりながら元任をまった。母は部屋の隅っこに小さくなって座り込んでいる。今いるところは、毛利家中から泊まりがけで来る者のため、一棟別棟で建てた寝所だけ二間の住まいである。
「これが赤穴内蔵助でござる。に、妻の静江と申す。今のところこの二人がここの主のようなものじゃ」
元任は努めて気を楽にさせようとするが、元任には余り得手な場面ではない。それなり形どおりの紹介を済ませ、
「仕事のことはゆっくり後のこととして、住まいはここを使ってもらうが、何かと不便もあろうが我慢してくだされ。弥右衛門殿にはしばらく仕事の様子を見てもらって、そのうち出来ることから手伝ってもらうとして、由里殿には静江を手伝ってもらうことにいたそう。のぉ静江」
内蔵助は黙り込んだまま弥右衛門にちらちら目をやっている。

「あの、由里殿は止めていただきとうございます」
十六歳になったばかりの由里が、顔を赤らめてうつむいたまま小声で言った。
「そうか、ちょっと堅いかの」
「由里さんでいいでしょう」
静江がこともなげに言った一言で、座の六人に少しばかりではあるが親しみが生まれたのである。
早いような、じれったく遅いような日々が重なっていく。連れだって入った母は、環境の急変が身に応えたものか、一年と経たぬうち病没してしまった。由里は静江の手足となって暮らしにも慣れを見せ始めていたが、弥右衛門は一朝一夕に変われるはずもなく、言葉少なく黙々と内蔵助の指示する仕事をこなしていたのである。窯場においても開窯当時の顔ぶれは、長い年月のうちに一人二人と減って行き、内蔵助が冬の間萩に住まうこともあり、かっての活気はすでに影を潜めていた。
弥右衛門の母の死がきっかけであったと思われるが、内蔵助と弥右衛門は気心の通じ

合いが信頼となって深まっていった。お互いの生きてきた道のりを断片的ながら話すことが見受けられ、やや歳の差こそあれ友情を育てて行くようであった。

「弥右衛門殿には、これから先どのような道が開けてくるのであろうの。私にはまだお武家のものの考え方がよくわからぬところがあるが、あまり考え詰めずしばらくは成り行きに身を任せることが大事と思うがの」

このところ、内蔵助は年嵩なものの言いようである。

「今では身共もそうすることしか道はあるまいと思うが、由里のことなど考えると、気が重いとしか言いようがない」

弥右衛門も内蔵助には重い口を開くようになっている。

「私とて同じで、遠い明国から望んで来てみたものの、いまだに自分で作りたいと思える仕事に行き当たらず、果たしてどうなることか。毎日毎日歳は取っていくしの」

本心とも戯れ言ともわからぬように言った。

「内蔵助殿には立派な手職があるから、身共など武家暮らしを離れればただの棒杭にしか過ぎぬことが、近頃つくづくと思われてならぬ」

「そんな弱気でどうする。人の生涯は捨てたものではない。前の開けるときが必ず来ると信じて辛抱することじゃ」

内蔵助はすっかり弥右衛門の励まし役である。内蔵助にすればそうすることによって時々いらつく自分の気持ちを抑えようとしているのかも知れない。

内蔵助は萩との往来も十年になり、すでに萩城下はずれの小畑小丸山に窯を築きすっかり二重生活に身を置いていたのである。しかし萩の窯場にはまだ手伝いの頭数が常時揃っているでなく、窯に火を入れたのは築いて三年っ少々になるが、まだ二回ほどに過ぎない。何を作ればよいものか元祥からも元任からも何の指示も出なかったことにもよる。時折出入りする李勺光の窯での影響からか、このところ茶碗に興味を示し始めていたのであるが、といって杉ヶ峠で茶碗を作ることはなかった。杉ヶ峠の土が自身思い込む茶碗の土と相容れないものを感じ取っていたことに起因するようである。

一方、京に上ってくると言って旅立ったまま姿を見せなくなった李勺光にかわって萩での焼物を今後どう続けるがよいものか、毛利家中では苦吟が続いていた。益田元祥も、

どの仕事一つ失うことなく進めるには、どうすればよいものか腹を決めかねていたのである。要は内蔵助の処遇である。
。

坂崎騒動の後始末が終わるもを待つように、広島城主福島正則の改易問題が持ち上がり、津和野亀井藩に広島城受け取りの命が下る。毛利藩には福島家中の反乱に備えて安芸と周防の国境に陣を張るよう幕命が出た。毛利の読みでは、福島家中に幕府を相手に騒動を起こすような勢いはすでにないと見ていたのであるが、幕命でもあり、また政矩の急死に家中落ち着かぬ時である亀井の後ろ盾の役目は、今後の親交に悪くはないと堂々の陣を張ったのである。

毛利藩、中でも益田元祥を取り巻く状況は、日に日に変わっていく。幕閣の盟友本多正純が宇都宮城主として秀忠側近から遠ざけられ、幕閣の勢力図も大きく変わり始めているようであるが、今すぐ動くことは早すぎるように思える。

津和野藩の家督相続にともなって家老多胡主水周辺にきな臭さが漂いはじめている。

多胡主水の向こうを張る、主水の一族になる多胡勘解由が一筋縄の男ではないようで、これはどうも尾を引くと考えなければならない。折角今まで前の藩主政矩と築きあげた関係も振り出しに戻ったように思えるが、捨て置くことは出来ない。

改易された福島に変わって広島に入った淺野家とは、今までさほどの関わりがないが、今後隣藩として交流を深めていかなければならない。しかしここには救いがあった。毛利家転封の際、元宍戸家の家老職にあった中村重左衛門が、吉田郡山の近くに残っており安芸北部から備後一帯の山支配との名目で、領内不案内な淺野家の力になっていたのである。重左衛門は表にこそ出ないものの淺野家中においては大きい役割を果たしていたのである。毛利藩にとっては掛け替えのないつなぎ役として、何かに付け仲立ち役を依頼していったのである。

元和六年、梅雨の鬱とうしい毎日が続く頃のことである。毛利家と亀井家に時も同じ頃、同じ文面の書状が届けられた。

差出人は広島淺野家中、渡辺唯右衛門となっているが、藩主淺野幸長の添え状がつけ

てあった。

渡辺唯右衛門は明国から渡り来た武林降その人である。赤穴内蔵助こと李郎子と慶長の朝鮮戦役の折、共に戦い日本に渡り来ることになったが、不幸にも離ればなれになって、すでに二十年を越す星霜を経ていた。

「津和野というところ界隈で、その昔朝鮮での戦さのおり、日本に渡り来た李郎子なる男が、焼物仕事をしていると思うが、その後の消息などについて、ぜひお知らせいただきたい」

ざっと、このような問い合わせである。添え状には、

「良しなのご配慮を賜りたい」

とあるだけで、両家ともさほどの気遣いには及ぶまいと、高を括ったところもあったが、その実返書を出すことにためらいもあった。

両家共にそうしなければならない事情も抱えていたのである。

亀井家にとっては、坂崎以前の吉見時代のことで詳しくわかろう筈もなかったし、ましてや大塚屋に貸し与えている。藩内事情も今それどころではない。

毛利家は毛利家で、二十年に及ぶ隠し仕事に触られることになる。今、公にすることは出来ない。話の広がりから内蔵助に知られることも面白くない。

結局、両家ともに無視してしまうことにならざるを得なかったのである。

一年を過ぎた頃、渡辺唯右衛門から再び問い合わせの私信が届いた。これには唯右衛門の切々たる心情が書き連ねてあった。唯右衛門は後世に言い伝えられているように漢詩をよくしただけあって、品格ある文字が書状を飾り、思いの丈が溢れんばかりであった。

「齢五十を過ぎ、隠居も身となって、今思うのは日本に渡り来ながら二十年の歳月会うことも出来ず今日にいたり、あの世に旅立つまでにぜひとも一度会っておきたい気持ちが日に日につのり、矢も楯もたまらぬ思いの日々を過ごしている。甲州、紀州にあるときは、半ばあきらめの気持ちであったが、調べてみれば今は隣藩で間近いところと聞く、李郎子もいのち長らえているのであれば、否と言うこともないものと思う。なにぶんのご配慮を賜りたい」

ざっとこうである。
この書状に心を動かされたのは亀井家家老多胡主水であった。しかし返答のしようがない。まるで雲を掴むような話である。
多胡主水は、まず毛利に書状をもって事の真相を問い合わせた。毛利の返書が届けられるまでには、数ヶ月を要したが、
「何しろ年月の経たことであり、詳しく調査の上浅井家に直接返答する」
旨、知らせてきた。しかし、真相が唯右衛門に届くのは、それから数年後のことになるのである。

内蔵助一党の毛利家中での処遇であるが、表立った動きは封じられ、小畑小丸山に築窯こそして、李勺光の窯場に出入りするものの、確たる存在を知らしむることはなかったのである。
元和も八年になる頃にようやく毛利藩中における焼物の制度確立を話し合う機運が高まってきた。一つには、本多正純の失脚が原因となったのである。益田元祥の頭にはま

だ萩における焼物の制度の仕上がりの構図がまとまっていない。上方における商いの先が読めないこともある。しかし元祥の真意は別のところにあった。
元和という時代は、表立ってでなく、総てのことが裏側であり底であり陰のところで荒れ狂った時代である。徳川幕府が開府して間がなく、家康の死に直面し、秀忠による諸制度の整備も緒に就いたばかりであるところに、家康、秀忠にそれぞれ繋がる背後における権力闘争が、根深いところで陰惨に繰り広げられていたのである。元和五年のことであるが、のちに幕府の老中、大老まで出世する土井利勝が幕使として、わざわざ萩まで来ているところを見てもただ事でないことが知れる。それに伴い、改易、廃絶が繰り返され、各地大名たちが安堵を得るまでいかなかったのである。各藩ともに疑心暗鬼がはれるでなく、かといって藩内安定も急がなければならない、何重苦もの中で、苦しみもがいていたのである。
毛利藩もそも埒外ではなかったのである。元和八年には、あまりにも膨大な借金の山に、益田元祥に命じて財政再建の特命を出すに至っている。毛利秀元の指揮下、元祥は十年を待たずして借金を完済し、多額の剰余金を残すまで辣腕を振るっている。新田開

発、産業の育成が成功したと言われているが、その真相には不可解な部分が残されている。元祥が杉ヶ峠において、どれほどの隠し金を作っていたか、それをどう運用し活用したか、そこに謎を解く鍵が隠されているのである。

益田元祥は、借金返済の金の出所を明かさない限り、内蔵助を表に出すことは出来ない。藩内における焼物細工人の制度立場が論議され、何年も待たず確立しようという動きが出ている今、元祥の胸中に内蔵助の処遇について情に忍びない思いが渦巻くのである。

内蔵助と言えば、無口無感情に日を過ごしている。相変わらず杉ヶ峠と萩での暮らしを繰り返しながらであるが、杉ヶ峠では三輪弥右衛門が窯場の采配を取るまでになり、萩との往来に明け暮れる中川元任とうまく連携しながら仕事を進めていたのである。

内蔵助には、まだ小丸山に窯こそあるものの、住まいについては用意されることなく、光厳寺を住処とし、元任の家、すなわち静江の実家にも頻繁に寝泊まりするという落ち着かない萩暮らしだったのである。

内蔵助と静江の光厳寺での話の一端である。

「今ここでこうやって暮らしていることが、嘘に思えるときがある。明国に生まれてどのような巡り合わせでこうなったのか、不思議にさえ思えてくる」

内蔵助にすれば当然な思いかも知れない。

「それは私にしても、あなたとこのような暮らしに入ろうとは思っても見なかったことでございます」

静江の思いも正直なところだろう。

「子供に恵まれないことが、いいことか悪いことか考えは及ばぬが、そなたにとってよい生涯と思えるのか、これから先のことを思い合わせると気が重い」

内蔵助が始めて口にする今後の不安であった。

「私にはあなたとのご縁が悪かったなどと言う思いは微塵もございません。むしろ嬉しゅう存じております。始めのころは世間の嫌な噂や杉ヶ峠での寂しさに泣いた日もございますが、もう何も心配することはございません。このままの暮らしが一日でも長く続くことを願うばかりでございます」

「心底そう思ってくれるなら、私も嬉しい限りであるが、子供がのぉ」
近所の子供にでも目がとまったものか、その日はちょっと子供にこだわりを見せた。
「そのことであれば、またいつか兄上がよいように取り計らってくれるでしょうから、思いつめることもないでしょう」
静江にしても似たような想いがないでもない。
「そなたに仕事のことをあれこれ言っても始まらんが、毛利様益田様のお考えがよくわからんのに、今、杉ヶ峠で生涯を終わることにでもなればなどと考えると、そなたが不憫でのぉ」
内蔵助には、毛利家中における焼物に関する動きについては皆目わからない。しかし何かただならぬ気配だけは感じられるのである。

元和九年、春を待って内蔵助と静江が杉ヶ峠に戻るとすぐ、元任が後を追って訪ね来た。慌ただしく一刻少しばかりで旅立ったのであるが、
「この度、急なご用で大坂に出向くことになった。しばらくは帰れぬと思うが、ここの

ことは万事変わりなく続けることになっておる。心配することのないようにのぉ」
萩にいた冬の間にも聞かなかった話に、
「焼物のことでお出かけなのですか」
静江も寝耳に水である。
「いやいや、この度は大坂城の石垣工事の奉行を仰せつかっての、西国の多くの大名たちが集まっての大工事じゃで、ちょっとばかり難儀じゃがの」
「それは名誉なことでございます。それで長くかかるのでございますか」
今更心細くは思わぬまでも、内蔵助には心配もある。
「四、五年はかかるかも知れんが、たまには戻ってくることもあろう。それと、わしの後に佐伯源左衛門という男が入ってくることになった。歳は弥右衛門と同じくらいじゃが、無骨で変わり者なところがあるが気はいい男だから、上手につきあっていくがよい。そうそう、弥右衛門のことは流れ者の浪人と言うことになっているので、左様心得ておくようにの」
わらじの紐をとくでもない元任に、伝作がしばらくぶりの挨拶で茶を持ってきた。

「おう、伝作も変わりないか。だいぶ歳も寄ったの。ボチボチ萩に帰ることにでもするか」
そう言えば伝作の歯の抜け落ちが目立つようになり、老いを感じさせる。
「静江様もおいでのことだし、山暮らしも気に入っておりますので、どうぞお気遣いのないようにお願い申します」
今ではこの杉ヶ峠の主気分である伝作は陽気に言った。
「弥右衛門に変わりはないか。姿が見えんようじゃが」
「それが、正月明けに二人目の子供が生まれなさったが、今度も十日ばかりで亡くなってしまわれて、可哀想なことでございました。今日は山に入って松の木出しをするとかで、人夫と馬を連れてお出かけでございます」
内蔵助も思い出したように、
「そうであったの。今回も駄目であったか、可哀想にの。で、由里さんは変わりないか」
「それはもうすっかりお元気で、賄いごと一切を取り仕切っていただいております」
「それはよかった」

伝作も久しぶりに饒舌であった。元任は内蔵助に何かを含んだように、
「内蔵助、そなたに言っておきたいことがあって立ち寄ったのじゃが、この度、益田の殿は大変なお役目を担われての、杉ヶ峠のことは置き去りにされているように思えるときがあるかも知れんが、決してそのようなことはないので何があっても殿と身共を信じて、今まで通り仕事を続けてくれ。それだけをしっかりと頼んでおきたかったのじゃ」
後、元任はそれぞれに別れを惜しんで、旅立ったのである。
「茶店に寄った気分なのか、永のいとまに来たような気もするし、嫌な兄上でございます」
静江はちょっとばかり心配顔で内蔵助につぶやいた。
「元任様の優しさが出ただけのことで、何も心配することはございません」
伝作が横から口を入れたのを追って、
「そうだよ。変な心配はしないことじゃ」
内蔵助も、不吉な陰を追い払うように静江を宥めた。

佐伯源左衛門が杉ヶ峠に姿を見せてのは元任が旅立って五日ほど後のことだった。どちらかというと小男で男振りも元任には及ばなく見える。実直さと小賢しさが同居しているようで、窯場のもの皆が戸惑いを見せたことも宜なるかなであった。

しかし翌日には杞憂であることがわかったのである。翌朝のこと、皆のものを集めると挨拶をかねて一言ぶったのである。

「この度、中川元任殿に変わってここの仕事に携わることになった佐伯源左衛門と申す。益田の殿よりここの仕事のみかじめ役を仰せつかったが、身共にはさっぱりわからん。益田の殿との取り次ぎは責任を持って果たす覚悟である。しかしここにいる間は、皆の用心棒であり手伝い役と存じておる。仲間の一人として何かと教えてもらいたい。堅いことは抜きにしてよろしく頼む」

あっさりしたものであった。皆の安堵にかぶせるように、

「身共はこのような暮らし向きは始めてのことじゃが、人間はどのようなところでも暮らしていけることがわかったような気分じゃ。仲良うの。このような寂しところで爪弾きにしないでくれ。頼んだぞ」

皆に笑みが浮かんだことは言うまでもない。

秀忠が将軍職を家光に譲り、家康と同じ大御所に位置取りしたところで、元和が終わりを告げ寛永へと歩みを進めるのである。

萩においては寛永二年冬目前の頃、早々に焼物の体制堅めが表立って行われた。李勺光の長子山村新兵衛が作之允に、坂助八こと李敬が高麗左衛門にそれぞれ任じられ、焼物を取り仕切ることになったのである。

内蔵助は全く蚊帳の外に置かれた格好である。時の状況を考えればやむを得ないことではあったろうが、元祥は多忙、元任は大坂と内蔵助に何の沙汰も話もないままに決まったことは、内蔵助には少なからぬ動揺を来したし、静江の気持ちも穏やかならざるものであった。正月前のことであったが、この年、萩には向かわず、杉ヶ峠で年を越すことにしていた。どうしても萩に足が向かなかったのである。

外は冷たい雨である、あれでも雪に変わるかも知れない。そんな日のことである。

「ここでの年越しも久しぶりじゃが、寂しい思いをさせて悪いの」

内蔵助は仕事のほかは静江を思いやる事しか考えないようである。
「萩の方では焼物の事情も変わったようですし、兄のいない萩に帰っても、嫌なことか心配事が待っているだけかも知れません。ここの方が落ち着いたよい正月になると思います」
静江には内蔵助の、いつにない心のざわめきがわかっていた。自分自身にも不安で割り切れないものがあったからである。
「そのことじゃが、いつも言うように、私が疎まれることはさほど気にもならんが、お前をこのようなところで朽ち果てさせるのは、どう思うて見てもつらい」
内蔵助が静江に打ち明けた。
「この先生涯このままと言うこともないでしょう。毛利家中も大変なときのようですし、深く思い悩むことはしない方がよいと存じます」
さすが静江は武家の娘、自分の心を隠して内蔵助の言葉に同調しなかった。
「私も四十の坂を越して、子供こそいないものの先のことを考えずにはいられん時がある」

「そんな取り越し苦労はなさらないことでございます。益田の殿も付いていてくださいますから、心配なさらないでください」
内蔵助夫婦には、いたわり合うよりほかに、差し当たって生きる望みとてなかった。
毛利家中における寛永初年は静かに移ろっていった。むしろ隣藩亀井家におけるお家騒動が、くすぶり続けていることが不気味でもあり、いつか火の粉が降りかかってくるのではないかという不安もぬぐい去れないでいたのである。
亀井家のお家騒動であるが、城代家老多胡主水と一族である年寄多胡勘解由や塩冶弥五右衛門一派との権力闘争である。問題の根に大きい難問を抱えているわけでなく、勘解由側が次々と些事を持ち出し積み重ね、問題を己の手で作ってまで主水を引きずり下ろそうという魂胆なのである。最後にいたって幕府に訴え出るところまで行くのであるが、敗訴に終わり関連した多くの者が命を落とし、何ともお粗末な結果に終わるのである。
しかし毛利家中に、全く無縁な出来事でもなかったのである。ひいては杉ヶ峠の閉鎖

にまで発展することとなるのである。

寛永も六年を迎え、杉ヶ峠には喜び事が続いていた。中川元任が大坂での役目を無事果たし、帰ってきた。これからしばらくは佐伯源左衛門と二人で窯場管理に当たることとなったのであるが、源左衛門に二人目の男子が生まれ、しばらくは萩在住として役目をこなし、杉ヶ峠は元任が以前のように住まうことになった。追いかけて弥右衛門に三人目の男の子が生まれた。源左衛門はなかなか気遣いのきく男で、前の二人の子が育たなかったことを気にかけ、寒さや不便も多かろうと自分の子供に手をかける以上の気配りを見せた。その所為だけでもないだろうが、弥右衛門の子も今度はすくすくと育っていった。その子は忠弥と名付けられ、窯場の宝物として皆の寵愛を一身に集めていたのである。

好事多魔という例え通り、不幸は寛永八年突然やってきた。ちょうどその日忠弥の三つになった祝いに、元任が今日萩から持ち帰った酒と海の魚に、窯場の者たち皆が酔い

しれていた。外は六月の雨にじとついている。暮れなずんだ辺りにようやく夜のとばりが包み始めていた頃である。

「ちょっと小用を足してくる」

と、元任が座を立った。

「外は雨ですが、大丈夫でございますか」

弥右衛門が声をかけたが、

「何、すぐそこで済ませるから気遣い無用」

少しふらつきを見せたが、手を振り振りいい笑顔を見せながら外の闇の中に入ったのである。

それからほんの少し間があっただろうか、

「三輪弥右衛門殿とお見受け申す。幕府大目付柳生但馬守様の命により、お命頂戴いたす。ご免」

中にいるものには、突然の声で、聞こえはしたもののはっきりとは聞き取れなかった。

「ただならぬ声がしたの」

弥右衛門が、一度に酒に気が抜けたように顔をこわばらせ、部屋の隅にあった刀を手に外に飛び出した。
「元任殿、元任殿どこにござる」
弥右衛門の荒い声だけが部屋まで響いた。山にこだまする「元任殿、元任殿」と呼ぶ声が続いたのであるが、
「元任殿、如何なされた。何事でござるか」
この声が部屋に届いたとき、重苦しい空気が同時に部屋を襲った。

六章　又左衛門と名を替えて

弥右衛門が血にまみれた元任を担ぎ込んできたのは、声が静まってすぐのことであった。
「皆、騒ぐでない」
元任が苦しい息の中から、絞り出すように言った。
「兄上。何事が起こったのです。誰がこのようなことを」
内蔵助が言葉をかけたが続かず絶句した。静江をはじめ皆、身を竦ませている。人夫どもも入り口の土間で、ことの成り行きに呆然としている。
「刺客であろうか。・・・」
弥右衛門がひと言口にしたが、あまりの突然のことに、皆、口も利けない。
「皆、聞いてくれ。身共は今日の祝いの酒で、卒中を起こした。すまぬ」

元任が苦しい中で続ける。
「闇討ちにあって果てたでは、武士としてあまりに面目ない。そこのとこよしなに取り計らってくれ」
弥右衛門が傷の手当にかかっているが、生兵法では手につかぬ。それよりも弥右衛門には気がかりがある。
「元任殿、このようなときに申し訳ござらぬが、先ほど弥右衛門という声がかかったように聞こえたが、もしや拙者が狙われたのではござるまいか」
元任が懸命に目を閉じまいとする姿が痛々しい。
「そのようなことは御座らん。つまらぬ思い込みはするでない」
元任の目は宙に逃げて、弥右衛門の問いをはぐらかそうとしていることが、はっきりと見える。
「もしも、拙者との間違いであれば、詫びて済むことではござらん」
「馬鹿なことを考えるでない」
言うなり吐血し、あと大きく息を吸い込んだが吐く間もなく、首を落とし息絶えた。

「兄上」
内蔵助と静江の声が重なった。
「元任様」
座の外れの方から、伝作がうつろな声を出すと同時に、うっと唸るように泣き声を上げた。
佐伯源左衛門が萩に在り、元任の急死は杉ヶ峠の柱を失ってしまったのである。
萩城下の益田元祥への知らせは、内蔵助の差配で人夫の一人平六が馬に乗れると言うことで走らされた。兵六もそうであるが、杉ヶ峠には萩を知る者は内蔵助と静江しかいない。そうかと言って案じている場合ではない。内蔵助は人が変わったように状況を見つめ対処した 。そこには弥右衛門の思い沈む姿が大きい心配な痼りとしてあったし、内蔵助も「三輪弥右衛門殿とお見受け申す」と言う声を確かに耳に残していたからである。
兵六には「急な卒中で息を引き取った」と知らせさせたのであるが、状況を詳しくし

つこく聞かれたことから、誰かに闇討ちされたと言ったことから騒動が大きくなってしまった。

杉ヶ峠にはとるものもとりあえず、佐伯源左衛門が急ぎ戻ったのであるが、元祥の脳裏には、もしや坂崎の残党狩りの絡みではないかという疑念が浮かんだのである。しかし柳生家からの知らせではこの件についてはすでに打ち切りとなっているはずである。だが亀井藩の内紛の余波と言うこともあり得る。元祥は念のため柳生宗矩に書状をしたため確認を取る手立てを講じた。

元任の遺体は、元祥の内示もあって火葬に付された。

「一体何が起こったと言うことなのか」

佐伯源左衛門には、どうしても状況把握ができない。

「どこから来た者かはわかりませんが、狙われたのは弥右衛門殿のようでございます。今そのことで弥右衛門殿はひどくお悩みの様子です。どうすればよいのか私にも判断がつきません」

内蔵助は正直な胸の内を語った。

「そうであったか。差し当たってどうしたものかの。とりあえずは身共が遺骨を萩の親元に届けることにいたそうが、ところで静江殿はどうなさる」

源左衛門も事情はわからぬまでも、前に進まなければならない。

「弥右衛門殿、由里殿が気がかりでございますので、ここに残させます。兄上のことでありながら元任殿の家の者に相済まぬ次第ではございますが、今ここを離れることは後々悔いを残すことにもなりかねぬと存じますので、どうぞよしなのお取り成しをお願い申し上げます」

この内蔵助の心配が、現実のこととなったのは、源左衛門が萩に向かってすぐ、二日後のことであった。

その日、内蔵助夫婦は気がかりな朝を迎えた。昨夜のことである。

「内蔵助殿。今、身共はどうすることが正しい道と思われるか。どう考えても元任殿があのような非業な死を遂げられたことは、過ってのこととは申せ、身共の身代わりであ

ることは間違いないところでござろう」
弥右衛門の思いつめた言葉が、蒼白な表情から吐露されたのである。
「まだはっきりとそう決まったわけでもございません。弥右衛門様の思い過ごしかとも存じます。そのように突き詰めたお考えをなさると言うことは、良いことではございません」
内蔵助も思いを変えさせようと、必死であった。
「身共が腹を切って詫びて済むことではないと承知しておる。されど身共も武士の端くれ、身の処し方を誤りたくはござらぬ」
静江もそばから口を挟んで、
「どうしてそのように自分ばかりをお責めになるのでございますか。兄上もいまわの際に申したではございませんか。卒中で事切れたと。兄上の心中も思ん計かっていただきとうございます」
「その元任殿のお気持ちが、余計に身共を苦しめてどうにもなりませぬ」
弥右衛門の気持ちはすでに行き止まりまで来ている。

「そんな弱気でどうなさいます。生きておればまた恩返しの手立てもあろうというものではございませんか」
「そうでございます。どこまでも生きていただきとう存じます。ご子息忠弥様もいらっしゃるではございませんか」
静江と二人して弥右衛門を宥めるのであるが、すでに聞く耳を失っているようであったが、息子忠弥のことが話に出て、
「そう、忠弥が不憫で、・・・馬鹿な親でござる」
弥右衛門が独り言のようにつぶやき、蒼白は顔面に涙を這わせたとき、由里が嗚咽とともに突っ伏せた。
「弥右衛門様、決した早まってはいけません。いかに己の子とは申せ、置き去り道連れなど、親の勝手は許されるものではございません。一緒に生きていただきとうございます。明日になれば、また気も変わることでございましょう。よろしゅうございますな、決して短慮なことはなさいませんよう、お願いいたしましたよ」
最後は年嵩にこと寄せて、今までになくちょっと高いところからの物言いをしたので

ある。そのことが、後々内蔵助の生き方の意思強さを表に出す引き金にもなったのである。

その夜、弥右衛門と由里は眠りにつくことなく、重い口で途切れ途切れに話を続け、山々の峰が霧雨にけぶるなか、夜明けを告げる朝ぼらけに浮き立ち始めるころにまでなった。

「由里よ。いくら話しても今となっては詮無いこと、これが宿命とあきらめてくれ。坂崎の殿と言い、父上殿と言い、生まれた巡り合わせが悪かったと思うよりあるまい」

由里の泣きはらせた顔の中に、もう涙の一滴も残っていないようである。そばで無心に眠る忠弥が布団を踏み脱いだ。由里がかけ直し、上から覆い被さるように抱きしめると、涸れていた涙がまた一滴にじんだ。

「由里、ここを血で汚すわけにも参らぬ。畳の上で死ねぬのも武士であれば所詮道理というもの、覚悟してくれ」

「はい。覚悟は決まっております。お供をさせていただきます」

文机の上には、内蔵助宛の書状が硯に添えて置かれてある。二人は立ち上がると弥右衛門は刀を、由里は袋から取り出した懐剣を手に部屋を後にしようとした。二人の目は、再び安らかな寝息の中にある忠弥に釘付けになった。

「未練を残すは、この子のためにならぬ」

内蔵助は静江に言ったが、自分への言い聞かせである。

「立派に育ってくれ」

最後は言葉にならなかったが、親としての願いを込めた呟きで、二人ともすでにないはずの涙をまた滲ませ思いを断ち切り、篠つく雨の中に踏み出していったのである。

夜明けと言うにはやや早いかも知れない。がしかし、

「弥右衛門殿」

静寂の中に、内蔵助の低い声が流れた。予期せぬことに、二人は思わず身を竦ませた。

「このように早うから何事でございますか」

二人に言葉はない。

「ともかく中にお入りください。雨の中立ち話でもございますまい」
二人の堅い覚悟は、内蔵助にも見て取れる。間があった。
「内蔵助殿、許されよ。すでに覚悟したことでござる。長いこと世話になった。このご恩に報いることができぬことは心残りでござるが、これも宿命というものでござろう。忠弥のことだけはなにとぞよろしくお願い申す。ご免」
二人は後ろ姿を見せると、窯場北側の谷沿いの小道に入っていった。
「待たれよ。弥右衛門殿。まだ話は終わっておらぬ」
振り向いた二人が、深々と頭を下げた。言葉はなかった。再び向きを変えると歩を進め始めた。その後ろ姿から伝わってくる固い決意に、内蔵助はなす術もなく立ち尽くさざるを得なかったのである。
略儀ながら書き残すこと。中川元任殿への詫びに旅立ち参らせ候。この後、この窯場に再び災禍が及ばぬことを願って止まぬものなり。死後の始末無用、鳥獣の餌となり詫びとなさむ。

忠弥のこと。この先内蔵助殿の子として、武士の道を歩むこと絶対になきよう。貴殿の手塩にかけて、ぜひぜひ焼物細工の道にお導きいただきたく今生の願いにござる。忠弥に二人の母親は、害あって利なし。故に由里はともに旅立つこととといたす。
身勝手な振る舞いなれど、浅薄な身共には、ほかに身の処し方とて思い当たらず。されど決して短慮などとお笑いくださるな。
長きにわたり、命をつなぎ止め、厚情を受けしこと礼の申しようもなし。ただただ息災な日々の続くこと祈り参らせ候。

人の世の　掟と義理と情けにぞ
狭間に生きて　命や哀し

弥右衛門

赤穴内蔵助
静江　殿

淡々とした書き置きであった。

その日、内蔵助は窯場の者たちの手で遺体を探した。自害して果てた二人が見つかったのは山に入って半里はあろうかという奥まったところで、覚悟の上とはいうものの、それぞれが自分の刃で見事に果てていたのである。

佐伯源左衛門が元任の遺骨を萩に届けて、杉ヶ峠にとって返し姿を見せたのはそのすぐ後だった。

弥右衛門夫婦の遺体はその場に埋葬して、ひとまず落着としていたのであるが、弥右衛門の子忠弥を源左衛門が預かると言いだしたのである。頃を同じくして生まれた子、半六がおり共に育てれば手間はかからぬと言うのであったが、内蔵助は弥右衛門との約束もあり、我が子として育てることを言い張った。静江もまた同じ思いだったのである。

杉ヶ峠はすっかり活気を失っていた。仕事もそうであったが、続いた不幸が皆の気持ちを沈み込ませていたのである。このときすでに人夫は三人に減り、すっかり老い込んでしまった伝作と合わせて七人ほどになっていたのである。

そんなとき忠弥の無邪気な存在だけが、皆の気持ちを救っていたのである。忠弥は生来利発な子であった。何事も聞き分けのよい子で、内蔵助、静江を父上母上と呼ぶよう教え込むと、その場から親の事情などわからぬままそう呼んで、情のつながりを芽生えさせたのである。

この秋、最後の窯焚きになるとはつゆ知らず、いつものように火が入れられた。このとき弥右衛門の存在の大きかったことを思いながら、火は燃やし続けられたのであったが、さながら弥右衛門の供養の窯焚きの様相だったのである。

年が変わるのを待つかのように、状況が一変した。

益田元祥が老いを理由に実務から離れることになったのである。かねてより懸案であった毛利藩の借財の返済も終わり、蓄えが残るところまでこぎつけたことと、秀元と藩主秀就の不仲も引き金のひとつだったのである。しかしこの借財返済の真相については、表向きの理由とは裏腹に、藩の重役も知らないところでの調達がなされていたのである。

杉ヶ峠における内蔵助の仕事が大きい役割を果たしていたことは言うまでもなく間違いないところであろう。それから数年と待たない後日のことになるが、またもや財政に困窮を来すのであるが、すでに根本的対応がなされていたのであればこのような繰り返しが早晩起こることもなかったと思われるのである。

しかしさすが元祥である。身を引くに当たって行きがかりの事柄については、万全の始末がなされていた。亀井藩に長く続き、弥右衛門まで巻き込んでしまった塩冶騒動はまだ決着を見ず、大塚屋まで騒動の一端が及んでいたのであったが、亀井藩と大塚屋の約束事は解約に持って行き、同時に杉ヶ峠の窯も閉鎖することになったのである。

内蔵助のその後については、当然の成り行きである萩への移転が本格的な実行となり、内蔵助による杉ヶ峠の最後の窯焚きが終わるのを待っていたかのように、指示が届けられた。そのときすでに萩城下小丸山の窯場周辺は杉ヶ峠に劣らぬ整備がなされていたのである。

それから十年あとさき、時はこともなげに移ろっていったように見えたが、内蔵助は忠弥が七つになるのを待っていたかのように、焼物細工を一から教え始めた。これまでの内蔵助からは想像もつかぬ厳しい態度で仕込まれていったのである。三年遅れて佐伯源左衛門の次子半六も弟子に加わり、競い合うようにこれまた修行を重ねていった。

元祥の持っていた実権が宍戸元兼に移ったことが原因でもないだろうが、萩城下における焼物は山村作之允とすでに二代目となった坂高麗左衛門が中心となり、着々とその地歩を固めていったのである。

一方で、内蔵助が藩の御用細工人として認められることがないまま、寛永十七年元祥は波乱の人生に幕を閉じたのであったが、家老職を相続した孫の元堯がよほど内蔵助に関わる話を聞き及んでいたのであろう、その後引き続いて大きい力を注いでいくことになるのであるが、如何せん時代と藩内事情は、内蔵助にとって冷酷非情な方向へと一直線に向かうのである。

寛永十九年のことである。静江が病の床についた。胃の腑の患いで、床について半年

とたたぬうち食が進まなくなりすっかり体力を失い、気力まで萎えてきたのである。ある日のこと、そばで気遣う内蔵助に、忠弥のことを持ち出した。

「忠弥も早や十三になりました。私の口から生まれついてからのこと話してやりたいと思うのですが、如何なものでございましょうか」

内蔵助にすれば、今仕事を授けるに大切な時期にさしかかっている思いが強い。心を乱したりしたくはないのである。

「これから先ゆっくりと話して聞かせるときもあろう」

すぐによい返答はしなかった。

忠弥はと言えば、内蔵助と静江を本当の両親と思って疑ってはいないのである。内蔵助は弥右衛門の言い置きを真っ正直に、細工人の子として腕の立つ子に育てることしか念頭にない。静江もそのことに異論はないのであるが、立派な武家の子であることは、いつか打ち明けておきたいと思い続けており、事実武家の子としての厳しい躾をしてきたのである。

「私の体もいつどうなるかわかりません。生きて気の確かなうちに話してやりたいのでございます。忠弥ももう聞き分けてくれると思います」

静江には天寿がわかるのか、思い残したくないという気持ちが強く感じられる。

「いづれ話さなければならぬことかとは思うが、今すぐというのもの」

内蔵助には、今すぐと言うことには、どうも気が乗らないようである。

それから数日後のことであった。静江が進まぬ食を無理に口にした後のことだったが、吐き戻した中に幾筋かの血が混じっていた。身の回りの世話にかかっているかねが驚いて内蔵助に注進した。かねは内蔵助たちが小丸山に落ち着いてからと言うもの、台所一切を取り仕切っている五十に手が届いたばかりの達者な女である。

「どうじゃ、ひどく痛むのか」

内蔵助は入るなり心配顔で静江を見つめた。

「今痛みの和らぐお薬をいただきましたので大丈夫でございます。それよりもう駄目かも知れません。先立つことが申し訳なくて」

「つまらぬことを言うな。駄目と決まったわけでもないのに、縁起でもない」

内蔵助にすれば、静江の余命の長くないことは医者から聞かされている。それだけに励ます気持ちがつらいのである。
「まことに我が儘ですが、今日という今日は忠弥に話をさせていただきたいのでございます。もう待てません」
「何も急ぐことはないのに」
内蔵助も根が正直者だけに、もう静江の気持ちを押さえ込めない。
「そうか。聞かせてやってお前の気が済むのであれば、また病もよくなってくるかも知れぬからの」
内蔵助もついに折れた。

土に汚れた支度のまま、忠弥が静江の枕元に座ったのはすぐその後だった。
「母上、お加減は如何でございますか」
そばに来たときの、いつも口にする言葉である。
「いつもと変わりない。心配するでない。それより今日はの、忠弥に大事な話がしたく

て来てもらったのです。父上は」
「仕事の手が離せないそうでございます」
「そう。なら仕方ありません。今日はね、とても大切なお話をいたします。よく分別して聞いてください」
静江もいざとなって、心にざわめきが起こったのか、目を閉じ言葉を反芻した。
「驚いて心を乱してはなりません。いいですね」
「・・・・・」
忠弥には予測もつかない。
「忠弥、あなたは私たちの本当の子ではありません。あなたにはもっと立派なご両親がいらしたのです。いろいろ深いわけがありまして、今まで黙っていましたが、あなたに知らぬままの生涯を送らせることは、父も私もつらいのです。ずうっといつか話さなければと考えていたのです。やっと決心がつきました」
忠弥には思っても見ない話が切り出されたのである。
「母上、そのような大事な話は、体のお具合がよくなってからゆっくりとお聞かせいた

だきとう存じます。お体に障るようなことになっては取り返しがつきません」
忠弥は十三歳に似合わず、躾のせいにもよるのだろうが、しっかりと育っている。
「いいえ、どうせ今日一日では話しきれないと思います。しっかりと聞いてもらわなければなりません」

静江が聞き及んでいた三輪家にまつわる総てを話し終えるのに、三日の長きを要した。その間、内蔵助も時折そばに同席したが、忠弥と二人とも一言も聞き返したり口を挟んだりすることはなかった。
それからの四、五日、内蔵助と忠弥は何事もなかったように、三輪家にまつわる話を持ち出すことはなかったが、忠弥にすれば必死に心の整理に取り組んでいたのであろう。
六日も過ぎた頃、
「父上。私の父上母上は今のお二人よりほかにはございません」
仕事のちょっとした合間に、忠弥は半六のいない間に、構えてこともなげに言った。
「そうか。そう思うてくれるか。母上にも聞かせてやれ、きっと喜ぶことであろう」

内蔵助も嬉しかった。この子は本当に自分の子だという思いを新たにし、強く持ったのである。
静江が食べ物をのどに通さなくなったのは、それからすぐだった。忠弥が、
「母上からいろいろお聞かせいただき私も考えてみました。しかし母上こそがたった一人の母上です」
と、照れを隠しながら静江の枕元で打ち明けたとき、言葉は返ってこなかったが、心のそこからの嬉しさに満ちた笑顔を見せ、一筋の涙を枕に落としたのである。
それから幾日とたたないうちに、静江は息を引き取った。その間際まで医者までがこんな早い死を予感することはなかった。
内蔵助が仕事を終え、いつものように静江のそばに座り込み、
「気分はどうじゃ、少しでも何か食べてみるか」
と、声をかけると、枕の上で少し首を横に振って、
「内蔵助様、私はあなたにいい一生をいただいた果報者でございました。ありがとうご

ざいました」

最後の力を振り絞っての言葉だった。話し終わると、うっと唸って吐き戻すような素振りであったが、すでに戻すものが胃の腑の中にはなかった。

静江の表情が変わった。穏やかになってきたのであるが、尋常でないことは内蔵助にも見て取れた。

「静江、苦しいのか。静江」

反応はない。

「かね、早く忠弥を呼んできてくれ」

「はい」と声だけ聞こえて、慌ただしく仕事場に走り出す足音だけが響いた。続いて医者の元にも使いが出された。

しかし、静江の容体は、衰弱がすでに限界を超えていた。医者が駆けつけたときはすでに静かな中で事切れていたのである。

忠弥も内蔵助も何の一言もはっするでなく、ただただ膝の上に拳を固めて、息を引き取ったばかりの静江の顔を一心に見つめ、涙を流し続けるばかりであった。

時は無情に過ぎていく。寛永が二十一年になるとすぐ正保と変わった。忠弥に心機一転を配慮したわけでもあるまいが、内蔵助の発案で忠弥は忠兵衛と名を替えた。

そこには静江の死があって内蔵助の心中が急速に変化していく様子が読み取れた。忠弥の名前替えもその一つで、一日も早く窯主の座を譲りたいという思いが芽生えている。

近頃よく話すのであるが、焼物に志を固めて朝鮮に渡り、戦のなり行きではあるが日本まで来たのが十七の時である。忠弥も同じ十七になったことであるし、早く独り立ちを考えなければいかん、と言う。

また昨年末から、焼物処の惣都合すなわち支配役に山村作之允が本決まりし、城下の総ての焼物細工人に誓紙神文を差し出させようとの動きがでているのであるが、内蔵助には何の音沙汰があるでなく、言わば無視され続けているのである。突然仕事仲間の配下となることも快しとはしない、思い返せば日本に来て日の目を見ることなく、裏仕事、闇仕事に終始したことから、いささか嫌気の虫が動き始めたことも隠せない事実だった

のである。
それにまして内蔵助は自分の中に不安な悩みを抱えていた。まだ何んの不自由はないのであるが、近頃とみに目が薄くなってきていることである。
小丸山に落ち着いて、やはり城下の風習からなのか、年には幾たびも荒神社の琵琶法師を招いて、窯祀りが行われる。今まで何にも興味を示さなかった内蔵助がこの琵琶の音色に魅せられ、語りの一節づつを覚えはじめ、最近では琵琶を手にする時間がとみに多く感じられるようになっていたのである。案外盲目の琵琶法師に己のこの先を予感していたのかも知れない。

それから二年を過ぎた頃だった。また安芸淺野藩からの書状が届いた。
その書状には、渡辺唯右衛門の切羽詰まった悲痛な思いが込められていた。
「振り返ってみるに、日本に渡り来て早や五十年の歳月が流れ去り、八十路を越す老いの身となり申した。かねてよりご依頼申し上げております李郎子の件、意に足りる御返書に接することなく、このまま三途の川を渡る無念たるや底なしの沼に入った思いでご

ざ候。
身共も最早李郎子を訪ね行くことも適うまいと、半ば諦めの心境にいたっておるものの、李郎子の歳を考えるにまだ六十半ばであろうと推察いたしおり、万一この老いぼれのため足を運んでくれることはあるまいかと、あらぬ妄想に鶴首したり、叶わぬ夢なれば、せめてその後の消息なりと、つぶさにお知らせいただき、冥土への土産話となし、ひいては子々孫々申し伝え、いつの日か系累縁者が相まみえ、先祖を偲ぶ縁となればと、ただただ念ずるばかりの日々を重ねておる次第にてござ候。
つきましては、年降り調べ事に困難も多々あろうとは存ずれど、御重役方の格別のお計らいを賜り、ただ一筆のみにても返書頂戴つかまつれば、この老いの身を納得させる覚悟を決めおり候。
ぜひぜひ余命あるまに何とぞ御返書に接する喜びを賜りたく、老いの腰を二重にも三重にも折ってお願い申し上げる次第にてござ候。
如何ようにも、お調べ進まざるようでござれば、淺野の殿に申し出てあらましの顛末なりとお調べいただくようお願い申し出る所存にてござ候」

唯右衛門の李郎子に対する思いの執着は、一方ならないものであることが痛いほど読み取れる。

益田元祥はすでに亡く、毛利秀元も江戸にあって久しい、今まで杉ヶ峠での李郎子にいささかなりと関わったといえば佐伯源左衛門であるが、詳しい裏事情など知るよしもない。

このとき益田元堯は、祖父元祥から聞いた話を幾度となく咀嚼しながら、この一件に関する限り、複雑な裏事情からして、己よりほかに事を収めるものはないと確信を深めていった。秘すること明かすこと元堯の胸三寸にある。驚くには足りないかも知れないが、書状の李郎子が内蔵助その人であることを、すでに知らぬ重役さえいたのである。今では内蔵助がなぜ小丸山に窯を持ち、仕事を続けているかいうことさえ奇異に思うものがあっても不思議でない程、すでに時代は流れていた。

元堯は、唯右衛門からの書状の件に関し、重役寄り合いの席で総ての対応を進み出て引き受ける事としたのである。重役といっても藩中の名だたるものが加わるでなく、元

堯は歳から行けばまだ若いのであるが、ほかに何の意見もでるでなく、元堯一任は何の悶着もなく決まったのである。それだけ唯右衛門からの書状が重要視されていなかったと言うことであろうが、しかしそうでないことを元堯だけは知っていたのである。

元堯が最初に取り組んだのは、内蔵助が渡来以来暮らした五十年を、そっくり作り替えることであった。なによりも祖父元祥の名に疵を付けることは絶対にしてはならない。ひいては毛利の汚名にもなりかねないのである。さすれば内蔵助の運命を過酷な方向に持って行かざる事も避けられないこととなるだろう。最早、情に絡んで天秤にかける場合ではない。

とりもなおさず杉ヶ峠における内蔵助の過去を抹殺しなければならない。しかし実際に殺して済むことではない。元堯は筋書を練り上げる事に一人没頭した。内蔵助については意の如くなんとでもなるだろう。しかし話の始まりは五十年をさかのぼる。今では何かと事情に詳しいものの数も減り、事を運ぶに障害は少ないのであるが、折り合いをつけるには片付けなければならぬ事が数々あったのである。

元堯はまず内蔵助の説得から始めた。話を秘する狙いもあり、光厳寺に内蔵助を呼び出して話の口火を切った。

「この度、そちに大役を引き受けてもらいたいと思うての。これはどうあっても聞き入れてもらわないと毛利家中が困るのじゃ」

元堯は高飛車とも下手からともわからぬ言い方をした。

「はい。どのようなことでございましょう」

内蔵助はまだ元堯とはなじみが深まっていない。少しは疑心暗鬼である。

「萩を出て杉ヶ峠に戻ってもらいたいのじゃ。それも、今までの行きがかりは総て捨てた上での」

「と申しますと・・・」

「ちょっと厳しいと思うかも知れぬが、まず名前を捨てること。今度杉ヶ峠に入れば又左衛門と言うことになる。今まで杉ヶ峠でして来た仕事は、一切口外無用、総てを忘れ何もなかったことにする。と言うても隠居仕事と思うて焼物は続けてもらいたい。そのために三人ばかりの手伝いは付けておく」

内蔵助にはどうも事情がのみ込めない。その筈である。淺野からの書状の件については、伏せたまま何も知らせないままなのである。

「また、急なお話でございますが、何ぞあったのでございますか」

「何、いろいろと事情があってのことじゃが、そちの心配することではござらぬ」

内蔵助は近頃、ふと思うことのある人生に一区切り付ける良い機会になるかも知れないと、頭をよぎるものがあった。

「それで、忠兵衛はどうなるのでございましょうか」

やはり心配は忠兵衛のことである。

「それはなにも心配するには及ばぬ。このわしが責任もって身の立つように取り計らう。今すぐというわけにも行かないだろうが、杉ヶ峠からしっかり見張っているがよい。」

「それを聞けば安心でございます」

元堯の言葉の言い切りようは、内蔵助を安堵させるに十分である。

「いずれ詳しいことは後日のこととして、内蔵助。そちが祖父牛庵に尽くしてくれたことの一部始終しかと聞き及んでおる、この元堯忘れはせぬし、今も心からありがたく存

じておるぞ」
この日、元堯はまず一つの目的を達した。淺野の方へは近々詳しい返書を届けると知らせてある。ぐずぐずして淺野が調べに動き始めることは食い止めなければならない。
次は亀井である。すぐさま多胡主水に毛利家家老職の相続就任の挨拶に伺いたい旨、書状を差し向けた。多胡主水も今では職を次男真益に譲っていたが、これまた主水を名乗り元堯を少し混乱狼狽させた。
津和野まで出向いての挨拶参上には、やはり家格の違いであろう多胡主水は恐縮するばかりであった。運良く先代主水も同席し、話は元堯の思惑通りに進んだ。
「亀井家中にも淺野家から問い合わせがあったのではないかと存ずるが、五十年も昔のこと、何を今更と思わぬでもないが、先代殿はご記憶にあろう明国から来て杉ヶ峠で焼物細工をした李郎子とか言う男のこと、」
わざととぼけた言い方をした。
「覚えておりまする。あれはよく覚えておりまする。どちらも不運な巡り合わせという

ものか、不憫に思えてならなかったが、また言うてきたのでございまするか」
先代の方に話は早くつながった。
「こっちも古いことなのでちょっと難儀をしたが、おおよその成り行きがわかったので知らせてやろうと思うのじゃが、ま、いろいろあるようなので、もう一度杉ヶ峠で好きなように仕事をさせてやりたいと思うのじゃが、如何でござろうか」
「して、その李郎子とやら、一体どこにおったのでございまするか」
「それがの、来るとすぐに例の大塚屋が貸して欲しいとかで、そっちに預けておったらしいが、大塚屋が手を引いたとき萩に来て、あちこちの窯場で働いていたそうじゃで、この度は事情が事情じゃし、元の形に戻すが良かろうと言うことになったので、何とか承知いただけないものかと、お願いに上がった次第でござる」
話は先代主水と差しで進んだ。
「そうでございまするな。格別取り立ててのことでもあるまい。当藩が否を言うことも別にないと思うが、のぉ、真益」
「先代のお考えがそうであれば、身共に異議はござりませぬ」

これで一つ話が進んだ。
「そこでじゃが、その李郎子という男、世間では唐人と言うそうじゃが、明国生まれの異人ではあるし、先々残す話でもあるまいので、人別には書き留めんで欲しいが聞き届けてもらえんかの」
「李郎子という男はもうかなりの歳でござろう。これから先のことと言ってもしばらくの事でござれば、好きなようにさせて良かろうと存じまする」
話は思い通りに決まった上に、杉ヶ峠界隈を唐人屋と言い習わされていると話を作ることから、手伝い人三人を付けることも承知させ、焼物が出来た折には津和野城下その界隈で売るもよし、暮らし向きのものも買うでよしと、予想を超えた話でまとめることが出来たのである。

最後の仕上げは忠兵衛である。津和野から戻るとすぐに、これまた光厳寺に呼びつけた。忠兵衛も二十歳を目の前にして、すっかり一人前の焼物細工人となっていた。
「忠兵衛、此度藩内の焼物仕事の仕組みを整理するについて、そちの父内蔵助にもう一

度津和野外れの杉ヶ峠に戻って、焼物を作ってもらうことになった。特別にこれというものを作ってほしいわけではないが、そこは古い行きがかりもあっての」
元堯の話は、相談というものではない。
「そうでございますか。それで往来はいつなりと出来るのでございましょうか」
「それが、あまり勝手にはならぬのだ。萩を旅立って出たということになるので、杉ヶ峠におることを知られては困ることになる。そのことはそちにも重々承知しておいてほしい事じゃ」
「それでは口外ならぬと言うことでございますか」
「一応のところの」
忠兵衛も、相手が相手だけに根掘り葉掘り聞くことも出来ない。元堯が続けた。
「此度のことについては、今は話せぬ深いわけがあるのじゃ。内蔵助が萩を出ることの表向きの理由は、盲目となった故、琵琶法師となって諸国行脚の旅に出たということじゃ。今後赤穴の家に残す家伝や言い伝えはそうなると心得ておけ」
もう相談などではない、元堯からの達しである。

忠兵衛もこれだけは聞いておきたいと意を決するように尋ねた。
「もしご家老様にお願いしてお許しをいただけば、杉ヶ峠に出向いてもよろしいのでございますか。私もまだまだ教わらなければならぬ事がございます」
忠兵衛の念の入る話に、元堯はちょっと煩げである。
「まぁ、何かあればそれはその時で、わしのところに言うて来い。それより忠兵衛、これからはお前も一人前の窯主として、出来ることは己で段取るよう心がける事じゃ。今は山村作之允が頭となって動いているが、そちにはこの元堯がついておる。心配いたすな。必ず身の立つように取り計らうからの」
忠兵衛は元堯の申し渡しに似た話に、釈然としないものを残しながらも、引き下がり、帰路につかなければならなかった。

元堯が作り上げた話は分厚い書状となって、安芸淺野藩の渡辺唯右衛門の元に送られたのは、正保三年の年明けすぐのことだった。そのとき元堯の頭の中には、唯右衛門もすでにかなりの歳となっているはずであり、淺野家中が動き出すことは、まずあるまい

という読みがあった。
書状の内容であるが、後年武林唯七の娘七重によって、防州徳山で語られる事となった話そのものだったのである。しかし、内蔵助が世間に語るよう申し渡されたことと、忠兵衛にこれから先家伝として残さなければならない話と、辻褄の合う話ではない。どこからほつれが生じるか知れたものではない。
元堯にとって、此度一連の策謀に油断は出来ない状況だったのである。書状を出すことと前後して、内蔵助にも杉ヶ峠への旅立ちが急かされた。内蔵助の供を命じられたのは、元堯の手のもので足軽ながら剣の立つ島谷権兵衛である。歳は四十をとうにお超えているが、妻なし子なしで、少しばかり酒好きな男である。無骨に見えなくもないが、かと言って粗野でもない。あと二人窯仕事の手伝いが付けられた。名は三郎太と清助と言い、三十を出たばかりの達者な男であった。

春と言うには早いような風に冷たさの残る日、内蔵助は萩を旅立った。元堯からの餞として贈られた分に過ぎる法衣をまとい、琵琶の入った袋を肩にした内蔵助の姿は、凛

としたものであり、また痛々しくもあった。
小丸山の窯から、如意ヶ嶽に抜ける谷間の間道を登ることになっている。福井村入口になる如意ヶ嶽の上で三人と落ち合うことになっていた。
忠兵衛は四半里ほどの道であるが、内蔵助に付き従って如意ヶ嶽まで見送ることにした。半六もぜひ見送りたいと言い張ったのであるが忠兵衛は聞き入れなかった。やはり最後に父と二人の時がほしかったのである。間道は谷の流れと合ったり離れたりしながら少しずつ登っていく獣道に近い細い道である。二人が並んでは歩けない。
忠兵衛が後から声をかけた。
「父上がなぜこのようなことになったのでございましょう」
「世の中はの、穏やかに見えても一寸先は闇というて、誰にもわからんものじゃ」
内蔵助には相応の覚悟が出来ているように見える。
「父上母上から聞きました数々の話を、考えるのでございますが、今となってなぜ父上がこのようなことにならなければならないのか、不思議と言うよりございません」
事ここにいたって、忠兵衛には何をどう話したらいいのか、心の中が整理できないで

いる。
「父も、これから先何年生きられるかわからんが、また会える日もあるじゃろうし、何でも話せるときも来ることじゃろう。焼物細工の道に入ったからには、焼物細工が出来ると言うことだけで、それ以上のことは望まぬ事じゃ」
「私もそう心得ております」
「それでいいのじゃ」
前を行く内蔵助が大きくうなずいて見せた後ろ姿が、忠兵衛には強く焼き付いた。
「忠兵衛よ。そちはまだ若いからわからないだろうが、そっと静かに生きていきたいと思うても、生かしてもらえないときもある。と言うて、人の上に立って華々しゅう生きてみたいと思うても、誰も支えてくれないときもある。そちにの、六十を過ぎた年寄りの生き方をしろというても無理なことじゃが、今ある自分の仕事に打ち込んでいけ、そうすれば、いつか人は見てくれる。もし誰も見てくれぬというて、心を荒立てるのは人間のつまらぬ欲というものじゃ」
「お言葉ではございますが、私は誰にも負けないものを作りたい欲だけは持ちたいと思

うております」
間を入れず忠兵衛は言った。
「若いときはそれでいい。でもの、欲に引っ張られると人間駄目になるからの」
「はい。心しておきます」
忠兵衛は、もっと沢山話すことがあるように思いながら、途切れ途切れの話のまま如意ヶ嶽の頂きにさしかかったのである。
内蔵助の供となる三人の姿が見えた。馬も一頭牽かれていた。その背には当座の暮らしの糧なのだろう、菰に巻かれた荷物がしっかりと結い着けてあった。
「忠兵衛、もうよい早う戻れ」
内蔵助が忠兵衛の方に向き直って言った。忠兵衛は自分でもよくわからぬ気持ちの高ぶりに、うまく言葉が出ない。
「忠兵衛、さらばじゃ。達者での」
忠兵衛は、ここに来て急に涙に襲われた。何か言いたい。しかし涙が言葉を出させてくれない。内蔵助が最後に、にっと穏やかな笑顔を見せた。忠兵衛はもう金縛りである。

何か忘れている。言わなければならないことがある。しかし口を開くことなく内蔵助を見送らなければならなかった。
元堯の急場しのぎにも見えた内蔵助の一件は、その後なんの動きを引き起こすでもなく、時代の中に埋もれるように時間が呑み込んでいった。
内蔵助もいつの間にかすっかり又左衛門と言う人間になりきってしまい、内蔵助時代の出来事は過去に追いやられていったのである。
内蔵助が再び杉ヶ峠に足を踏み入れたとき、十年の歳月が、窯はすぐには使える状態でなくなっていた。しかし住屋、仕事場は荒れてはいたものの片付けただけで使えたし、資材材料は当分の間、他からの供給をすることなく、仕事に取り付くことに不自由を来たすことはなかった。
しかし、又左衛門はすぐに仕事に動き出すことはなかった。
四人がまだ杉ヶ峠に来て落ち着かない夜のことだった。それまで無口であった又左衛門が、突然権兵衛を驚かせることを言ったのである。

「権兵衛さんよ、そなたも大変な役目を仰せつかってしまわれたの。このような人里離れた山奥で、いつまでともわからん役目は、災難と言えば災難じゃの」
「そのようなことはございません、お役目というものは私ら下々には、いつどのようなことであっても、懸命に勤めるだけでございます」
権兵衛もそうは言ったものの、怪訝な面持ちは隠せない。
「いっそ、私を殺して、さっさと萩に引きあげた方が良いかも知れん」
「滅相もないことを、・・・」
権兵衛はあまりのことに、二の句が継げない。
「そう驚くことはない。察しはついておる。のぉ権兵衛さん、ご家老様もいろいろとご苦労が多いのじゃろう。と言うて萩で斬ってしまうわけにもいかなかったのじゃろう」
又左衛門からこうまではっきり言われてしまうと、どう言ったらいいものか咄嗟には言葉が出ない。しばし案じた。
「白状いたしますと、お察しの通り、お役目はいただいております。しかしそれは万一の時のこと、手前の勝手で事を構えるような考えは毛頭ございません」

権兵衛はいささか腹立たしげに言った。
「いや、冗談じゃ、悪い悪い」
そんな話もいつか昔話になってしまうように、窯仕事は四人がかりで続いていったのである。男ばかりの暮らしで、さながら四匹の熊が棲みついているようで、地下の者も恐れをなすのか滅多に姿を見せることはない。年に一度の亀井家参勤の折には、四人は隠れるようにして姿を見せなかったのである。
窯は小さい窯に築き変えて、年に一度か二度の窯焚きで、ときおり三人のうちでは如才なく商才もある三郎太が津和野城下や福川村近辺に焼物を持ち出して、暮らしの糧を得ることにしていた。石州にはあちこち焼物は多いのであるが、三郎太の商い上手で暮らしに不自由することはなかった。安酒ではあったが切らすことはなく、酒好きの権兵衛は酒につられて仕事に精を出す毎日だったのである。
幾たび願い出を繰り返したか数え切れないほどであったが「まだ早い」と、元堯の許

しはついぞ出なかったのであるが、ようやく忠兵衛が杉ヶ峠に足を運んだのは内蔵助が萩を出て、すでに十年を超す寛文二年秋のことだった。

その待つ間、忠兵衛には内蔵助存命の目安となるよりどころがあった。島谷権兵衛たち三人が萩に帰らないことは、杉ヶ峠の仕事が続いたいる証と思っていたのである。だからその動向から目を離すことはなかった。とは言うものの、やはり一番の心配は内蔵助の歳のことである。すでに八十に手が届こうとしている筈である。

この年、忠兵衛は固い決意を持って元堯に内蔵助を訪ねることを願い出た。忠兵衛には内蔵助にどうしても話したい二つの要件があった。元堯からはどうしたことか拍子抜けするあっさりと許しがおりた。そして此度も半六が同道を希望したが、忠兵衛は頑なに断った。

杉ヶ峠に入った忠兵衛を、夕焼けがなおのこと赤黄色く染め抜いた、奥深い秋の山々が出迎えてくれたのであるが、忠兵衛には内蔵助の生涯の黄昏がひしひしと心に思い浮かび、立ち働く内蔵助であってほしいと願わずにはいられなかった。

忠兵衛が窯場に近づくと、願っていたとおりの内蔵助が達者な姿を見せたのである。歳月が過ぎると言うことは恐ろしい。二人ともそうであったが、再会の喜びの感動がどこかに置き忘れてきたように薄れていた。しかしそれも瞬時のことにすぎなかったのである。

「父上でございますね。忠兵衛でございます。無沙汰いたしましたこと申し訳ございません」

内蔵助は仙人さながらである。

「達者であったか。」

「はい。お蔭をもちまして」

「それは何よりじゃ。ま、中に入ってゆっくりせい」

先に立って荒れ放題の家に誘い入れた。

「姿かたちも又左衛門になったろう。内蔵助より楽なものじゃ」

顎髭をなでながら、自嘲するでもなく事も無げに言ってのけたのには、忠兵衛は驚きと十年の歳月を思い知らされたのである。

そのあと山賊料理に見まがう夕食を五人が車座で取ったとき、忠兵衛には人の暮らしは失せ、ただ腹の足しにするだけの食い物としか思えず、急に名状しがたい寂しさと侘びしさに襲われたのである。

その夜、忠兵衛は何の話も切り出すことが出来なかった。内蔵助、いや、又左衛門に変わってしまった父の見極めがつかず、すぐに話したいと思い続けてきたことが、異界に入ったような錯覚に襲われ、話し出すことを躊躇させたのである。すでに自分の来るところではなくなってしまったのではないか。布団の中で遅くまでまんじりとも出来なかった。

翌朝早く、忠兵衛にすれば新しい窯の前で又左衛門と顔を合わせ、又左衛門が話し始めたとき、忠兵衛の迷いが杞憂に過ぎなかったことを思い知らされた。

「忠兵衛。仕事に精進を続けているか。随分と腕も上がったことじゃろう。近頃作ったものの一つも持ってきたか」

そう言われて荷物の中に茶碗を一碗しまい込んできたことを思い出した。

「迂闊なことでございました。茶碗を一つ見ていただこうと思い持参いたしました。すぐにとって参ります」

走り出そうとする忠兵衛を呼び止めて、

「後でいい。ゆっくり見せてもらう。そんなことより話したいことがあるのじゃろう。その方を先に聞きたいものじゃ。話して見い」

さすが長く離れ義理の仲でも親子である。忠兵衛の胸の内は見通していた。

「はい。二つお話がございます。一つは、来年になることと思いますが、藩の御雇焼物細工人となることになりました。半六も一緒でございます」

「そうか。それは良かった。これで坂窯と肩を並べることが出来たの。なおのこと修行を怠るでないぞ」

「はい。誰にも負けぬよう勤める所存でございます」

忠兵衛はここに来て始めて嬉しさを顔に出した。

「してもう一つは」

又左衛門はすぐさま催促をした。

「これはお願いでございますが、これを機会に赤穴姓を三輪姓に改めとうございますがいかがでございましょうか」
又左衛門は一息入れて、
「それはまたどうしてそう思う」
忠兵衛はやや逡巡の面持ちを見せながら、
「今まで赤穴忠兵衛として育てていただきながら、その大恩を仇で返すようで心苦しいのでございますが、母上から聞き及んだことがどうしても頭から離れず、非業に果て絶えた三輪姓を、ただ一人血を受け継いだものとして、今一度この世に引き戻し名を残しとう思うのでございます」
「そうか。それもよかろうが、ご家老様はご承知されたか」
又左衛門は、すぐに色よい返事はせず、元堯の意見の方を気にした。
「まだ、話のついでにちょっとお話ししただけで、はっきり申し出るのは帰ってからのつもりでございます」
「ちょっと話したときの様子はどうであった」

忠兵衛は何が知りたいのか解せない思いもあったが、
「坂崎の家臣であったのか」
と、首をかしげておいででした。
「やはりの」
又左衛門もそれ以上は何も言わず、
「忠兵衛、朝餉を済ませたら山に入ってみよう。支度をしておけ。そうじゃ、茶碗も忘れぬようにの」
そう言って、口をすすぎに谷へおりていった。

二人が分け入った山道は、八十となった又左衛門には容易な道ではなかった。
「このような山奥に何があるのでございますか」
忠兵衛は怪訝に問うたが、
「黙って登れ」
とだけ言って、半里の道を無言で上った。又左衛門の老いた姿は、さながら修験者の

山行であった。
すでに半時も登ったところで、やや平坦なところに到着した。
「忠兵衛。ここがそなたの父弥右衛門殿と母由里殿が最期を遂げられたところじゃ。三十年近くなって荒れてしまったが、この石の下にご両親が眠っておいでじゃ」
「そうでございますか」
忠兵衛の胸を、じわじわと哀しい感慨が締め付けて来た。
「実に立派な最期であった」
又左衛門も、三十年も前の情景が目に浮かぶのであろう、老いの目をしばたたかせている。忠兵衛は地下に眠る、顔も覚えぬ両親に、心の目を凝らしていた。
「忠兵衛。そこら辺りに腰を下ろせ。これから先二人でゆっくり話すこともないだろう。今日は少し話でもしよう。いつの間にかの、来る日来る日が、いつ最後の日になるかわからんような年寄りになってしもうた。取り立てて言い残しておきたいことがあるわけでもないが、そなたとは縁あって親子となった。わしの長い人生で一番喜ばしいことであったぞ」

又左衛門は、ぽつりぽつりと言葉を継ぎ足すように話した。
「萩に帰ったら、父上が萩に戻れるようにご家老様にお願いしてみようと思います。お許しがいただけたら、すぐお迎えに参ります」
「そのようなことはもうよい。ここはわしの日本での故郷じゃ、ここで死んでも悔いはない」
「そう仰せられましても」
忠兵衛はうまく言葉が出ない。
「それより茶碗を見せてみろ。ちょうどよいご両親の前じゃ」
頭陀袋の口を広げる忠兵衛の手元に、又左衛門は目を凝らした。
「まだ未熟者で、恥ずかしい限りでございます」
布切れにしっかり包み込んできた茶碗をおそるおそる差し出した。又左衛門はなめるように時間をかけて眺めた。
「若いと言うことはええの。勢いがええ」
「そうでございますか」

忠兵衛には予期できない言葉だった。
「茶碗の善し悪しはわからんが、焼物としてはよい出来映えと思う。釉もええ焼きもええ。しかしのぉ」
何か言葉を探しているようである。
「何なりとおっしゃってください。必ず修行の糧にいたします」
又左衛門は茶碗を弥右衛門の墓標石の上に置いて、
「わしも若いときはこうじゃった。何を作っても「これが俺じゃ」と人の事など考えたこともなかった。でもの使ってもらう人を息苦しくしてはいかんと思うようになった。そうじゃろう、人には優しくのうてはいかん。作るものもそうなくてはいかんと思うがの。でも心配することはない、そなたはまだ若い、これからじゃ」
又左衛門は茶碗の話は切り上げたいらしいが、
「これからどうすればよろしいのでしょうか」
忠兵衛には聞いておきたいことだったが、
「それは人に聞いて学ぶことではない。多くの人から己で学び取っていくものじゃと思

うがの。焦ってはならん」
又左衛門は、茶碗を見てすでに忠兵衛に言うことはないと、内心安堵していたのである。
忠兵衛は二晩泊まって萩に帰ることにした。そして旅立ちの朝のことである。草鞋の緒を締める忠兵衛に、
「これでもう二度と生きて会えることもあるまい。心を穏やかに達者で暮らせよ」
忠兵衛は草鞋を履く手を置いて、
「縁起でもございません。またすぐ参ります。父上こそ五体に気をつけていつまでも息災でいていただきとうございます」
又左衛門は笑顔を見せて、
「そう無理を言うな。この歳になると、何をしてもこれが最後と思うようになるもんじゃ。寒くなるまでに窯の火を入れたいと思うているが、ずうっといつもこれが最後と思うて火を焚いている。そんなもんじゃ」

又左衛門のそんな言葉を聞くと、忠兵衛も立ちがたい。
「その下まで送っていこう」
又左衛門が先に立って戸口を出た。
「忠兵衛。いよいよ本物の旅の始まりじゃの」
「はい。そのように心して参ります」
「わしは十七の時、日本に来てここに落ち着いたのが人生旅の始まりじゃったように思う。思うて見れば長い旅じゃった。振り返ってみても、はるか昔のことになってしもうたが、悔いのない旅じゃったと思うておる」
「そうでございますか。この忠兵衛もそのような道を歩いて見とうございます」
「じゃがの、なかなか自分の思い通りにはいかんものでの、人に振り回されることばかりじゃった。でも、それはそれでよかったと思うておる」
「それはまたどうして」
忠兵衛には少しばかり興味が湧いた。
「日本人でなかったからかも知れん。何をするにも人の手がないことには何も出来ん。

それがかえってよかったのかも知れんの。何事も無理をすることがなかった。坦々とした人生の旅が出来た。本当によかったと思う」
忠兵衛にはちょっと不満であったが、今取り立てて吐く言葉もない。
「父上のお言葉、肝に銘じておきます」
ここは素直に引き下がった。
「そなたは焼物のことだけ考えたらええ、あとのことは人に任せておけばええ、人に逆らわなければ人はそれなり考えてくれるものじゃ」
「難しいことと存じます」
「そりゃそうじゃ、このわしが長い一生かかって知ったことじゃでの、そなたにすぐそうしろというたて無理なことじゃが、そうした生き方があると言うことだけは知っておいてほしい。わしの最後の言葉と思うての」
又左衛門との話も、もう終わりであろう。
「また最後でございますか。本当に嫌な言葉でございます」
忠兵衛もおそらくこれが最後の別れであろうことは、心の中に覚悟していたことなの

である。

別れると忠兵衛の足は坂を下るばかりである。忠兵衛は涙をこらえながら幾度となく坂の頂を振り返ったが、又左衛門の姿が消えることはなかった。谷を回るところで一端視界から消えたのであるが、しばらくして再び頂きに目をやったとき、そこにはまだ又左衛門の立ち尽くした姿があった。山中である、誰はばかることはない。忠兵衛は慟哭しながら坂道を下っていったのである

身なりを整えた島谷権兵衛が小丸山に忠兵衛を訪ねたのは、忠兵衛が杉ヶ峠から戻って三月足らずで迎えた正月の松が取れてすぐの、重苦しいぼた雪が辺りを白く染めた寒い日の夕まぐれであった。仕事を終えた忠兵衛が母屋に向かうところでばったり出会ったのである。その瞬間、忠兵衛は父又左衛門の死を覚った。

権兵衛の話によれば、いまわの際に言い残したことは何もなく、眠るように成仏したそうである。杉ヶ峠を立ち去る最後の片付けを済ませるとき、忠兵衛当ての一通に書状を見つけたので届けに来たと、懐から取り出して手渡した。

短い文章が綴られていた。

そなたを息子としたことは、内蔵助生涯の喜びであり誇りである。その喜び誇りを汚さないでくれ。このほか言い残すことなし。

忠兵衛は何度も何度も読み返し、止めどなく流れる涙をぬぐおうともせず、父内蔵助が我が身に寄せてくれた篤い思いを反芻し続けたのである。

忠兵衛が三輪に改姓することを認められ、佐伯半六とともに藩から御雇焼物細工人としてお抱えになったとの知らせを受けたのは、内蔵助の死と一足違いのことであった。父とともにこの喜びを味わえないことは哀しいと言うより口惜しさの方が先に立った。そして、このような巡り合わせこそが父内蔵助の生涯を端的に表しているのではないかと、一人父を偲ぶ縁としたのである。

七章　恥ずことなく

遠来の客、旧赤穂藩の家臣武林唯七の娘 七重が徳山に来て、すでに五年近くが過ぎていた。

萩焼はすでに、天下に名だたる焼物として、大名家、茶の湯世界で珍重され、毛利家にとっては掛け替えのない御遺物として、確固たる立場にある。

しかし由緒来歴については、毛利家中に統一見解があるでなく、全く放置された状況である。焼物が重要視されるに従って、各窯屋がそれぞれ勝手な申し分を言い立てて、言わば本家争いの態であることも、やむを得ない成り行きかも知れない。しかし、あらぬ噂話の横行が藩の耳にも入ってくるようになり、中にはいかがわしい話、悪意を持って藩を誹謗する話まで混ざるようになっては放っておく訳にもいかない。

徳山に七重が現れたのがきっかけとなって、毛利家中では、この際焼き物に関する歴

史的事実を吟味の上、将来にわたって残すべき話の筋書を整理し、書き残そうと言うことになったのである。だが、直ちにどのような形を取ることが最善か衆議は一決しなかったのであるが、「まず第一に毛利の家名を汚してはならない。些細なことであろうと世間から悪事と疑いの目を向けられる恐れのあることは、一切書き残さず。朝鮮から萩に棲みついたいきさつ、萩に入るまで、すなわち安芸、石見時代のことは簡略に留める」

大筋の枠を決めるだけで、あとは、家老益田広堯と焼物方支配を勤める藤屋刑部が、その任を委されることになったのである。

箍をはめられた広堯と刑部の苦労が始まった。出来る限りの歴史資料を集めるところから、大枠に従っての取捨選択を過ってはならない、重い仕事である。

広堯と刑部の打ち合わせ、話のすりあわせが際限なく続くのであるが、最初の話し合いで刑部の持ち出した話が、記録として残す方法の基本となったのである。

刑部が焼物方に籍を置くことになってすぐの寛保元年のことである。佐伯窯三代彦右衛門が、二代半六幼少のため、沼田が原の当時佐伯窯に三輪忠兵衛が入ったのであるが、

そのまま居座って、いまだに明け渡してくれないという趣旨の、藩への仲介を申し出た記録があることに着目、一つの方法論として取り上げられないかと、広堯に進言したのである。

広堯にはその一件に関する詳しい記憶がなく、ことの顛末を刑部に詳しく尋ね、興味を持って聞いたのである。

「あの一件は、ことが起こってすでに四十年もたってからのことで、話を持ち出した彦右衛門もすでに代替わりをしたあとのことでございました。そもそも三輪窯佐伯窯が揃って御雇焼物細工人となってからと言うもの、三輪忠兵衛は精進著しく彦右衛門が申し出たときにはすでに名工と言われておりましたし、当時小丸山の窯が海辺に近く、窯仕事の適地でないと言われておりましたので、沼田が原の佐伯窯を忠兵衛に下げ渡されたのでございます。佐伯窯の初代当主実清は器用な細工人ではあったそうですが、これと目につく茶碗を焼くでもなく、焼物方にすれば好都合とばかり、窯場の入れ替えをしたのでございます。彦右衛門とすれば理不尽に思ったとしても無理からぬところもあったかもしれませんが、幼少であった二代半六が大きくなって、坂窯で修行を重ねたあと、

坂窯上手の大釜に新しく窯を設けることになったのではございますが、再び御雇細工人に取り上げられることもなく、沼田が原の窯と違って窯も藩からの借用金を元手に自前で作り、御雇いとなることもなかったのでございます。後を引き継いだ彦右衛門もそのまま捨て置かれた格好になっていたのでございます。そのことなど見ましても、佐伯窯の家名大事とやっかみ、苦し紛れが言わせた一方的な申し立てであるとその時は黙殺されたのでございます」

広堯は刑部の長話を、ときおり合点首で聞いたのである。

「佐伯窯についてはおおよそわかったが、それぞれの窯屋の言い分がちぐはぐになっていることも、古いことじゃし仕方がないと言えばそれまでじゃが、今後さき長く残す話となると、厄介は厄介じゃの」

広堯にはまだ腹案がまとまっていないようである。この案件、すなわち焼物の統一見解を作成、後世に残すと言うことについては、藩内の限られた分野の歴史をまとめると言う、毛利始まって以来の取り組みでもあった。

「ご家老様。私奴の思いつきを先に申し上げるのも恐縮でございますが、佐伯窯の申立

書を手本といたしまして、まずそれぞれの窯屋に残る言い伝えなど書き出させ、重々吟味の上、藩にも窯屋にも正しい記録であるとして残すというのは如何でございましょうか」

「して、どこから手を付ける」

広堯は刑部の案に同意を示したようである。

「各窯屋に、家に残る言い伝えを、時はかかるかもしれませんが、出来るだけ事細かに書き出させるところから始めて見てはと存じます」

「期限はいかほどくらいかかりそうじゃ」

刑部の考えより話の進み具合が早い。

「早くて一年はかかるかと存じます。その間に、こちらはこちらで洗い出しに取りかかってみたいと存じておりますが、どこにどのような話が残っているものか見当もつきませんので、あちこち耳を欹てて聞き集める所存でございます」

「そうするとして、窯屋はどことどこじゃ」

刑部も素案が出来ているわけではないので、

「まだしかと考えているわけではございませんが、萩焼開闢以来続いているとなりますと、坂窯三輪窯それに深川三の瀬の山村窯かと存じます」

「佐伯窯はどうする」

「愚痴話の蒸し返しになっても詮無いことでございますので、この度は取り合わない方が良いと存じますが」

「それもそうじゃの、また聞く要件でも出来ればその時のことといたすか」

「そのように」

一回目の話し合いで、進める方策は決まった。

「刑部。そちも忙しくなるであろうが、と言うて、隅々まで手を貸すことも出来ぬじゃろうから、なんぞわしの声が要るときは言うてくれ。それとわかっていることとは思うが、話はあまり広まることないよう内々を心懸けての。それでなくとも世間の口の煩いときじゃからの」

落着まで十年近くかかった仕事の始まりであった。

萩焼の窯屋三軒、すなわち坂窯三輪窯山村窯に、今も家に伝わる焼き物に関する話と書き付け類をを細大漏らさず書き出し集め、藩に提出するよう通達された。期限は向こう一年と切られたのである。

一方、刑部は自身一人で、あらゆる関係資料を集めることに奔走した。まず城内から手を付けたのであるが、萩焼草創期に関する文書に出会うことはなかった。刑部とすれば事の発端が徳山での七重にあることから、各窯屋の初代もしくは、それ以前朝鮮から渡り来たときに的をしぼっていたのであるが、このときすでに皆無と言っていいほど資料を目にすることはなかった。

次に、窯仕事に携わった家臣たちの家を訪ね歩き、書き残されたものはないか幾度も聞き尋ねたのであるが、これとて残っているものはなかった。残念であったのは、勘定方の佐々木家に曾祖父源十郎が書き残した分厚い窯仕事の覚え書きがあったそうであるが、宝永二年の大火で消失してしまったと言うことであった。はっきり覚えはないのであるが、一度誰かが書き写したことがあったように思うと言うてはいたが、定かな記憶がなくこれも行き当たることは出来なかった。

待つこと一年、各窯屋から予想を超える膨大な書き付け類が提出された。刑部は目を通しながら、年月の順をそろえ、真偽の程を推察し、仕分けていったのである。

坂窯から出されたものは、早く片付けることが出来た。初代高麗左衛門が日本に渡り来たのが年端のいかない頃で、李勺光の元で焼物の道に入ってからの記憶を書き留めるところから始まっていたことによるのである。父李勺光のことについても幾条か書いてはあったが、真偽の程は刑部一人では計りかねることばかりであった。

山村窯については、家格の違いが強調されており、安芸時代のについてはさすが多くがふれられてはいなかったが、藩から出された書き付け類を見ても、さすが宗家と思わせるものでまとめられていた、李勺光の長子新兵衛の巷間伝わる不行跡に関しては、一字としてふれるものなく、宗家としてのお家大事ばかりが大部分を占め、書き連ねてあったのである。

三輪窯からの提出は一年を過ぎて、二度の催促の上やっと届けられたのであったが、よくぞここまでと思わせる微に入り細にわたった分厚いものだった。

早速、重役が集まり評定となったのであるが、見解をまとめるどころではない。どこから手を付けたものか思案さえ浮かばぬ始末である。

広堯がしびれを切らすように言った。

「これだけの書き付けをばらまいて、さてどこからというても手のつけようがござらん。どうであろう、窯屋の顔を立てて、殿の上覧とか、お褒めにあずかったという下りと、各代扶持をいくらもらったと言うことは先々記録にもなることじゃろうてそのまま認めるとして、それぞれ窯の自慢話や、今まで何をどう作ったとか言うところは切り捨てたがよかろうと思うが如何かな」

刑部が重役どもを差し置いて、話をつないだ。

「仕事ははかどると思いますが、私がひと当たり目を通したところでは、真偽の確かめようもないところが多々ございますことと、窯屋の申し分の中には話が全く食い違って折り合いのつきかねるところもございます」

「それは仕方あるまい。それぞれに勝手な言い分を書き出させたのじゃからの。言わば、

これからが仕事じゃ、何年かかってもええから、この先何百年たって、誰が見ても聞いても納得のいく話に作って置かんとの」

広堯も持てあまし気味なのか、事を急ぐ気振りはない。だが、刑部には八方目配りした上、疎漏のない歴史作りが課せられたのである。

坂窯から提出された累系伝書は穏当なものであった。ただ、三輪窯三代となる利以が三代を継ぐ前、坂窯に弟子入りしたとして、三輪窯を坂窯の弟子筋の窯としているのに対して、三輪窯では焼物技術の相互交流を藩から指示され、三輪初代忠兵衛の名代として坂窯に出向いた時期があるとされている。坂窯は朝鮮からの渡来技術であり、三輪窯は明国からの技術である。毛利藩とすれば焼物の技術向上のために三輪窯の言う説を取ったことに妥当性を見る。

このように窯によって解釈の違いが散見でき、窯屋では自説の正当性にこだわりを見せるのである。

このような擦った揉んだがもう何年も続き、三軒の窯屋の辻褄のあった見解をまとめ

ることが絶望的にさえ思えるようになってきた折のことである。

宝暦も十二年となったが、年月を費やすばかりで話のまとまりは一向に決着しそうにない。業を煮やした益田広堯が窯屋三軒の当主を呼びつけ、厳しい申し渡しをしたのである。

「そちたち三軒の窯が、今や毛利藩にとって掛け替えのない大事な仕事であることは知っての通りである。と言うて、そちたちそれぞれが勝手を言い立てていたのでは話の収拾がつかん。これから後世にそれぞれが辻褄の合う話を伝えなければ、折角の萩焼に汚点を残すことにもなりかねん、ひいては毛利藩の名誉に関わることにもなる。よいか。心して聞くがよい。身勝手に過ぎると藩御用窯の取り消しも考えなければならぬ。此度のことはそれほど大事なことと心しておくがよい」

窯当主たちには当惑ばかりが浮かんでいる。刑部が宥めに入った。

「ご家老様も、そちたちの言うことに耳を貸さぬと言われるのではない。伝え残すことの大事もよくご存じのことなのじゃ。ただの、話がまちまちになっていることや、藩に

とって不名誉となりかねぬことは、この際きれいにした上で後世に残そうと言われるのじゃ。そこのところをよくわきまえてくれぬと困るのじゃ、よいな」

御用窯取り消しは身に堪えたようで、どうしたものかと口をつぐんでしまった。

「この話が始まってすでに五年近くになる。ぼちぼち取り纏めにかかってもよいと思うが、異存もござるまい。そのつもりでよろしく頼むぞ」

刑部が話に念を押した。

山村窯当主光長の書き出したものには、万全の配慮がうかがえるもので、始祖李勺光が朝鮮から渡り来たことも簡潔にまとめられ、李勺光の子山村松庵の萩城下では誰一人知らぬもののない出来事には触れることなく、唐人山の坂窯を出て川上村湯本村と移り住んできたことが事細かく記されていた。

一方、坂窯当主助八が差し出したものは、簡略なもので、今では萩焼宗家を以て任ずるものの、他の窯との関連因縁については総て取り除かれてあった。

この二つの窯に関しては、それぞれ当主が藩の意向に恐れをなしたものか、無難な綴

りに終始していた。
これに引き替え、三輪窯当主八郎兵衛利之のものは、老いの一徹もあり家伝の話にこだわっていた。次代を担う十蔵利近も利之に劣らぬ頑固者で、いつも二人がかりで刑部を困惑させていたのである。
利之も利近も家に伝わる話を疑うことなく、真実として伝え残したいと譲る気配は見せない。業を煮やした刑部が、
「そちたちは頑なに言い張るが、二代にわたって入り婿であろう。どうせ婿入りあとで聞き及んだに過ぎないことではないのか。そこまでこだわり続けることもあるまい」
と、話の持って行き場に困ったように言った。
「私どもとすれば、それだけに家に伝わる話を曲げるわけに参らぬのでございます」
利近が切り返した。
「そうしたものかの」
刑部は途方に暮れざるを得ないようなところに追い込まれている。
「家内は二人とも家の子で、血縁は一度も切れてはおりません。話もまっすぐなものでございます」
「何度も言うようだが、そちの家に伝わる話が嘘であるとか間違いであるというのではない。そこをわかってくれないと困る。これから少し手間取るかも知れんが、話を書き残してよいものかどうか、一つずつ詮議していくこととといたそう。それでなほ決めがたいときはご家老の裁可に従うことでどうじゃ」
この日も話し合いはお流れの態で終わってしまったのである。
そも、三輪窯には杉ヶ峠開窯以来の事実が、ほぼ正確に伝わっている。しかし杉ヶ峠で作られたものの行方や、吉見から坂崎、亀井とつづく津和野藩との折衝事についてはほとんど知らされていない。今となっては毛利でさえ不明となっている事柄を、蒸し返すことはない。刑部は広堯と密なる連絡を取り、一件ずつ決着を積み重ねていくこととした。
まず最初の難関は、李郎子と赤穴内蔵助を一つに繋ぐ糸を絶ち切ることであった。刑部は内蔵助の父を存在させ朝鮮人とし、名は不詳と納得させた。利之は内蔵助の年令が

うまくつり合わないと異を唱え続けたのであるが、広堯、刑部ともに杉ヶ峠での最初の仕事の露見に及ぶ危険を避けるためには、萩に李郎子の名を残すことは絶対に出来なかったのである。

難問は続く。三輪姓の始まる発端である。毛利としては、坂崎出羽守との因縁は、これまた残すことは出来ない。利之、利近ともに坂崎の名だたる武将であった三輪の先祖は、三輪家の誇りとして、消し去ることは出来ないと強硬である。広堯に至っては、三輪姓の出処にこだわるか、そのためには三輪窯は潰してもかまわぬと覚悟は出来ているかと迫るところまで行ったのである。利之にも陶工としての悲しい性があった。窯を捨てるわけにはいかないのである。三輪の改姓に関することは一切不明と書き残すことを渋々ながら承知したのであるが、せめて三輪家に三輪改姓のいきさつを語り継ぐことだけは、この先咎めを受けることのないように取りつけて置いたのである。

利近が三輪姓にこだわりを見せたことが、意外な役立ちを果たす結果も生んだ。藩から御雇焼物細工人として召し出されたのが、始めて三輪姓を名乗った忠兵衛であることは動かしがたい事実として皆の認めるところである。その忠兵衛を三輪窯初代として、

李郎子すなわち赤穴内蔵助を見えない過去に遠ざけることが出来たのである。とは言うものの総て消し去るわけにも行かず、また内蔵助の赤穴姓と三輪姓も繋いでおかなければならない。ここにも苦心の跡を残すことになった。忠兵衛の弟を存在させ、赤穴姓のまま鉄砲組足軽に召し出されたことにしたのである。

ここに曖昧ながら三輪窯存立の筋書が出来上がり、慶長期のことは坂窯山村窯らとともに確証の一つも書き残さぬまま、各窯の略系伝書の取り纏めを終わったのである。

十年余の歳月を要したものの、明和四年山村窯からの提出を切りに、益田広堯としては語り継ぐに足りる出来映えと自賛出来る累系伝書を集めることが出来たのである。藩主重就公もご満悦の態で、

「此度の焼物の一件、よくぞまとめたものじゃの。後世に残しても立派なものじゃ。そちにこのような才覚があろうとは、広堯、見直したぞ。これで毛利家もこの先永劫、世に恥ずことはないの」

広堯は思わぬお褒めに預かり、面目を施すことが出来たのである。この重就公賢君と

して誉れ高いのであるが、負けず嫌いなところもあり、それから数年後、防長二国内の「古器考」の編纂を林以成などに命じたことは、案外知られていない。

この年、明和四年の萩は暑い夏であった。盆も過ぎて吹く風にも秋の気配が見え始めた頃である。ようやくの一件落着を待っていたかのように、三輪十蔵利近が益田広堯を訪ね、異な事を申し出たのである。

「身の程もわきまえず、参上することをお許しを頂きましたこと、ありがたくお礼申し上げます」

「そう堅くするな。略系伝書の一件では、随分と無理を言うたの。殿もえらくお慶びであったぞ」

広堯も安堵に包まれた、ご機嫌の応対である。

「ありがたき幸せにございます」

身を堅くする利近に、同道した藤屋刑部が助け舟のつもりだろう口を挟んできた。

「此度、無事終わったのを機会に、利近が一度杉ヶ峠に足を運んでみたいと申すのでご

ざいます。先代利之もそのように申しておりましたが、此度の話途中で亡くなってしまいました。先代からの念願でもあり、お許しが出るものであれば、私も一緒してみたいと思う次第でございます」

広堯は意外な面持ちになった。

「まだ何ぞ調べることでも残っておるのか」

「決してそのような訳ではございません」

刑部が急ぎ打ち消した。

「それならよいが、またどうしたことじゃ」

広堯に何か心配事が浮かんだのかも知れない。

「それ、利近、言うて見い」

促された利近が、思いの丈を話し出した。

「この度、わが家の伝書を整理する良い機会となりました。先代とも相談しながらのことではございましたが、目を通すうち、海を渡ってこられた李郎子様の生涯を考えさせられて、ぜひ一度最初に窯を築かれた津和野のはずれ杉ヶ峠をこの目で見てみたいとい

う思いに駆られてきたのでございます。藤屋様は詳しくご存じかとも思いますが、先年七重とか言う女御が訪ね来て、杉ヶ峠のことと申しますか、淺野家中に伝わった話をなさったと聞いております。漏れ聞いたところでは、私には得心いたしかねるところもございます。津和野城下の紙問屋の主がその界隈に残す謂われ書きにも書き加えているそうでございますれば、これにも一度目を通してみたいと存じまして、何とぞお許し頂きとうお願い申し上げる次第でございます」

広堯と刑部は、略系伝書の整理中は、頑固者の職人であると思い込んでいたものが、話を続けるうち、人情もろさも持ち合わせた男であったかと、十年に及ぶ己の迂闊さに思わず苦笑させられたのである。

広堯は、津和野に入って萩焼三輪窯は決して口にしないことを条件に、訪ねることの許しを与えた。刑部も同道することになった。広堯から亀井藩に話を通すについて、萩焼の支配役である藤屋刑部が遅くはなったが、七重の話を、念のため見聞してみたいと言うことを表向きの理由として入国を求めたのである。主役は逆転してしまい、利近は

刑部の家来として、赴いたのである。

道々、五日ほどの日程をどう割り振って無駄なく過ごすかなどゆっくりと話し合いながら足を運んだ。まずこの旅の間、利近は郡司姓で通すことにした。入り婿前の旧姓である。亀井から勘ぐりを受けることは頭から避けたのである。

津和野入りしたときは、山あいの城下に秋の陽はなく、夕闇が迫る暮れ六つを過ぎる頃だった。一日としては無理な旅である。汗を流し夕食を取ると早い床についた。

翌朝、宿に頼んで金屋金右衛門が在宅かどうか確かめたのであるが、あいにく出かけており、戻りは三日先という。これは後のこととして、広堯の指示通り郡奉行所を訪ね、形通りの挨拶もそこそこ、早速杉ヶ峠の窯跡を訪ねることにした。案内人を付けようという奉行所の親切も丁重に断り、宿で手配した山に詳しい材木屋の番頭の後に従った。

番頭は六蔵と言って、四十過ぎで働き盛りの達者な男である。

「毛利様の御家中とお聞きして参りました。どのような御用向きかはお聞きしておりませんが、山深いところでございます。片道一刻もあれば行き着けると存じますが、何ぞ

珍しいものでもあるのでございますか」
六蔵が物珍しげに聞いてきた。
「もう百年も昔のことになってしもうたようじゃが、朝鮮の方から焼物細工人が来て、焼物を作っていたという話を聞いての、どのようなところで、何か作ったものの欠片でもないものかと思うての」
刑部はあまり気を遣わずに済む男を選んだつもりで、気楽な話で山道を歩いた。
「そのような噂は昔からございました。その証拠に今でもあの辺りを唐人屋と呼んでおります。噂では老人がぼそぼそと仕事をしていたようでございますが、どのように暮らしを立てていたのでございましょうか。考えてみれば不思議なことでございます」
利近は話を聞くだけで無言でついていったのであるが、百年という歳月の長さばかりが胸に去来していた。

やがて刑部と利近の二人が目にした窯跡は、無残な荒れ放題の姿で残っていた。刑部は七重と会ったときのことを思い出していた。七重ならずとも事情のつながる者には、

思わず涙を催すこともうなずける。利近はそこここに散らかる欠片の一つ一つを丹念に手に取って見た。そこには感無量な思いが浮き出している。刑部にはそんな利近の姿を目にしたことが、杉ヶ峠を訪れた一番の意義であり感慨であった。
「ところで六蔵さんよ。金屋金右衛門は存じであろうの」
「あの紙屋の金右衛門さんでしょう。よく存じております。あの人に何か」
突然な話に怪訝な顔で聞き返した。
「いやな、十年も前じゃがちょっとではあったが一度会ったことがあるのじゃ。そのおりの話にこの窯の話をこの界隈の何とか言う村の謂われ書に書き留めておくように話しておったが、なんという村のどのような謂われ書か、存じてはおるまいの」
「さて、ここは今では唐人屋と申しますし、地続きで谷を下りますと福川村、そして柿木村、もっと広く申しますと吉賀とも言います。昔からのこと書き留めてあるとすれば、吉賀の大庄屋ではございますまいか」
六蔵の話は少しばかり心許ない。
「その大庄屋を訪ねるとして、今日これからでは無理であろうか」

刑部はすでにその気になっているようである。
「行き着くのに、城下に戻るほどかかります。さて、どうでございましょうか」
六蔵はあまり乗り気でない。
「藤屋様、今日のところは一端城下に引き返し、金右衛門さんの帰りを待ってみては如何でございましょうか。その謂われ書にどのように書き留めてあるかも、書いた本人であれば詳しくわかるのではございませんでしょうか」
「そうよの。取り立てて重要なことでもないからの。そういたすか」
刑部は六蔵の手前、事も無げにあっさりと引き返すことにした。

翌日、刑部たち二人はそぼ降る秋雨に、宿を出ることなく、旅途中のよい骨休めとなった。この旅で刑部は利近の人間味を次々と発見したのである。萩を発ってからと言うもの、まず口数の少ないことが驚きであった。略系伝書が落着するまで、我が窯大事を言い張り続けたのは何だったのか。刑部は利近の育ちに興味が湧いた。宿も悪い宿ではない。落ち着いて話の出来る静かな宿である。

「そちが三輪家の入り婿となったことには、何ぞ訳でもあるのか」
刑部は世間話のように、気楽に持ち出した。
「深いわけはございません。家が近くであったことから、子供の頃から遊びに出入りしておりましたのが、ついつい」
郡司家は鉄砲鍛冶など束ねる家柄で、同じ沼田が原に住まいしていた。利近はそこの次男坊で、子供の頃から土いじりのような物作りが好きで、合棒とていないのに日課のように三輪窯に出入りしていたのである。
「そうか、じゃぁ、生まれついて縁があったのじゃろうの」
「それは何とも言えませんが、そう言えばそうかも知れません」
外の雨を見ながらであるが、二人とも話に弾みがつかない。
「何代にもわたって焼物を作るという仕事は、それなり苦労も多いことじゃろう」
刑部が話を焼物に切り替えた。
「始めはただおもしろさが先に立っておりましたが、この度家系を一から洗い直すことができまして、この世のしがらみと申しますか、どの代のご先祖もそれなり苦労をなさ

ていたことがよくわかったような次第でございます」
「それはよかった。そちのような入り婿にとっては、先祖の因縁を知るにまたとない機会であったと言うことになるの。祝着ではないか」
利近に、話したいことが出てきたようであるが、顔が逡巡している。目の動きが忙しい。
「利近、何ぞ話したいことでもあるのか」
刑部が利近の様子を見て取った。
「はい。このようなことをお話ししていいものか迷うのでございますが」
利近が言いよどむ。
「心配するな。ここは他国じゃ。誰にも気兼ねは無用じゃ」
刑部も、外の雨に間が持たないのである。
「そうでございますか。先だっていつかのこと、ご家老様がおっしゃったことでございますが」
「ふん、それで」

刑部の合いの手が早い。
「この度、略系伝書の整理が終わったことで、毛利家また藩に取りましても、後世に恥じることのない焼物の成り立ちをはっきりさせることが出来たとおっしゃいました。私もよかったと心から喜んでおります」
「そうじゃの」
利近が次の言葉を選んでいる。
「それで、如何した」
「海を渡り来られた李郎子すなわち赤穴内蔵助様や初代休雪忠兵衛様のことを考えますと、本当にこれで良かったのかという思いに駆られるのでございます。と申しますのもとくに内蔵助様の生涯を闇の中に捨て去ったようで、まだ私如きには知るよしもない深い事情が奥に潜んでいるのでございましょうが、あまりにもつれない仕打ちに思えて、心が痛むのでございます」
聞き入っていた刑部が、真顔に思いを沈めて言った。
「ここだけの話であるが、利近、よくぞ言った。この刑部、そちを見誤っていた。人と

しての心の置き場所を間違ってはいないぞ」
「そうおっしゃっていただきますと、少しは心が和んで参ります」
降り止まぬ雨が、二人を閉じ込め、たっぷりと時間を作ってくれる。話が焼物から逃げることはなかったが、思い出したようにゆっくりぽつりぽつりと話が続いていったのである。

秋雨の降り続く翌夕七つ頃、言伝てを聞いた金右衛門が宿にやってきた。
「先ほど帰って参りまして、お待たせいたしましたこと申し訳ございません」
金右衛門は相変わらず腰が低い。
「しばらくぶりじゃの、金右衛門。息災であったか」
刑部にすればさほどでもないのであるが、親しさを前に出して声をかけた。
「ありがたいお言葉でございます。何とか細々でございます」
「あれから十年になるが、遅蒔きながら、唐人屋を一見しておこうと思うての」
「そうでございますか。あれからも荒れる一方で、私もそう何度と足を運んだわけでは

ございませんが、何しろ山奥のことございますし仕方のないことでございましょう」
金右衛門の興味の熱は下がり気味である。
「あれから何かに書き留めて置くような話であったが、どうした」
「はい。唐人屋界隈を大きくひっくるめて吉賀と申します。そこの庄屋に辺りの出来事を書き加えていく吉賀記という謂われ書がございますので、そこにあの七重の話を一言一句間違いのないよう書き留めておきました」
金右衛門は急に不安に襲われたように、
「何ぞ私が間違えでも起こしたのでございましょうか」
刑部は体中で打ち消すように、
「そのようなことはござらん。心配無用じゃ」
「そうでございますか。それを聞いて安心いたしました」
「それよりの、地下で何か新しい話でも出ていないかと思うての」
金右衛門はちょっと首を傾けるようにして、
「地下者の話でございますが、歳取ってからのことは話にも残っておりますが、若いと

きはどうしていたのか、今でも不思議話になっているようでございます」
「やはりそうであったか。考え見ればそう言うことになるの」
刑部はとぼけるより外ない。ちょっとの間、話の切れたとき、利近が思いもかけぬことを口走った。
「金右衛門さんとやら、あそこに墓など建てて差し上げたいと思うが、その時は力になってもらえるかの」
あまりにも突飛なことで金右衛門は言葉が出ない。それよりも驚いたのは刑部である。
「これ、利近。滅多なことを言うでない。同じ焼物仕事に携わる者としては情に忍びぬところはわかりもするが、今ここで取り上げ決めるような話ではござらん」
利近は素直に聞いている。
「わかっております。もしお許しがいただけたらの話でございます。いざとなれば重い石のことでございます。このご城下に手助けいただける方がございませんと出来るものも出来ないのではないかと存じまして、ちょっとお聞きしただけでございます」
利近が話を退いたので、安堵も手伝って、

「冗談も過ぎると、驚くではないか」
刑部は一応のところ胸をなで下ろしたのである。
翌朝、金右衛門は吉賀記に記したという下書きを持って再度訪ねてきたのであるが、その時、
「どうも萩の方とはつながりのない話のようなので、ついついそのままとなってしまいました」
と、詫びるでもなく、言い訳を口にしたのである。しかし刑部には大きな安心を得る言い訳であった。
萩への戻り道々の話である。
「利近、お墓の話どこまで本気なのか。まさか改めて菩提寺まで縁組みしようというわけでもあるまい」
「そこまで深く考えていることではございません」
利近もまだ思案の中にあるだけで、後々仏祭りを続けることまでは考えていないので

ある。
「戻ったら、一応ご家老様にお伺いは出してみてもいいとは思うておるが、さて、なんとおっしゃるか」
「ありがとうございます」
「待て待て、まだ礼を言うには早すぎる。さりとて、あの荒れ果てた跡を目にすると、到底このまま放っておく訳にもいかないと思うのが人情というものであろうの。そちが墓だけでもと思うのも無理からぬことと、その思いは良くわかるぞ」
いつの間にか、刑部も利近の思いを共有していたのである。

刑部は萩に着くとすぐに広堯の屋敷を訪ねた。杉ヶ峠を見聞した報告が目的であったが、話が利近の墓の話に及ぶと、広堯は怒りを顕わにした。
「利近奴、何を考えておる。三輪窯代々の苦労に免じて無理も聞き入れてやったことに増長して、勝手を言うにも程がある。明日にでも連れて参れ、きつく叱りつけてやるわ」

刑部は、はたと困った。しかし話したからには仕方ない。

翌朝指示された時刻を違えず、利近を伴い再度広堯の屋敷に赴いた。
「利近、お前は何を考えておる。勝手な言いぐさもほどほどにせい」
姿を見せるやいなや、立ったまま頭ごなしに怒鳴りつけた。
「ご家老様、藤屋様がどのようにおっしゃいました存じませんが、私はふらついた出来心で申し上げたのではございません。心から墓を建てて差し上げたいと思うたのでございます。すでに藤屋様からお聞きのことと存じますが、杉ヶ峠は荒れ放題でございました。歳月とはそのように非情なものと存じます。決してこのさき長く供養を続ける気もございませんし、私が建てたと誰に誇る気持ちも毛頭ございません。この十年、内蔵助様の生涯をじっくりと考えさせていただきました。そしてこの度内蔵助様にもっともご縁の深い杉ヶ峠に参りまして、内蔵助様が生涯のほとんどを過ごされた跡を見せていただいたのでございます」
広堯は渋面を動かさず聞き入っている。刑部はただうなだれているばかりである。利

近は静かな口調の中に堅い決意を込めて先を続けた。
「ところが、今、内蔵助様は歴史の陰に追いやられて、誰一人として目を向ける人とてございません、これもまた人の世の常だと言えばそれまでのこと、私一人がどう足掻いたところで詮無いことでございます。そこで思い悩んで末、ほんの刹那でもいいから、内蔵助様の生涯に思いを馳せた者がいた証として、墓を建て、後の世まで残しておきたいと思うのでございます。毛利様の元で萩焼は後顧の憂いなく、誰にも恥じることのない立派な形が出来上がりました。ついでと申すと不遜かもしれませんが、内蔵助様に不憫の一欠片でもかけて差し上げ、ここで改めて果たされた労をねぎらって差し上げたい一念のみでございます」
利近が一息ついだ。その時、目には哀願がにじみ出ていたのである。
「そちの存念しかとあいわかった。話も聞かず声を荒げてしもうたことすまなかった」
「滅相もございません。ありがたき幸せに存じます」
深々と頭を下げる利近に、
「礼は早い。それにしても利近、墓を建てること安くはないぞ」

利近は、広堯が心を動かせてくれたと、安堵の喜びを感じた。
「ところで利近、内蔵助という男、明国から知らぬ日本に渡り来て、毛利の言うがままの仕事に明け暮れた生涯であったようじゃが、どのような思いで長い歳月を過ごしたのであろうの」
広堯も内蔵助の生涯には、一方ならぬ興味を持っているようである。
「わかるようでわかりません。適わぬことではございますが、会えるものならぜひ一度お会いしてお話の聞きたい方でございます」
「さもあろう。同じ細工人として残念じゃの」
刑部が口を挟んだ。
「あの杉ヶ峠でございますが、あのまま跡形もなく朽ち果ててしまうことでございましょう。せめて李郎子か又左衛門の名だけでも残してやりたいものでございます」
話が切れた。話が思わぬ方に進んでしまったと言うことなのである。
「そうか。墓を建てるか。それもええかも知れんの。まぁ考えてみるか」
利近はなほも自分の思いで話を続けた。

「李郎子様が明国から日本に渡り来られて、生涯のほとんどを杉ヶ峠で過ごされたようで、最後もあそこから冥途に旅立たれたのでございます。お墓と申しましても、冥途への道標のつもりでございます。おそらく李郎子様が渡られた三途の川は、杉ヶ峠の谷川の水のように澄んだきれいな川だろうと思います。着かれた先は、大きな海に流れ出てはるかな旅のあと、お生まれになった明国ではないかと思っております。そこはきっと西方浄土に間違いないと思います」

広堯に、いつの間にか姿を現したときの勢いはどこにもなくなっていたのである。

話は現実の中で進んでいき、杉ヶ峠に三基の墓が姿を見せたのは、それから遠くない日のことであった。利近が金屋金右衛門に依頼することで、萩との関わりは痕跡も残してはならぬという条件で行われた。金右衛門にも萩からの依頼によることを書き残すことはならぬと厳に達しられた。

三基の墓となったのは、利近一人の才覚で、李郎子に初代休雪忠兵衛夫婦を供につけたと言うことである。無論俗名などない。戒名命日なども曖昧なものであるが、利近に

は取るに足りないことだったのである。しかし宝暦三年、七重が訪れたおりなかった墓が、忽然と現れるのである。何の記録にも残らない墓なのである。利近はここに一つだけ謎を解く鍵を残した。忠兵衛のものとおぼしき墓の頭を三つの山らしき形にしたのである。三つの山が三輪山であるのか、あるいは三つの輪であるのか、何も言わず立ち続けるのである。

利近には、会ったこともない李郎子ではあるが、この度集められた略系伝書が毛利にとって後世に恥じないと言われた。ならば李郎子が生涯をかけて行った仕事の数々はどうだったのだろうか。風雨に弄ばれた生涯であったであろうと推察しながら、李郎子は自身の生涯に恥じるところはないと信じていたに違いないと、利近は自分に何度も確信を押しつけた。

数奇な運命なのだろう、墓が出来上がったという知らせを受けたとき、長いはるかな旅を強いられた李郎子の見送りが終わったという満足感が、利近の心にひたひたと押し寄せていたのである。

「完」